様なき不仕だら千萬の體たらくである。抑安東少將は何の必要あつて突飛にも南門を突入すべき地點と選定したのであらう、窮鼠かへつて猫を嚙むといふ世の諺にもある通り、三門悉く閉鎖して單に一門しか開けてない場合、其一門の退路を塞いだならば敵の必死になるは必定で、決死の敵は侮り難く少數なりとも容易に之を破るを得ぬのは、いはずと知れたことであると自分は思ふ。況んや此南門を攻撃するに當つても、北門、及び東西門とも何等攻撃の有様を見せず、悉く南門に向つて夜暗であるとは申しながら、自から選んで南山と金州の間に這入り込み、態々腹背に敵を受けて散々な目にあつた上に、軍の攻撃計畫に少なからざる手違を生せしめたのは、此戰鬪中比較すべきものなき失體で、安東閣下にとつては實に一生の恨事である。若し此の際に此様な巧妙を過ぎて却つて拙劣の極端にあと戻りする様な、極々突飛なる行動を執らずして、北門及東西門を一度に猛烈に攻撃し、壁上の敵兵を射すくめて、其射撃の援助の下に三門齊しく破壞を企てたならば、如何に手文夫に閉塞してあつても一つ位は破れる筈である。もし此様にしても何れの門も破れぬ場合には、此三方面で盛んに牽制的に攻撃して、城内の守兵をして奔命につかれしめて

其虚に乘じて南門から突入するのも一策であらう。現に此少しく後に於て第一師團はさしたる大困難もなく敵火の下に東門を破壞したではないか。何でも始めの計畫では北方面から牽制的に攻撃し、其間潛かに南門に近接して之を爆破して突入する都合であつたらしいが、實際に於ては北方からも西方からも牽制は少しもなかつた樣である。それ而已ではない此金州攻撃隊に向て、不意に南山から出撃を被むり挾み討ちになる危險を防がんとして、金州西南無名小川の附近に展開したる歩兵第三十八聯隊の一大隊は、城壁上から射撃を受けた時には應射せずして、豫定の位置まで進出した樣であるが、此豫定地に工事をするに當つて敵の前哨の退却しつゝあるものと、如何なるはづみか射撃を交換しだして隨分烈しく亂射したらしい。これが爲に敵は全く我夜襲を感付いて、城壁上から近距離の猛射を浴びせるので、如何に夜暗でも其損害は莫大であるのみか、夜襲には持つてこいといふ大雷雨が起つたので我には非常に都合がよかつた筈であるのに　何所まで　まをやつたのかは知らぬが此大雷雨が却て少なからず夜襲を妨害して　爆藥は濕潤して全く發火しなくなる突撃部隊の一中隊は道を失なつて飛んでもない海岸へ迷ひ込む、敵は勢に乘じて近

距離瞰射をなし　更に決死者を撰抜して爆藥の火消しを命ずるといふ樣な、殆んど滑稽に近い樣な城門の破壞のやりそこないを演じ。見たこともない珍物の光彈などで照らされて　南山の砲兵から背中へ少なからず砲彈の御見舞を頂戴し、大狼狽大混雜をして居る所へ城兵の退却援護として、僅々露兵半中隊が南門附近へ進んで來たのに　安東旅團は腰を拔かさんばかりに喫驚して、退へ退へと大音聲に退却を命令したので　夜襲の失敗のその上に大雷雨と敵の逆襲に出會たといふのであるから、地震、雷、火事、爺、一所になつて降つて來た程な大騒動で、金州城と海岸との間を逸足し出して退却した。折もをりかな丁度此の前方部隊の混雜至極の退却最中へ、淺田第七旅團はその樣なことは夢にも知らず、夙くの昔しに金州城は我第十九旅團の手に入りしものと心得て、軍命令の豫定位置に就かんとして前進して來たものであるから。此の狹まい城と海岸との中間で、旅團同志が前進と退却との鉢合せを始めたので、實以て滑稽千萬なる混雜を生じて其儘一緒に舊陣地へ退却した。これが爲めにはずつと後方に居た砲兵までが、夜通し行軍して金州城に近づいて、更に又右轉回前へをして舊陣地へ退ぞくといふ、無益千萬なる大混雜が出來たのである。

戰史の上には爲めに多少の混雜を來したとあるが、この多少なる文字は大に注意すべき文字ではあるまいか。

此夜襲に失敗したる安東旅團、が金州城の攻略などはそつちのけにして、金州西北森林中に逃げ込んだのは已むを得ぬとしても、淺田第七旅團は何故に退却したのであらう。金州城が未だ陷落して居ないとすれば、それを捨て置いて前進するのは、いふ迄もなく危險であるのは知れて居るけれども、安東少將と相談の上、今から南山を攻擊するのは一般の目的に反するといふ珍妙なる理由で、軍が豫定の位置に進出すべく定めた、丁度其午前四時三十分頃であつたに係はらず、終に龍王廟東方の舊陣地まで退却したのは甚だ其意を得ざる行動である。進退の兩旅團が暗中で衝突して前旅團の敗勢を後旅團に迄波及せられて、終に停止することを得ずして舊位地に退却隊伍を整頓したといのならば、これ或は事實有り得べき事情の如く思はれるが。歩兵第十九旅團も大したる支障なく森林中へ逃げ込み、歩兵第七旅團も多少の混雜はしたが、左までに隊伍紊亂にも陷らなかつたのであつたならば、師團長から何等退却の命令もないことであるから、後命を待つ爲めに其現在の位置に停止する

なり、或は又歩兵第十九旅團の敗退を强て押し止めて、自己の獨斷を以て此の旅團に協力加勢して、更に西門から金州城を攻撃して之を速に略取するのも一方法であらう。何を苦しんでか丁度適當なる時機に適當なる位置まで進んで居りながら、時機尙ほ早しとして退却したのであらうか。其事實のどうであつたかは知ることを得ぬ――否强がちに穿鑿もせぬ――が、あの樣な戰史の記述し方では如何にも自分は不審に堪へぬ、變に邪推をまはして考へると、進退の兩旅團が衝突の後大混淆を生じて、つまり舊陣地までどつと崩れて退却したのを、何とか工夫をして體裁よく繕らうて記述したのではあるまいかと思はれるのも、强がち非常に無理なる邪推のし方であるとはいへまいと思ふ。要するに金州攻略は軍の命令が餘り大事をとり過ぎて、本攻撃開始の時機と接近し過ぎた而已か、其實施に任じた歩兵第十九旅團は、夜間であるに係はらず戰術の原則を無視して、餘りに巧妙なる行動をなし、一舉金州城内の敵を降伏せしめんとする樣な、餘りに手數のかゝる行動をやつた爲めに、且つは夜襲と城門破壞との準備が殆んど整頓して居らなんだ爲めに、其計畫は暗夜雷雨の爲めに至る處で齟齬を生じ、夜襲部隊は至る處で連絡を失なふた上に暗

中の濫射を始め。城門の方では爆藥が用を爲さぬ上に持參の梯子は何れも其丈短かくして、何としても壁上には屆かぬといふ大へま續きの其上に、勝に乘つゐる敵の城壁よりの猛射を受けたのであるからたまらぬ。其任務を全く放棄して退却するといふ失態を生じ、更に他の一旅團をも砲兵聯隊をも大切の時機に後退せざるを得ざるに至らしめて、此の大切なる第二軍の全力を用ゆる最初の戰鬪に、早朝第一に大けちを附けて仕舞たのは、安東旅團が餘りに巧妙なる夜襲を計畫したのが、抑第一の此失態の原因であるといふを自分は遠慮しないものである。歩兵操典第二部第八十二の後半に曰く

『然レトモ通視困難運動不便ナリ從ヒテ軍隊ノ協同動作及指揮ノ統一困難ニシテ動モスレハ錯誤ヲ生シ易キモノトス』

とあるのは讀者諸君も御承知であらう。これが爲めには可成其攻撃の計畫を單純簡易にして、且つ可成だけ晝間に於て十二分に諸準備を完成して置かねばならぬ、然るに安東少將は彼の樣な無類の好目標となつて、夜間と雖ども何としても錯誤を生ずる患のない、高い大きな金州城を夜襲するに當つて、此の第八十二の前半に而

已眼を注いで後半の害に頓著せず。晝間でも容易に出來さうにない味方同志が背中合せをする樣な、頗ぶる不思議な計畫を立てたる上に、近い北又は西門に迫らずして、極々遠い南門から味方の方へ向つて突入するといふ樣な奇中の奇策を弄したので、前述の樣な大錯誤大失敗に陷つたのである。古來内外諸國の戰術書が夜戰に當り巧妙なる動作を嚴に戒めたのは、蓋し此樣な失敗の經驗に懲りたる結果である。知つては居られ樣が戰術の原則は單に理論から來たものでない、それをよく〳〵考へて平素操典等を熟讀玩味して居らぬと、忽ちにして此樣な大敗北を來すのである。

與軍司令官は此の敗報を聞いて、如何に心配されたであらうか。それは兎に角、當の責任者たる小川第四師團長は部下兩旅團の此の腑甲斐ない有樣を、金州西北の高地に達したる後始めて知り、例のあの氣性であるから齒がみをなして殘念がつたが致し方がない。其中に雷雨で行進路の破壞した關係から金州城の東方へ進路を換へた、第一師團の松村旅團の一部は不意に敵の壁上よりの射擊を喰つたが、少しも之に狼狽せずして直に東門を破壞して、驀然城内に突入したので敵は一支もなく南門から南山さして敗退した。

以上の如き番狂はせはあつたけれども、他の兩師團の兎にも角にも順序正しく第二期終了の位置を占めたのと、松村少將が獨斷で金州城を占領してくれたお蔭によりて、其間に一時混亂したる第四師團も、漸くにして其隊伍を整頓して前耻前辱を雪ぐべく、上下一同眞に決死の覺悟を極めて敵に向て奮進したので、甚だしく他の師團との連繫を破り、他の師團の攻擊の時機を遲緩せしむることなく、第二期の位置の終りに就き得たのである。と斯く體裁よくいふて仕舞へばそれで何でもない樣なものだけれども、軍司令官が步兵操典第二部第八十二第二項の『大部隊ニ在リテハ夜暗ヲ利用シテ敵ニ近接シ』とある條文によりて、部下三個師團の大部隊を夜間に移動接近せしめて、拂曉に於て敵を攻擊し樣とした計畫には、此失敗が少なくも二三時間の徒費を與へた爲め、即ち午前四時半から全砲兵の射擊を開き、朝靄將に消へんとする前に於て敵の前まで近迫し、拂曉正々堂々と攻擊し敵陣地に突入せんとした攻擊の好機は、殆んど其の大半を逸し去らしめたので、終に晝間此の不利なる地形に於て攻擊を强行せねばならぬ羽目になつたのであつて、斯く全體を考へて見ると隨分此の失敗の價値は、決して餘りに廉價に見積るべき程度のものでないか

も知れぬと自分は思ふ。

さて愈、二十六日の拂曉になつて見ると、昨夜の篠つくばかりの大雷雨の餘波りで、午前四時半よりの砲戰開始は、漠々たる朝霧の爲めに豫定の如く實行し得なんだ。與軍司令官は此朝早く朝陽寺西方高地の豫定位置へ進んだが、前にも陳べたる如き濃霧四塞の有樣で彼我ともに少しも全般の景況は見へぬ。その中に少しく霧が薄くなつて來たので、豫定に遲くるゝこと約一時午前五時半頃には二百門に近い全砲兵の、壯烈猛激なる大砲擊が開始され敵の百門近い重輕砲も同時に之に應射して、こゝに南山攻擊の舞臺の幕は勇ましき鳴物で勢ひよく開かれたが、此日軍司令官の選定して其司令部を置いた位置は、最初は此の朝陽寺西方の高地であつて、更に其後ち肖金山頂に移つたが、此の位置に就て自分は少しく議論がある。此兩地とも展望自在なる高地であつて、南山の敵情を一眸の中に瞰下し得べきは勿論、又併せて我軍全體の戰況も一目瞭然たるを得べき好位置であるが、惜しむべし此兩高地ともに一は二百四十餘米突、一は百五十五米突といふ峻險なる山頂である爲めに、展望だけは自由自在で申分はないのであるけれども、これから諸方面に通ずる道路は極めて不充分である。如何に騎術に熟練せる傳令兵でも、道路が不良又は皆無である上に傾斜極めて急峻なる禿山を、危急の場合に駈け登り駈け降りるといふことは決して容易な仕事でない。隨て報告や通報の傳達には少なからざる時間を費やす、報告が遲く到著し命令が遲く傳達されるといふことになると、部下軍隊の指揮運用意の如く行なはれぬのはいふまでもない。元よりこれが爲めには通信機關を完全に設置すれば支障はない、信號記號を巧に利用すれば少しも害はないけれども、此日此時の通信機關の有樣はまだ〳〵今日の樣な整頓したものでなくして、左までに完全であつたとは思はれぬ。であるから右樣な非常な好展望地に在つて其實見した狀況によりて、軍司令官自身は機を誤まらず命令を下したつもりでも、それが何時でも其實行の時機よりも遙かに遲れて傳達されるといふ樣な有樣で、兎角に指圖が時機に後れ勝であつたといふ感は此日の戰鬪に於て何人も感じた所であつて、それは與將軍が單に展望自在といふ一方に而已重きを置いて、其位置を選んだのが此樣な不利益を來した抑、の原因であると自分は考へる。此の指揮官の位置に就ては歩兵操典第二部第十六にも『戰鬪間各級指揮官ノ位置ハ敵狀ヲ觀察シ部下ヲ指揮スルコトヲ主

トシテ之ヲ定ムヘシ其他隣接部隊ヲ目擊シ命令、通報、報告ノ速達スルコトヲモ亦顧慮セサルヘカラス』といふてある如く、最も大切なのは敵情の觀察と部下の指揮であるが、如何に敵情を充分に觀察しこれに應じて部下を適當に指揮しても、其適當なる指揮が部下に速達せぬ限りは、其巧妙なる計策も機敏なる指揮も悉く皆後の祭りとなつて仕舞ふのであつて。敵狀を充分に觀察し得て、さて其敵狀によりて指揮官の決定した指揮命令が、常に時に先だつて各團隊へ到達する樣に計畫せねば、如何によい策略を施してもそれが物の役にはたゝぬ。即ち展望が自在であると共に諸方への交通が自由自在でなければならぬ、若しそれが不十分であれば信號記號通信機關等を以て、少しの遺憾もない樣に各團隊との間を連絡して置かねばならぬ。元より此南山の場合に於ても軍司令部と各師團司令部の間には、戰史の上には何も記載してないけれども、電話か電信の連絡があつたであらうと考へるが、それ以下の諸部隊へは思ふに其樣な設備はなかつたであらう。左すれば旅團以下の諸隊から來る報告は、何時でも數千米突を駈け通した上に、更に最後に千米突餘の急斜面を駈け登らねば用が辨じない。斯くては如何に展望が自由であつても部下を指揮する

に機を逸せずして、極々巧妙に適確に之を運用することは容易に出來まい。自分の考を以てすれば軍司令部の位置は今少し傳令の著發に便利な地點でありたいと思ふ、此の敵狀を見、部下を指揮し、命令報告の速達といふ三件は、決して分離の出來ない要件であつて、若しもこれが一つでも分離したならば、其價値は非常に減却するのである。で此場合唯敵狀と戰況を見得るの便は無類飛切の好地であつたが、命令報告の速達と部下の指揮が不便であつたから、此三要件中の主なる二要件が不充分であつたので、軍司令官の此日の位置は適當でなかつた。では何れが適當であるかといふと、戰場は一般に平地であつて、南山もあの如く隆起して居り、又我が軍の後方も山地であるから、到る處に好位置が見出された筈である。決戰近い終りの時機に至つては金州の城壁上なども無論よからう、又後八里庄附近には極めて適當なる位置が澤山にある樣に思はれる。で此日の指揮官の位置に付ては展望而已に意を注いで、他の主要事件を閑却したる傾向のあるのは、誰れが何といふても强辯し得ないであらうと自分は思ふ。

朝霧が晴れあがつて見ると軍全般の戰況が見へるが、第一、第三兩師團に就ては

豫定の如く其位置に達して居るに係はらず、第四師團はまだ〳〵金州西北の森林中にまご〳〵して居るといふ有樣。これには隨分軍司令官も頗ぶる付の憤慨であつたらうが、何をいふにも朝陽寺高地からでは二階から目藥同樣で手が屆かぬ、其中に夜は夙くの昔しに明け切つて仕舞つた上に、猛烈なる砲戰の結果は著々として現はれて來て、午前八時前後には大に敵砲の氣勢が衰ろへたのが見へだして來たので、第一師團の右に連繫して攻勢鈎形となるべき第四師團は、まだ〳〵遙かにそれより遲れて位置して居たけれども、便々だらりと之が到著を待つて居ては時機を逸するは目前なので、軍司令官は第一師團に向て直ちに攻擊前進を命じたが、前にも既にいふた如く、命令の速達法が完備して居なんだので、此軍命令も第一師團長の獨斷前進を開始して居る所へ、漸くにして屆いたといふ始末になつた。

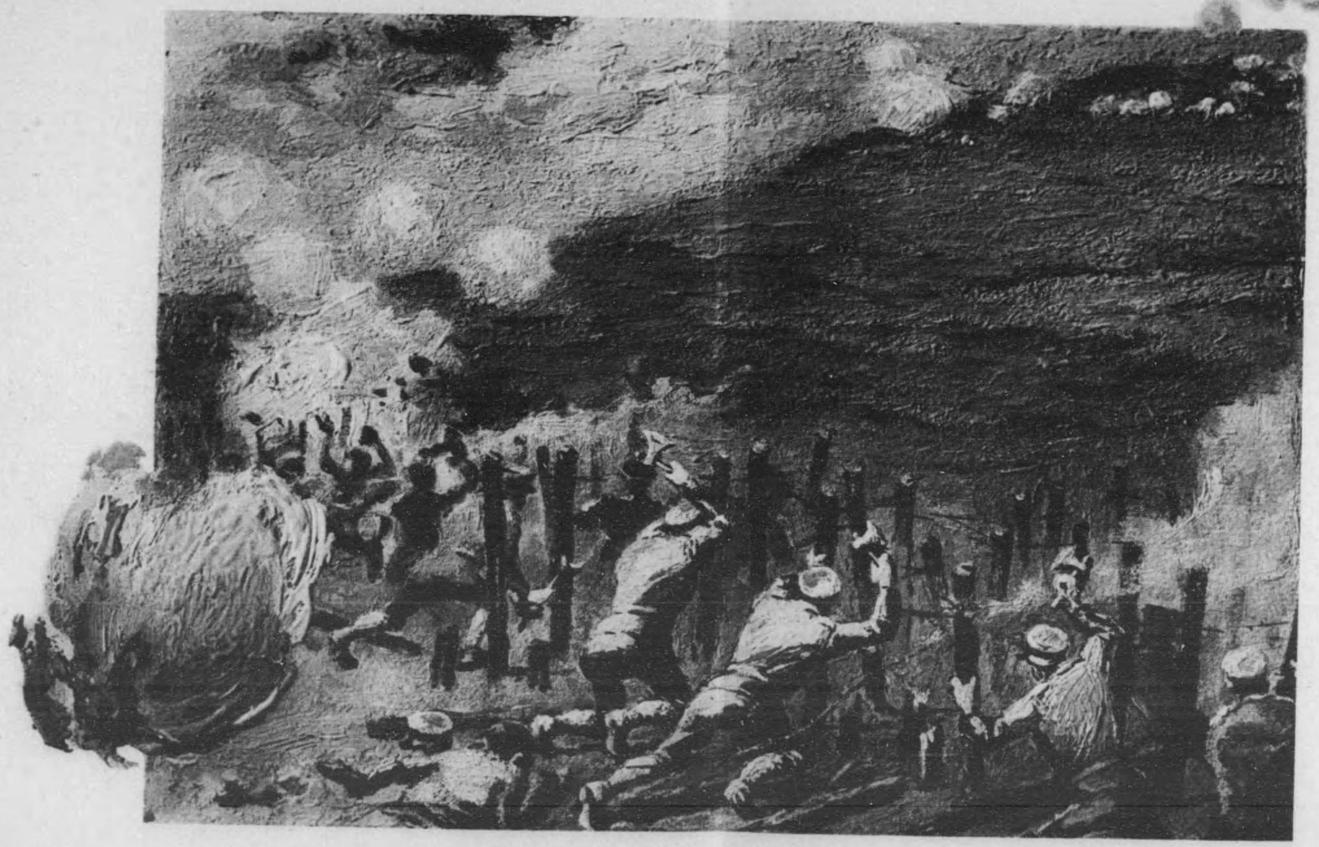
此時最も自分の同意し且つ適當であると考へる處置をしたのは、大島第三師團長（義昌）のとられたる處置である。此師團は昨日特に奥將軍から參謀を派遣されて、第一師團に先だつて敵に接近するなといふ注意があつたに關せず、其訓令を以て眞面目に敵を攻擊するなといふ意味に、極めて適當に解釋して、自己師團の本來の任

務は助攻である、其全兵力を以て敵の右翼に急迫して彼の退路を危ふくするの氣勢を示し、此師團の攻擊動作によりて敵を此方面に牽制し、他に移動せぬ樣に繫ぎ止めるのには、第一師團に先だつて第一番に攻擊を始めるのが必要であると判斷し。第四師團は昨夜の失敗で遲參したのを回復せんとして猛進し、金州灣には六時前後から我海軍が現出して砲擊を始めたので、第一師團はまだ攻擊前進に移らず軍司令官からも何等第三期開始の命令はなかつたが、斷然獨斷を以て七時少し過ぎから敵に向て、東方一帶の廣正面に展開して南山東方に向て前進を開始した。此第三師團の獨斷の前進は極めて適當なる處置である、蓋し軍司令官の訓令の眞意は餘り速く第一團より先に、敵に接著して眞面目の攻擊をするなといふ注意に過ぎぬ。で攻擊計畫要領の眞意を參酌して見ると、第一師團が中央より主攻擊――明記してはないが主攻擊であらう――に當るのであるから、それを助けて敵を兩翼から包圍して其主攻擊を容易ならしむる爲めには、第四、第三兩師團が、第一師團より先に戰を開くが順序でもあれば都合もよい。その全般の利害を熟慮して獨斷を以て機宜に適したる處置をしたのは、此日に於ける各師團長中最も適當なるやり方であつて、

更に其工兵大隊を分割して、其師團内各部隊に鐵條網破壞班を屬した如きも、當時に於ては極めて活眼があつたやり方だと稱賛するを自分は躊躇し得ぬ。

愈、各師團が攻擊前進を始めて見ると、今迄我砲兵に制壓せられて仕舞ふたと考へたる敵砲兵は、盛んに前進する我歩兵に向て砲彈を送るので、我砲兵は更に之に向て連續猛射を施こして居る。其中に午前の九時前後になり我歩兵線が漸次に敵に近くなつて見ると、軍司令官が最も陣地の弱點として其主攻擊を向けたる、南山東南角の敵の陣地は其防禦工事最も堅固にして、約十米突の深さを有する鐵條網を二重に前面に控へ、容易に之に近接し得べからざるものであるのを發見した。陣地の突角は弱點である、弱點は之を人爲によりて幾らでも堅固にすることあるべきは豫想し難いことではない。其上に兵力も多く配置されてあるは勿論、恐ろしい機關砲も其割合が多くしてあるといふ次第であるから、第一師團は此午前九時過ぎには最早苦戰の狀態に陷つた。蓋しこれに就ては第一師團の攻擊のやり方も多分適當ではなかつたらうと思ふ。此日露戰役に於ける最初の大戰鬪に於て、大優勢の兵力を用ひて一撮土とも見るべき南山位を奪取せんとするのは、尋常茶飯のことであるといふ

南山東面の鐵條網破壞



九十九道人　石原白道畫

様な考もあつたらうし、損害などは顧ることなくして　陛下御膝もとの第一師團の腕前を示す好時機であるとも考へて、殆ど練兵場のそれの如く正々堂々整然として攻進したので、立派ではあつたが忽ちにして掩蓋帽堡とあらん限りの人力を盡して、餘程巧妙堅牢に築造せられた敵陣地に於ては、少しも我に影も形も現はさずして、雨の如く霰の如く鐵火鉛湯を間斷なく浴せかけられるので、我は何等の據るべき地物もなく平坦開豁の地を暴露して前進する爲めに、忽ちにして莫大なる損害を受けて前進を始めてからまだ三十分たつかたゝずで、最早苦戰といふ狀態を機敏なる軍司令官の目にとめられる様な有様に迄立ち到つたのである。

午前十時前後に於て軍司令官は進んで肖金山に移り、其移轉する前後に於て軍總豫備たる歩兵第三聯隊を、第一師團と第四師團の中間に增加した。此の增加に就ても自分は少し苦情を申しあげて置きたいのである、前にもいふたが軍の總豫備が一聯隊とは少な過ぎる、此様な全戰線が一眸の下にある様な場合には猶更ら、今少し有力なる豫備隊を貯へて、さて各師團の攻擊前進の模様によりて、敵陣地の動靜强弱を寸分の油斷もなく觀察して、愈此方面から全力を擧げて主攻を施こさんといふ

考の決定した處で、其方面に思ひ切つて其豫備隊の大部分を增加して、猛烈に一氣に之れを突破せしむるのが、我戰線餘りに廣大ならずして、且つ展望自在なる戰場――即ち此の南山の樣な――に於ては非常に有利であると自分は考へる、然るに軍司令官の策それに出でずして僅々一聯隊の豫備を貯へたる而已か、幾ら苦戰の傾きがあつたとはいへ、まだ〳〵師團の豫備隊が、悉皆使用し盡されざる以前即ち午前九時から十時といふ時機に於て、第一師團へ二個大隊第四師團へ一個大隊增加したのは、其增加の時機も過早であるといはねばならぬ。隨分此の難攻不落と敵自身が大に誇つた陣地を攻擊したのであるから、最初から容易ならぬ難儀であつたには相違あるまいが、併しまだ各師團長が相當の豫備隊を握つて居る中から、之に總豫備隊を悉皆增加して仕舞ては、折角軍が總豫備を控置して最後の爲めに準備した甲斐がない。果せるかな此過早の增加は僅かに第一師團が一二回躍進するの注射劑となつたばかりで、其後午後の五時過ぎまで殆んど七時間の間といふもの、猛然として敵を遮二無二突破するまで前進さする爲めの、折角の推進力を唯だ此一時の過早增加に消耗して仕舞て、成すこともなく雨下する敵彈中に暴露して、唯々損害

ばかりを受けて居らねばならぬ羽目に陷つたのは、實に遺憾千萬なことであつて今少し機の迫るまで、此の極めて少ない甚だ足しない豫備隊を殘しておき、師團が自力で敵に接著するまで近迫させ、其愈〻の大難儀の場合に當つて一聯隊の新鋭力を分つことなく纒めて第一師團へ加へたならば、或は中央の敵陣地が突破し得られたかも知れぬ。最も此の第一師團の松村旅團の攻擊なども、今から考へて見ると甚だ以て理屈に合はぬやり方であつて、前に强大なる數線の鐵條網を横たへて居るのを現在見て知つて居りながら、工兵大隊を各部隊に分屬して先づ第一に之が破壞に任ずるといふ手配もなく。特に小原現少將の指揮せし歩兵第一聯隊の如きは、無理と知りつゝ師團長宮殿下の御命令で止むを得ずしてやつたとは申ながら、智慧のないにも手段のないにも程のあつたもので、此の場合鐵條網を破るといふ方には少しも氣がつかず、其前面に僅かばかりの通路があるのを見て、其通路から敵陣に突入するといふ愚劣極まる案を立て、小原聯隊長は一大隊足らずの兵力を以て、しかも之を敵彈亂下の中に於て四列側面縱隊に編成して、鐵條網の間々をもぐりくぐつて這入込むといふ、頗ぶる附きの妙計を企てたなどは、實以て今から思へば抱腹絶倒に價

すべき事柄である。但此樣な堅固なる工事に對しては最近の三戰役中、始めて攻擊を試みた位の我軍隊であるから無理はないとはいふものゝ、如何にも平素軍事上の研究が不足であつたことを遺憾なく暴露したもので、此隊ばかりでない、此樣な下手くそ千萬な攻擊は諸方面到る處でくり返されたが、最早全く豫備を費やし盡したので殘念ながら推進すべき方法がない。第三師團は無理推しをして前進して、あの鐵道堤を其一部は占領して此所に辛くも現狀を維持するの外、又た更に施こすべき手段も方法もない樣になつたのは當然至極で、これはかくあるべく最初から計畫せられたのであるから、これで充分に其任務を盡しおほせたのである。

前に總豫備隊を過早に使用したに就て一言したが、例の手灣に敵艦隊が現出して第三師團の左側面から、御遠慮なしに烈しき砲擊を加へた而已か、彼れ海兵の一部隊は四艘の小汽艇に分乘して、龍瓜山附近へ上陸したといふ流言がぱつと諸方に傳つた時、大島第三師團長は手裏に殆ど豫備隊が一兵卒も無かつたので、工兵隊の殘餘（鐵條網破壞班の）をまで其方面に駈け向はせたが、これは實際ほんの斥候位のものであつたので、先づ大したことはなかつた樣なものゝ、若も幾分有力なる部隊が

何れからでも上陸でも始めたならば何とする。午前十時には軍の總豫備隊は零になつた、此の敵上陸の誤報の傳はつたのは正午である、敵が若し思ひ切つて此時此方面から一大隊なり二大隊なり、其歩兵を上陸さしたとした時には何とする、各師團は殆んど全豫備隊を使用し盡して居る上に、軍司令官も一兵もお持合せがないとしたならば、此の微弱なる敵兵の爲めに如何に第三師團は危急に瀕するかも知れぬ。或は此樣な奇襲の爲めに全く大驚慌を來して、此師團は敗走するに至るかも計られぬのである。からして軍が此日過早に豫備隊を使用し盡したのは大過失である。尤とも軍司令官は此の九時から十時頃を以て、最早最後の突擊時期に迫つたものと速斷し、此場合に使用せぬと或は豫備の握り潰しになるであらうと心配したのであらうか、それは現在眼前の戰況を誤認したのである、即ちそれが大過失である大誤算であるといふを自分は憚らぬ。

夜中から運動を起し早朝から攻擊を始めて、三個師團の有りつたけの兵力を盡して、午後になつても此の彈丸黑子の南山を陷落し得ぬといふ有樣に、沈著無双の奥元帥も少なからず氣を焦らち心を苦しめたけれども、如何にしても此の陣地を突破

せねば已まぬといふ決心は、磐石の如く少しも動搖を來さなんだので、各師團へは鞭撻的督促的の命令が頻々として天降る。各師團長は死にもの狂ひになつて敵に向て無二無三に再三再四突擊したが、鐵條網と地雷火と堅壘と機關砲の威力には、退生を願はざる流石の日本男兒も辟易せざるを得なかつたので、午後五時過ぎまでは近く敵と相接して惡戰苦鬪をくり返しつゝ繼續した。はや其中には砲步兩兵ともに上陸早々のことである爲め、其彈藥の貯蓄が十分でない所から、忽ちにして彈藥補給に大難澁が始まりかけた。此場合に及んだる軍司令官の心配は實に一と通りや二た通りではない、今や上陸最中である土屋中將の第十一師團に向て、上陸しただけの部隊に急行增加を命じたのを見ても、如何に此日の我第二軍の戰況が危急に迫つて居たかは知れるであらう。

然るに今朝初天邊から攻擊の手筈に少なからざる手違を生せしめたる、第四師團長故小川大將は深く昨夜の失態を殘念と思ひ、全滅を賭しても此不覺をとり返すだけの働きをせねば、南四師團の面目が立たぬといふ所から、隨分猛烈に之を鞭撻し之を鼓舞した上に、其夜襲失敗の當の責任者たる安東少將はもとより、これが隨伴

者たる淺田現教育總監もその他のものも上下一同此恥辱を雪がねば、生きて居つても人に顏が合はされぬといふ大決心の覺悟が、全師團の上下一同の頭の中に漲り亙つて居た上に、幸に此方面の敵の防備が他方面に比較して少しく薄弱であつたから、必死を期して遮二無二驀進したはづみに、敵の第一線の散兵壕を漸くにして奪取した。一葉落ちて天下秋を知るといふ詩のある通り、敵は此の右翼散兵壕のたつた桐の一葉の凋落で、持ち切れぬといふ最後の弱味を見せたので、決死の第四師團は忽ちにして意氣天を衝くの概を生じた。をりよくも我海軍は一身の危險はいふも更なり、其大切な艦艇の危險をも顧みずして十二分に陸岸に接近し、我第四師團と對戰したる敵の左翼から、殆んど小銃彈の屆く距離まで近接して猛烈極まる巨彈を以て斜射縱射を決行し、敵が唯一の恃みとしたる掩蓋も帽堡も一つ殘らず悉く飛散せしめたので、流石頑强を極めたる敵兵も終に之を持ち堪へられずして、此方面から敗走し始め終に此日午後六時から七時の間に全南山を占領するに至つた。此の第四師團の勇戰は當日第一番の目ざましいものであつて、畢竟するにこれは昨夜の失敗の賜であつた。若しも昨夜の大失敗がなかつたならば、第一、第三師團と同樣に陣地

に固著して仕舞ひ、第四師團が南山第一先登の月桂冠を戴き得なんだかも知れぬのである。

之を要するに戰前數日の準備を以て諸計畫を立て、三個師團の大兵力と約二百門の砲火とを以て、此の彈丸黑子の南山を攻擊して非常の苦戰に陷つたる後、漸やくにして之を奪略し得たといふのは、抑何等の過失に基因するかといふと。第一、第二期に於て金州城を速に占領して準備の歩を今一歩進めおかざりしこと。第二、主攻擊方面を左翼或は中央左翼の方面に定めざりしこと、第三、總豫備隊の控置少なく且つ過早に之を使用し盡せしこと。第四、彈藥の準備不充分なりしこと。先づこれ等の諸原因が重つて此樣な苦戰を惹起したのであるが、就中最重最大なる此因由となつたのは、其最後に於て第五の基因として數ふべき堅固なる防禦編成を施したる陣地を攻擊したのは、日清北清の二戰役中には一度も試みたことがなかつたので、此時始めて半永久式の防禦工事ある陣地を攻擊して見たので、愼重に損害を避けて敵に近づくといふ考へが少しもなく、野戰同樣に一氣呵成にやりかけたので、全く此樣な非常な苦戰に陷つたのである。乍併かゝる大なる原因が五ケ條もあつたに係

はらず之を兎に角奪取し得たのは、實に各將軍の決心の堅かりしと將卒の勇敢なりしと、更にも一つ敵將フオーク少將の無能であつた爲めであると自分は思ふ。

此樣な豫定計畫通りに都合よく攻擊が出來なんだ、大々的困難なる終日がゝりの攻擊であつた上に、死傷は四千の多きに達し彈藥は殆んど缺乏したのであるから、左なきだに夜間の追擊は殆んど不可能といふてもよいのに此始末の後であつたので、此場合先づ堅固に陣地を占領して、全軍現狀の儘で露營することにして、戰場以外の追擊を決行せなんだのは、適當なる處置といふよりも此場合に於ては、此れより以外には方法手段がなかつたといふが至當であらう。各師團の意氣旺盛にして且つ敵が全然潰走したのなれば兎に角、彼や健氣にも最後の豫備隊を提さげて其全滅を賭して逆襲し、我第四師團の猛進の鼻尖を打ち挫ぢき、兎にも角にも其部隊を辛くも整頓しつゝ退却したのである。單にそれのみではない其後方のフオーク少將は、大房身から後南關嶺に亘る堅固なる陣地に、歩兵約二個聯隊砲四十餘門の新手を控へて、我追擊前進を今か〳〵と待構へて居たのであるから、此際無暗に黑暗々の中を追擊したならば、敵に非常の損害は與へ得たであらうが、我軍に於ても如何なる

失策をやり出して、晝間の苦心慘憺たりし大苦戰の功績を、忽ちにして水泡に歸せしむる樣な敗北が、或は出來たかも知れぬのであつて、先づ此の場合に軍司令官が戰場以外の追擊を施行せなんだのは、決して不當なる處置ではないと自分は思ふ。これに付けても總豫備隊の新手を少しでも握つて居たならば、よし不充分なりとも今少し敵をくるしめ得たらうとの感を生ずるのは免がれぬ。若しも軍司令官が最初二個聯隊も持つて居て、其中よしや一個大隊でも新鋭の兵が此場合殘つてあつたとしたならば、速に之に必要な他の兵力を增加して若干敵の退却をくるしめ得たに相違ない、否な大に敵に損害を與へ得たであらうと思ふ。で此追擊をせなんだ處置は決して不當とはいはぬけれども、此の後とても攻擊の後に於ける軍隊の減員と疲勞とは、殆んど此時と同樣なる困難至極の有樣の場合が多いと思はねばならぬ。然るに何れの時でも何れの處でもそれをよい口實として、追擊をせぬ樣なことがあつたとしたら、それこそ實に戰術の原則に背くものであるのはいふ迄もなく、我日本の軍隊に於ける由々しき惡現象といはねばならぬ。であるから步兵操典第二部第七十六には何といふてあるか

『戰鬪後ハ勝者ノ疲勞モ亦大ナリト雖敗者ハ體力氣力共ニ一層困憊シ其疲勞ハ殆ント極度ニ達スルモノナルカ故ニ勝者ハ一意追擊ヲ續行シ以テ最終ノ勝利ヲ完ウスヘシ此際各級指揮官ハ部下ニ對シテ過劇ノ動作ヲ要求スルコトヲ避クヘカラス』

眞に然りである御尤千萬である、此條などが新に操典に加へられたる原因を調べたならば、思ふに此戰の追擊の不決行なども決して其原因中の一つからは、漏れて居るまいと自分は信じて居るのである。

偖て我第二軍の攻擊に關しては、極めて疎略ではあるがまづ〳〵此邊で其講評を切りあげて、さて今からは例によつて露軍の方に就て觀察して見ることにし樣と思ふ。元來露軍は此の我が第二軍に對して、フオーク將軍の指揮する略完備したる東狙兵第四師團を以て之に當らしめたのであつて、且つ此南山の陣地は北清役以來工事は起して見たけれども、中途で中止して居たのであつて、事實之を堅固にしたのは開戰以來のことであつた、就中第二軍の上陸近くなつてからは、晝夜兼行多數の人夫を役して之を完成せしめたのであるが。此陣地は步兵一聯隊以上の兵力を配布するは却て害があるといふ、例の畑水練の兵學者連の机上の空論に束縛せられて、

此日南山の守備の兵員總數は、僅々歩兵約一聯隊と砲六十門が最初に於ける實數であつて、最後の時機に於ては砲は殆んど全たく用にたゝずして、歩兵總數十九中隊獵兵八隊半位のもので、彼れの守兵は如何に有利に計算しても二個聯隊以下であつた。然るに此方面の指揮官たりしナデイン少將は極々の無能もので、大房身停車場に居たといふばかりで、何等の役にもたゝなかつたばかりか、何を如何に氣まぐれたものか午後三時過に、我第三師團方面の戰況が一時沈靜になりかけたのを見て、『敵ハ左翼ヨリ退却ヲ始メタリ』といふ途方もない大早計な報告を、ステツセル將軍に電送して、此の戰場倖儲の場合に於て無益に「シヤンバン」を旅順高等司令部で拔かせたといふ、氣まぐれもの虚氣ものゝ隊長であつたが。それに反して東狙兵第五聯隊長として此南山に永久兵營を構へたる、南山守備隊長トレチヤコフ大佐は實に立派なる腕前の人であつた。彼れや自己の部下十一個中隊を中心としたる歩兵十九中隊獵兵八隊を以て、我第二軍が三萬六千に餘る全力を擧げて、拂曉より日沒まで息もつがせぬ猛烈獰惡なる攻擊に對し、其砲數も三分の一弱なる舊式砲や重砲や混合したる砲兵を以て、よしや陣地が堅固であつたとはいへ、十二時間以上の抵抗

を極めて美事になしおほせて、兎にも角にも退却命令のあるまで此陣地を固守し、我第四師團の突入に當ては新に駈け付けたる最後の援兵を提さげて之に向て逆襲して、其前進を一時喰ひ止めた而已か、更に疾驅して左翼方面の敗退しかけた中隊を引き止とめんとして死力を盡し、其爲め遂に陣地は棄てるに至つたが、其陣地の後方で兎に角部隊を集結せしめて退却したのは、其地理に慣熟して居たのと其工事が堅固であつたのが、非常に防禦の力を增したものとしても、實に稱贊すべき勇敢極まる防禦であつて、若しもフオーク師團長が例の机上の空論に拘泥せず、適時に適當なる增援兵を同大佐に與へたならば、思ふに第二軍は此日此南山を陷れることは出來なんだであらう。予輩は此のトレチヤコフ大佐が砲兵に於て三倍以上、歩兵に於て約七倍の大敵に對して、此の明治三十七年の五月廿六日一日を、勇敢に堅忍に守りつゝ夕べにまで至つた名譽は、露軍の中に於て全戰役を通じての比類少なき大手柄であつて、其陣地を棄てゝ退却するに至つても、非常な見ぐるしい敗退に陷らずして、我第二軍に損害を與ふること自己の指揮せる其守兵の全數と殆んど同等位の四千六百の多數に至らしめたのは、實に拔群の名譽である。敗將といへども決し

てこれは非難すべきものでない天晴れな敗け方である。予輩は實に此トレチヤコフ大佐（現今少將）に向て誠心誠意こゝに敬意を表しておく。

これに反してナデイン少將の無能なるはいはずもがな、自分獨りで大戰術家を極めて居た、フオーク東狙兵第四師團長の不始末は、殆んど言語に絶したる評論以外のやり方であつて、此大切なる戰鬪即ち關東守備軍と、北方に於ける露の野戰軍との連絡を遮斷せられたる天下分け目の戰に、全師團を集結して自ら其主力を掌握して敵と衝突するの策に出でず、大連、南關嶺停車場、前南關嶺、小沙家灣、柳樹屯、南山、と諸方八方に其兵力をばらまいて、此大切な攻擊あるべきことの知れ切つたる、五月廿六日には自から南山の陣地にありて、敵狀如何を觀察し守兵を指揮すべき責任を有しながら、却て榮城子方面の海岸に兵を配布するといふ樣な、變てこ極まる方面に行動をなしたる而已か、同日の午後に至り南山陣地既に危急に迫り、守備隊長より增援を請ふこと櫛の齒をひくが如き有樣にて、ナデイン少將は自己の手にある部下全部を增加し、猶不足なる所より更に增援を乞ふたけれども、唯だ無暗に豪語して容易に之を派遣せなんだ。終りに澁々之を派遣するに當つても『收容以外に用ゆべからず』と其隊の使用法を制限した。これはまだしも今少し前方に位置せしめたならば、我攻擊軍の兩翼に十二分に痛擊を與へ得らるゝ大砲四十門を握つて居りながら、これを例の後方陣地に配布して、少しも南山の加勢に使用せずして、南山の守兵が退却して來たならば、大房身から後南關嶺に亘る陣地に於て、大に之が收容に勉め且つ大逆襲の銃劍の威力を以て、日本軍を殲滅させると大氣焰ばかりをあげて居る中に、增援は間に合ずして日は暮れる忽ち南山は陷落する、フオーク將軍の理想の逆襲も、前方よりなだれかゝつた南山の敗兵の爲めに、計畫全く齟齬して仕舞つて、砲煩は委棄する糧秣は燒夷する、自分の作つた鐵條網に自分の軍隊が引つかゝるやら、周章狼狽の極味方同志討を演ずるやら、いふにいはれぬ大混亂を生じて仕舞て、遠く後方へ退却するの外餘儀なくなつた。これ蓋し南山は聯隊以上の兵を用ひぬがよいといふ机上戰術の空論に迷ふて、何でも敵が之を奪畧し侵入して來た頭を、うんと南關嶺陣地で打ちのめしてやらうといふ間違つた考へを抱いて、殆んど全師團の三分の二を退却收容陣地に就かしめて、味方の敗退を今か〳〵と待つて居るといふ常識以外の計畫をしたのが、抑實に此の南山戰鬪の大不結果を

來した最大原因であつて。よしや最初は其覺悟であつたにしても、眼に餘る我が日本の大軍が、南山陣地前で非常な苦戰に陷つたる有樣を、實際に見又たは其報告に接したなら、少しく機動心のある人であつたならば、速に其主力を提さげて之を增援し、我の非常に疲勞して彈丸將に盡きんとして、苦境の極に陷つたる午後二三時頃に、猛然として其右翼方面から我第三師團の方面へ向て逆襲をでもしたならば、當然此師團は其占領して居た地を守り切れなんだであらうと思ふ。否それまでには ゆかずとも、此の先制の勢に呑まれて第四師團の突擊は、到底決行せられなんだに相違ない。左すれば此日は充分に南山を守りおほせて、此廿六日の夜中に於て重なる砲煩糧食を運搬して、夜暗に乘じて例の南關嶺陣地に退却して、こゝに再び陣地を堅固に占領したならば、狹い地域から混雜して出て來る攻擊軍を、物も美事に打ち叩いて容易に之から先には進ませず、其間に大連に於ける物資や人民を後方に移轉せしめて、さて漸次に後方へ退却するといふ樣に、順序正しく退却することが出來たであらうのに、實にいはふ樣ない拙劣なる方策を選りによつて採用したものである。但し此時フオーク少將とトレチヤコフ大佐との間には、其以前より何か非常な感情の衝突があつたらしいので、岡目から之を評者が見る樣な虛心怛懷なる處置が出來なんだのではあらうが。要は私憤によりて公事を忘却するといふ、不忠不義不都合千萬な私心が其間に加はつたのであらう。此事件は戰後露都の軍法會議に持ち出されて、不名譽千萬にもフオーク少將もナデイン少將も、長日月の籠城の苦を嘗めた後ち、終に見苦しい刑罰を以て其一生の終りの頁を彩色するに至つたのである。これ蓋し氣の毒ではあるが當然なる結果であつて、斯くせざれば後輩に鑑戒を示すことが出來ぬ。嗚呼近時我國政界の有樣などを見て居ると、見亘す限り極端な私憤私鬪の集合で、　皇室も國家も彼等の心中には夙ふの昔しに忘れて仕舞て居るのである、此樣な奴輩は片はしからどし〳〵斬首に處するがよいのである。左なくば此の露軍の不始末の百千倍の大敗北大失態が、今に必らず國家の上に降りかゝつて來るのは目前である。

戰史評論

第五回 得利寺の戰鬪

成仁武夫補
無名戰士評

大正
2. 7. 31
内交

六月十四日の情況

南山の攻擊芽出度く我大勝利に歸したる後、新に第三軍の編成せられることになつたる爲め、第二軍司令官奥元帥閣下は旅順方面に向つての無双の堅城を攻圍すべき任務は、これを新來の乃木大將に一任して北に向て前進し。六月上旬に於て夾河より普蘭店の間に第三、第五、第四の三個師團を併列して集中し、其右翼には秋山將軍の指揮する騎兵第一旅團を配置して、貔子窩方面を警戒せしむると共に、遠く夾河、大沙河の河谷を傳ふて前進して敵の動靜を搜索せしめた。つまり貔子窩普蘭

店の線に於て黄海及渤海の兩大海に兩翼を托して、敵の南進部隊の進來を待つといふ雄大極まる姿勢を取つたのである。

然るに騎兵第一旅團其他各師團の獨立騎兵が、必死となつて搜索に盡力したけれども敵の運動は極めて要領を得ぬ。唯だ頻りと得利寺附近に兵力を集める樣な模樣ではあるが、それとても前進の目的やら防禦の爲めやら少しも其樣子が知れぬ。元より敵情なるものが其の樣に容易に知れべき筈のものでないのはいふ迄もないが、此時の場合の如きは實に一層不可思議な程に敵情が不確かであつた。で深謀遠慮の名を得たる奥元帥閣下は、六月三日其部下三個師團の全力を例の夾河より普蘭店の間に併列し終つて、堅固に陣地を占領して仕舞ふと共に左の如き決心をせられた。

『露軍の南進を企てたるは旅順を救援せんとの目的であらう。否直接之れを救援するの手段に出でずとも、少なくも近く我旅順包圍軍の背後を脅かして、其兵力を北方に向て分割せしめ、以て旅順の苦痛を幾分にても輕減せんとする目的なるは疑なし。果して然らば彼は早晩我陣地前に近迫し來るべきは勿論である、故に第二軍は一先づ此地に於て敵の進來を待ち、我が此の有利なる陣地前に於て非常に之を苦しめたる後、機に乘じて逆襲に轉じ其退ぞくを追ふて之を急速に尾擊し、以て敵を潰亂に陷らしめん』。

此決心は實に至當である何等の申分はない。上陸以來殆んど寧日なく行動して南山の攻擊で非常な疲勞損傷を來した三個師團を、集中せしむると共にまた直ちに北進せしむるのは、兵力休養の上に於ても不合理であるのみか、南山戰後の人員物資の補充もさう速かには完成せぬ。からして此の良好なる陣地を占め騎兵を驅つて敵の行動を精密に搜索しつゝ、其自己軍の充實を計り其間に於て兵力を十分に休養して、さて敵が愈、其前面に迫つたならば其鼻柱をウヽといふ程打ちのめして、其驚く處を付け込んで一氣呵成に敵を破摧し、以て第二軍の北進の目的を一擧に十二分に達成し樣としたのであつて。此の決心は何人と雖ども此際至當でないといふものはあるまい、自分は實に萬全の大良策であるといふに躊躇せぬ。

然るに物事は何でも注文通りには問屋が卸してくれぬ。奥元帥が泰然と彼の普蘭店附近の陣地で構へて居る間、敵は出たり引き込んだりして少しも此の陣地の前に接近せぬ。其中に第二軍は總ての補充も殆んど終了し、更に其軍に增加せらるべき

第六師團の上陸の日も近づいて來た。で奥元帥の腹の中には此の新來の師團をも此陣地に於て其手中に握り、堂々たる四個師團の大軍を率ゐて北進し樣と思はれたであらうが。第一軍はもとより獨立第十師團との關係上、さう何時までも此地にべんべんとして居る譯にもゆかぬので、種々軍議を凝したる末終に始めの決心を飜へし、我より進んで敵を攻擊することに其方針を確定して、六月十二日に於て第二軍北進の軍命令は午後五時半に各師團長に下された。

其軍命令及各師團命令の大要は、戰史第一卷五五八頁より五六〇頁の間にあるからそれを一讀すれば明瞭であるが、此の軍司令官の處置も自分は同意である。自己の軍は既に大部分戰後の補充が終了した、後續師團は既に不日に上陸するといふ好都合である。然るに一方敵情に付ては果して進來するか、途中で停止して仕舞ふのであるか少しもそれが測定し難い上に、近くは第十師團遠くは第一軍との關係上さういつまでも後方に居る次第にはゆかぬ。で此の完備したる三個師團を提さげて、敵の兵力の增加せぬ中に之を北方へ驅逐しつゝ、北進の目的を遂げ樣と決心を變へられたのであるから、其處置に就ては少しも不同意を述ぶべき點がない。

更に其前進の計畫として、其北進の主要道路たる鐵道線路の附近に軍の主力を進ましめる爲めに、大沙河河谷と鐵道との間附近に第三第五の兩師團を前進せしめ、右翼夾河河谷より貔子窩、北瓦房店街道方面には、騎兵第一旅團を前進せしめて遠く右翼を警戒して、更に左方復州を經て熊岳城に通ずる街道の方面には、敵の大兵力が南進して居らぬといふことは既に前から知れては居たが、何時如何なる都合で敵が進來せぬとも知れぬ方面であるから、此方面に第四師團を前進せしめたのであつて、三個師團と騎兵一旅團が約九里の正面を以て、七縱隊となつて前進したのであつて、敵の騎兵司令官サムソノフ將軍やクロパトキン總司令官から、其過廣なる前進計畫を指摘して最も乘ずべき攻擊の機會であると評されて居るが、併し此場合奥元帥の前進計畫としては已むを得ぬであらうと考へる。元より決して其正面は狹くはないけれども、敵情が甚だ不明である而已か、敵は鐵道はもとより復州の方からでも夾河の方からでも、何れからでも南進が企だてられる上に、何れの道よりするも左して大なる距離に差がないのであるから、三萬内外の兵力が集まつたといふ樣な評判のある、得利寺を主なる目的としてそれには軍の主力の二個師團を向はし

めて、騎兵旅團と第四師團を以て其兩翼の街道を警戒し、且つ愈本戰といふ時には更に相救援し得られる樣に計畫したのであるから、此前進計畫は決して不至當でないのである、其正面が少し過廣であるけれども是れは實際已むを得ぬのである。

で此の過廣正面なる七縱隊を以て十三日の拂曉より全線同時に前進を始めて見る、と、今まで我陣地より約三里を隔てゝ前面一帶を警戒して居た敵騎兵は、何等さしたる抵抗を試みずして漸次に北に向て退却し、隨分大なる其支援歩兵や砲兵が鐵道附近には居たのであるがそれもさしたる邪魔はせずして、六月十三日の夜に於ては水門子廟から大陶家屯、宮家屯、拉子山咀を經て左翼小付家屯に至るの線に、難なく到著宿營することが出來たのである。併し敵情に付ては更に明確なるものは得られなんだので、其翌十四日に於ても右翼騎兵旅團は沙泡子方向より敵情を搜索せしめ、第三第五師團には行徐家溝より左翼呂家溝の間に向て前進せしめ、第四師團には復州熊岳城街道を進む得利寺の敵に備ふると共に敵の右側を脅威し、且つ緩急直ちに其一部を主力方面に赴援せしめ得る樣にといふ考で、鐵道と復州との中間を北進せしむる樣に訓令した、此の十三日夜に於ける軍司令官の處置に就ても自分は更

に苦情はない。

更に十四日早朝軍が昨夜の命令通り、著々として運動を起すに當つて、奥軍司令官は山梨軍參謀(現少將)をして、第三、第五兩師團長に左の要點を傳へしめた、

『若し軍が本日占領せんと豫定せし線に於て、敵と出會することなくして尙ほ前進が出來た場合には、第三師團は右は高家勾より龍王廟に至るの線を、又第五師團は其左に連繫して左翼孫家屯に至るの線を占領せよ』。

まづざつと前述の如き要旨を山梨少佐に含めて、各師團の此の訓令を傳ふる場合の狀況をも考へて、軍司令官の主意のある所の明知せられる樣に、兩師團長に告知せよとの命を受けた。此の山梨少佐の命令傳達は都合よく機に遲るゝことなく兩師團長に傳へられた。併し此處置に就ては隨分議論がありさうであるが、自分は矢張軍司令官の此處置は適當であると考へるのである。此場合此の外には別にやり方はない樣に考へるのである。

難者あり此處置に就て非難して曰く、軍司令官にして若しも最初より此の高家勾、龍王廟、孫家屯に亘る線を占むるの必要を認めたならば、確然それを十三日夜の軍

命令に記載するがよい。そして若し敵が居たならば本戰に至らぬ程度で戰鬪を控へさせる樣に命じて置けば、各師團長には自然其手心が出來る筈である。然るに前夜に於ては行徐家溝より呂家溝に亘る線の占領を命じて置き、更に其翌朝になつて狀況にさしたる變化のないに關はらず、此の大切なる行進の目標を輕々しく前方に變換するといふのは不利益である、大齟齬大混雜をこれが爲めに起すかもはかられぬ。これが一大隊や一聯隊のことなればまだしも、數個師團に及んだる大軍のことである、去る輕率なことをしては爲めに如何なる支障が生ずるかも知れぬ。但し命令を達して仕舞た後に更に狀況一變して、萬々已むを得ずして是非とも其行進の目標を變換せねばならぬ場合には、可成速に之を各師團長に傳達するが爲に、師團毎に各別に傳令を馳しらせるが至當である上に、騎兵旅團にも第四師團にも其變更を通知してやらねば、明日其連繫が全くとれぬことになる、然るに此大切な命令をしかも翌朝出發に當つて、一人の參謀をして兩師團に傳へしめるといふは其の意を得ぬ、況んや騎兵にも第四師團にも知らせぬといふは手ぬかりであると、此の難者の言は尤である決して無理ではないが、併しそれにはそれ〴〵已むを得ぬ理由があつたの

であつて、强ち奥元帥が不注意であつたり輕率であつたりしたのではない。

奥元帥は萬全の策を畫したのである、敵が得利寺附近に主力を置てある樣であるのは數日前から知れて居る、然に其兵力も其目的も編組も少しも明瞭にはなつて居らぬ。それに此の廣正面の數縱隊の軍を以て、いきなり衝突して仕舞ては大に危險である。で先づ十四日の日には其敵の主力の居るといふ得利寺から、約略二里を隔てたる行徐家溝、呂家溝の線を占領して、此所に第三、第五師團に充分なる戰鬪の準備を爲さしめ。一方手段を盡して敵情を搜索して。明十五日を以て敵を攻擊し樣といふ考であつたので、それで十三日の夜に於て不取敢右の前進命令を下したのであるが。十三日の夜中に於て其日に於ける敵の行動が明らかに軍司令官に知れて見ると、何れの方面でも何れの場合でも、敵は大なる抵抗を爲すことなく、我れの壓するに從がつてずん〴〵と北へ北へと退ぞいて行く。此模樣では明十四日にも同じく此の手で退ぞくかも知れぬ、左すれば僅々四里足らずの行軍をして例の豫定の行徐家溝と呂家溝の線に停止するのは無益である。で若しも敵が居らなんだ場合には高家勾から龍王廟、孫家屯の線まで進で敵に近づき。若し敵が今少し前に出て居た

ならば、前の豫定の線を確實に占領して敵情を探索し樣といふ考を、既に十三日の深夜に至つて起したので、それでこれを明十四日に於て傳達せしむることにしたのであつて。又それを各師團へ各別に出さなんだのは、其師團が明日前進を起した後の狀況如何によつては、或は幾分此の要求に手加減をせねばならぬ。左すればこれを各別に傳へしめ樣より、先づ一人を第三師團に遣はして其現在の狀況によりて、多少の斟酌をして之れを師團長に傳へしめて。さて其同一人を更に第五師團に遣はして、其現狀と第三師團に傳へた所とを參酌して、それを第五師團長に傳へしめる。これが爲めには相當に思慮ある一參謀にこれを命ずるがよい、此の目標變更の要旨はよし一人で傳達しても、決して時機に遲れることなく傳達は出來るのであるから、さすればよく其兩師團の間に連絡のとれる樣に、同一人に傳へしめるが此場合最も都合がよいのである。狀況によつては或は豫定線より前進が出來ぬかも知れぬ、然るにそれを早計にも遠く距れたる騎兵旅團や第四師團に豫め傳へて仕舞て、さてそれが實行し得られぬ場合には、却つて行違ひを生じ易いからこれは傳達せずに置くがよいのである。よしやこれを傳へない所が其連絡や交通の上には、相當に其間に

距離があるので大した不都合や喰違ひは生じて來ぬ。さすれば此の必然的でないことを傳へて迷を抱かせぬ方がよい、とまあ奥元帥は此樣に考られたものであらう。それであるから山梨少佐一人に此の大切な兩師團長への訓令を傳へさせて、左右兩翼の部隊へはこれを傳達せなんだものであらう。これ實に已むを得ぬ此場合先づ先づこれでよいと自分は考るが、併し若し奥軍司令官にして昨十三日夕の命令を下す時に、若し此の考が起て居たならばそれを一般に命令して置き。全軍一同其考へで十四日に前進に就いたなれば、實際同日夜に於ける第三師團の左右兩縱隊間の連絡が絶へたり、又第三、第五兩師團の間の老孤山の北方が、全くのがらあきになつて居た樣な、危險極まる不都合不體裁が生ぜずして、今少し十四日夕に於ける軍全體、就中其主力たる兩師團の而も中央の大切なる部面に、前述の樣な過失を生ぜしむるには至らなんだであらう。で自分が元帥の爲に大に辯護した樣な理由は、たしかにあつたに相違ないけれども、又一方難者の言も大に聞くべきものであつて、命令下達の輕々しく出來ぬことは此一事でもよく知れ樣。

第五、第三兩師團の目標變更の軍司令官の意圖は、其傳達者たる山梨現少將が識

量ある適當な人物であつたので、少の遺憾もなく軍司令官の思ひ通りに、時機に先だつてそれ〴〵師團長に到著したので兩師團長は更に命令を下して、新目標に向ふて其行進を繼續せしめた。然るに敵は今度は今迄の樣にずん〳〵と退却せぬ、第三師團が更に少しく前進して見ると、敵は高家勾より龍王廟の線を堅固に占領して居り容易に退ぞくべき有樣でない。それを無理やりに前進せんとしたので、夜に入る迄も陣地占領を終らなんだのは事實である。更に第五師團に於ても同樣で、進んで復州河の右岸に進出せんとすると、敵の步騎兵の大兵力が蔡家大房身及其西南方に、頑然として占據して居つて、其前進に向つて烈しく砲彈を送るといふ有樣。終に兩師團とも舊目標と新目標の殆んど中間ともいふべき、右は陳家屯より中央城子山を經て右翼干河子に至る線を、相當なる戰鬪を交へたる後占領して此所に其夜を徹することになつた。此の十四日の戰鬪に於て少しく論じて見たいと思ふことがあるから、左に其大略を述べて見樣と思ふ。但し大體に於てよし多少の困難や混雜はあつたとしても、明十五日の攻擊の爲めには此新舊目標の中央線まで進出したといふことは、實に我第二軍の將來の爲めに少なからざる利益であつたのであつて。これか

ら考へると今朝に於ける奧元帥の目標變更の考案は實に至當であつたのであつた。〜軍の命令が途中で變更せられたのであるから、從て師團以下の各部隊長は獨斷處決せねばならぬ場合が多くなつた。であるから第三師團の右翼隊などは殆んど遭遇戰の有樣を呈したので、爲めに此日の各部隊長の行動には大に評論すべき價値がある樣に思はれる。で先づ第一に事故の多い第三師團の左縱隊から評して見ることにし樣と思ふ。

左縱隊前衛司令官山口少將は其先頭が龐家屯南方に達すると、敵の大兵力が于家屯一帶の高地に居ることが知れた。それと同時に龍王廟の高地からは二十餘門の敵砲兵の大砲擊を喰らつたので、頗る狼狽して第一番に意氣を沮喪させられて仕舞ひ。前衛の一部を龐家屯北方の敵から二千米突以上もある、極く〳〵引き込んだ稜線に配布し、さらにそれから千米突も後方の趙家屯に其豫備隊を置き、其砲兵を曲家店附近に放列を布かしめたが、敵の砲擊猛烈を極めて、到底之と相對戰することが出來なかつた。その中に其後方から砲兵旅團が進んで來て急遽これに增加したが。此の場合何人の發意でいふてやつたかは不明であるが、第三師團より其西方八張磯子

と山咀の間に今到著したばかりの第五師團に向ふて、『第三師團左縱隊の前衛苦戰中なり、至急山砲兵の增援を得て龍王廟の敵砲兵を默滅せしめたい』との請求があつた、義俠なる上田第五師團長何としてそれを斷はらうぞ。直ちに砲兵第五聯隊第四中隊に步兵第四十二隊の第二大隊を護衛として急行せしめ、これを老孤山北方の高地上に派遣し、大に第三師團の山口少將前衛に加勢せしめたが、此の增援を受けた山口前衛の行動が實以て不都合千萬であると思ふ。よし其增援は山口少將自身から請求したのでないにしても、自分の苦戰を救ひに來てくれた友軍步砲兵を、自分の位置よりずつと危險な前方に出して、其後方に立派に豫備隊の大部分を握つて、默つて其加勢を受けて居るなどゝいふことは、少しく事理を辨まへたるものには出來ぬ次第である。彼れ前衛が停止して苦戰に陷つたといふ所が餘りに敵から遠すぎる。それに其加勢を自分より前に出して自分は依然其後方に控へて居たといふに至つては、言語同斷沙汰の限りではあるまいか。此樣なやり方をしたので第五師團から來た增援隊は、非常に其第三師團の狡猾にして不親切なるやり方を憤慨して、夜に入ると共に此の大切なる位置を棄てゝ、何等命令はなかつたがずん〳〵山咀へ向つて歸つて仕舞ふた。これは實に左もあるべきことであると思ふ。後に軍の命令で此の隊はまた第三師團へ屬することになつたけれども、此樣な狡猾なやり方をすれば何人と雖ども腹を立てる。つまり自分の力の有りだけを使ひ盡して、それでも到底やり切れぬ場合に始めて加勢を賴むのである。然るに此の樣に加勢されるとのはまだまだ充分の餘力があるのに、それはずつと後方に控へて居て、餘所からはる〳〵大急ぎで加勢に來たものを、敵に近い極々危險な地へやるといふ樣な不人情千萬なやり方はあるまい。此樣なやり方が度々重なる樣になると、大切な協同動作は全く實行不可能に精神を損害すること少なからずして、終には各隊間の協同動作の犧牲的のなる樣な大弊害を生じて仕舞ふ。實に此山口左縱隊前衛司令官の處置は、大不都合である大狡猾であると自分は思ふ。此增援の請求の發意がもし萬々一にも此山口少將の口から出たものとすれば、愈以て大々的の不都合であつて人情知らずであると思ふ。步兵操典第二部第十三に曰く『己危急ニ瀕スルノ時ハ他部隊モ亦同一ノ景況ニ在ル時ナルコトヲ想ヒ妄ニ增援隊ヲ請求スルコトアルベカラズ』と、よし山砲が必要であつたからと辯解しても、其やり方が不親切で全く此條を無視して居る。單に

それ而已ではないまだ〳〵大なる不都合があるのである。前にも述べた第五師團の增加隊なる步砲兵が撤退した爲めに、老孤山の北面は全く明け放しといふ不用心なことになつた。然るに第三師團長は此の十四日の夜に於て、左縱隊前衛司令官たる山口少將に、城子山に於て右縱隊の左翼と連絡して、老孤山北方一帶の地を占領警戒すべく命じたが、同少將は如何なる考か大にこれを危險なり不可能なりとして自己が最初に敵彈を受けて驚ろいてかぢり付いた龐家屯北方の、ずつと引退がつた高地線を離れ樣とせず。『現に田家屯の南端に敵が居るのであるから、老孤山北端に出るのは危險である』といふ理由から、右縱隊左翼との間に出た步兵第十八聯隊の第一大隊の城子山占領をも、師團長に意見を具申してこれを自分の右に後退せしむることに我儘千萬な認可を得て、依然此龐家屯北方高地に畏縮して居た、これ實に何といふ腑甲斐ないことであらうぞ。豈間には餘所から加勢の步兵第四十二聯隊の第二大隊と砲兵が千二百米突も前へ出て、立派に救援の任務を盡したが第三師團のやり方に感情を害して無斷で退いた其の跡へ、何故に此山口少將の前衛だけが出られぬのであるか。更に師團長に具申して引込め樣とした城子山へは、師團からして步

兵第十八聯隊の第二大隊が夜に入つてから派遣されたが、それも少しも危險なく同山西麓を占領して、此所に堅固なる工事を施こし、翌十五日の攻擊にはこれが實に大切なる據點となつた。此の樣に決して出られぬことはない此の田家屯から老孤山の北方の線を、何といふても危險なり工事の音が敵に聞へるといふ樣な薄弱な理由を楯に怯びへ込んで終ひに放棄して濟まして居た、此の山口少將の處置は戰術上の過失であるは勿論、軍人として深くも愧づべき怯懦と人に誤解されても致し方あるまい。勿論同少將は學識に富み數度外國へも留學せられた、溫厚にして篤實なる尊敬すべき人物であるけれども、餘りに戰術上の理窟ばかりに拘泥して、石橋兩杖以上匍匐して渡るといふ樣に大事をとり過ぎるので、此樣な失態を生じたのであつて。要するに戰爭といふものは頭から危險なものである、『兵者凶器(ナリ)戰者危事(ナリ)』と昔の支那の戰術家のいふた通り、決して戰爭そのものが頭から安全なものでないのである。であるから餘りに大事を取り過ぎて學理ばかりに傾き過ぎると、軍人の極々恥辱とすべき卑怯である臆病であるといふ名をとらねばならぬ。山口少將閣下にしてからが、不惑を過ぐる僅かに二三年といふ年配で少將になつたる人である、豈に國家の

爲め　天皇陛下の爲め、其一身を擲つ位ゐのことを決して恐れる譯がない。唯だ名高い戰術家が拙い戰をやつてはならぬ、無益に人命を損じては相濟まぬと、唯々消極的な考而已を以て戰爭に對したので、若し此良好なる瞰制陣地を思ひ切て、よしや多少の損害や危險はあつたとしても、其樣なことに頓著せずして最初から――――老孤山北方――――を占領したならば、既に今日の前衛の戰に第五師團の加勢を求むる必要もなく、更らに又此の十四日の夜も城子山の守備隊と終夜連絡のとれぬといふ樣な不都合も、老孤山北方がらあきといふ危險も生じて來ぬのである。暴虎馮河は元より戒しめねばならぬが、石橋兩杖四つばい式はそれ以上に軍人には大禁物であることを忘れてはならぬ。

更に第三師團の右翼隊たる兒玉少將の縱隊に就て一言して見樣、同日午後一時舊目標地點たる滕家屯南方へ到著して、道路兩側の高地を占領し終らんとする所へ、更に新に師團から前進繼續の命令が到著した。つまり奧軍司令官の昨夜の命令を變更したる餘波は、大したことではなかつたけれども此右縱隊をして無益なる陣地占領を爲さしめたのである。で更に前進して敵と小戰を交へつゝ右翼巍峨として天に

聳ゆる、候家嚼山より上瓦房窩堡東南に亘る高地線を占領して、二拉子山、大拉子山及び其前方に散在する敵と對戰した。此の右縱隊の歩兵第三十四聯隊の口羽大隊が少し此縱隊の占領區域としては右方により過ぎて居たけれども、其嶮峻にして且つ右翼の據點として彼の候家嚼山の何としても棄て置くべからざるものであるので、最初若干の小部隊を以て之を占領せしめ、後に第一中隊をして堅固に之を占領せしめたのは、實に最も極めて適當なる處置であつて。更に此夜に於て右縱隊へ大島第三師團長よりの命令には、尖々山より左方城子山までを守備すべく命せられたのであるが、縱隊長兒玉少將は此右翼の據點たるべき候家嚼山を放棄するの不利なる而已ならず、現に前面一帶には敵が充滿して居るのであるから、それにも構はずして其戰線を左方へ移すといふことは不可能でもあり、又師團の爲めにも大不利であるので、獨斷を以て依然此の陣地を占領した儘で居たが、此候家嚼山を我手中に握つて居たことは、翌十五日の戰鬪に於て我軍に非常な利益を與へたのであつて。それは明日の戰鬪の評論に於て委しく述べる積りであるが、歩兵操典第二部第四十四に「戰鬪ノ支撐タルヘキ要地ハ縱ヒ戰鬪ヲ惹キ起シ又ハ正面過廣トナルノ虞アリト雖

之ヲ占領スルコトニ躊躇スベカラズ』

とあるのが丁度此の樣な場合をさしたのであつて。大なる正面を指揮する師團長には到底細部までに亘つて、地形を研究することは困難であるから、よし其命令には何とあらうとも此樣な大切なる支撐點たるべき地點は、獨斷を以て之を占領して置くのは下級指揮官たるものゝ當然せざるべからざる責務である。で最初に於て口羽大隊が之を占領して、更に左方へ移轉の命令があつたに關せず、兒玉旅團長が此候家嚼山を棄てざりしは、最も適當なる獨斷專行であつて、第三師團右翼隊の戰鬪はこれありしが爲めに翌十五日は非常な利益を得たのである。

此候家嚼山占領は大手柄であつたが、軍が廣正面で前進した爲めにシモノフ中將からも、クロパトキン大將からも攻勢移轉の好機だと指摘されたのは事實であつて。其弊害は終に此の第三師團の左右兩翼隊の間に顯然として證據だてられて、約三千米突といふ大空隙が生じて仕舞た。結局これは右縱隊が候家嚼山の方へ牽付けられると同時に、前に少しく手ひどく申過ぎる位に批評した山口左縱隊前衛が、如何にしても龐家屯北方高地より前に出なんだので、それで大切なる此の師團の中央に大

々的の空地が生じて仕舞たのである。これを知りたる大島第三師團長は右縱隊本隊にありし歩兵第十八聯隊の第一大隊長箕形少佐に命じて、其空隙なる姜家溝北方高地を占領せしめた。此の師團長の處置は極めて機宜に適したやり方である。然るに箕形少佐が急行して所命の地點に出て見ると、そこは土地の高くない所であつて何等の役にも立たぬので、獨斷を以て更に東北に進出して南大丁子山を占領したが、まだ此の位置では右縱隊と左縱隊の間隙を塞ぐ爲めには、引きこみ過ぎて居る而已か前に大敵を控へたる、右翼縱隊の左翼が非常に薄弱にして危險であるのを、慧眼にも看取したる同大隊長は更に獨斷を以て其半部を提さげて北大丁子山に進出して、此の左右兩縱隊の中間にある三千米突の空隙の中央を占領して、辛くも恐ろしい此の缺陷の一部を補綴した。此の箕形大隊長の獨斷は實に勇敢にして且つ立派なる動作である。度々いふ樣ではあるが、これを左縱隊前衛の動作と比較して見た時には、實に雲泥萬里の差ありといふてもよいと思ふ。然るに此夜此の箕形大隊に對して師團長から城子山西方を占領すべき命があつたので、同大隊長は南大丁子山の兩中隊を北大丁子山へ招致すると共に、師團所命の地へ移轉せんかとも考へたが、前面に

は一聯隊以上の敵兵あり、且つ此の地形は夜襲の爲めに敵が進入するのには好都合な所である。此所を今ま丸あきにして城子山の西方へ移つては、それこそ取り返しのつかぬ大變が生ずると考へたので、兵力を增して依然此地を守ることに獨斷を以て決心した。此の處置も實に聊の申分がない、自から勝敗の全責任を負ふ考でなければ此樣な處置は到底出來ぬ。けれども其儘に城子山を棄て置いては師團長の意圖に反する而已か軍の爲めに大危險なので、第一中隊の一小隊によく其意を含めてこれに城子山占領を命じた。所が此の小隊長が甚だ活用力のない男であつたと見へて、其大隊から距離が甚だしく遠くなるのと、其城子山が岩石峨々として聳立して居るので、到底之に登ることが出來ぬといふ口實のもとに、終に北大丁子山の西方で、其大隊と餘り遠からざる所に位置して此方面を警戒した。小隊長としては先づ此位の事は許さねばなるまいが、如何に夜間であるとはいへ、土地が斷崖絶壁であるとはいへ、命せられたる地點を占領して見ずして、其後方に退縮したのは實に遺憾千萬である。若し所命の地が不適當であつたならば其前に出ればよいではないか、所命の點から半里以上も引込んだ地に停止したのは、自分は其處置に如何にしても同意

することは出來ぬ、これは箕形大隊長の部下に不似合なやり方であつた。但し此場合箕形大隊長が僅かに一小隊を遠く離れた敵に近い城子山に出したのは、少しく過小ないはゞ申譯的なやり方であるといはれても致方はあるまい。第二第四の兩中隊を北大丁子山の東南に豫備として握つて居つたのであるから、其何れかの一中隊を彼の大切な中央の據點となるべき、師團所命の城子山へ出したならば、思ふに略師團長の希望を滿たすの處置が出來たに相違ない。これは惜しむべし箕形大隊長のやり方が少しく至當でない樣に思はれるのは自分ばかりではないであらう。

以上の如く箕形大隊は事實城子山方向に移轉し得ぬことが師團へ知れて來ると共に、左縱隊の山口少將は如何にしても田家屯から老孤山の線は占領出來ぬといふのであるから、師團正面の最も大切なる鐵道線路の通じたる附近は、夜の八時に至つても守つて居る隊がないといふ危險千萬な始末である。そこで師團長は何としても其儘にして置けぬので、其手中にあつた歩兵第十八聯隊第二大隊長前田少佐に、夜の十時過ぎに部下二中隊を提さげて、此の空隙なる城子山西方の回頭河と山麓との間を占領して、專ら本道の兩側を警戒すべく命令した。

此の前田大隊は暗夜咫尺を辨せざる夜の十一時に、李家屯附近の宿舍を出發して山口前衛が怯ぢ氣をふるつて頭を出し得なんだ城子山西麓に達し、前方田家屯と左右兩側に斥候を派して連絡を左右兩縱隊に求めて見たが、如何にしてもこれを得られなんだ――――得られぬ筈である兩方共に半里も引込んで居たのである――――、そこで意志堅固なる前田少佐は連絡などを取ることは止めにして獨立して城子山西麓と回頭河の間に、道路を挾んで堅固なる防禦工事を施こして、其前方田家屯方向には數個の斥候を派して、警戒に毛ほどの油斷をなさず天明に至るを待つて居た。此の前田大隊の處置の如きも實に勇敢であり至當である。要するに此夜に於ける第三師團の守備線は各下級隊長が師團長の意圖を酌んで、出來得る限りの獨斷專行を以て危險なく守備したのであつて。若しも本道右方の各團隊長が、左縱隊の前衛の樣な處置をしたならば、此夜如何なる大失態が生じたかも知れぬ。況んや敵將シタケルベルグ中將は、ゲルングロース東狙兵第一師團長に、此夜此の空隙に向て攻擊を決行すべく命じたのであるから。若しも同師團長の明朝より之れを實行するといふ意見具申がなくして、我が右縱隊と歩兵第十八聯隊の第一第二大隊が、十二分の獨斷專行をやらなんだとした時には、此夜に於て此の第三師團は木葉微塵に打ち破ぶられて、全軍の大敗を來したかも知れぬ。實に恐ろしいことであつたが、此の各隊長の獨斷は其危險より我軍を免がれしめた而已ならず、翌十五日の攻擊に當つて敵を拒止すべき主なる支撐點を悉く占領して居つたので、實に思はぬ我軍の利益となつた次第である。此の夜の如く各隊長の獨斷專行の好適例を示した戰爭は全戰役中にも少ないであらう。但し斯く小なる團隊長が獨斷專行をせねばならぬ樣になつたなる、其水源は何處にあるかと探索して見ると、つまりは奥軍司令官が昨夜の命令を今朝になつてから改めた爲めに、各縱隊長はもとより大島第三師團長にも、其陣地占領に就ての豫定計畫がなかつた。否最初例の行徐家溝附近の線に立派に豫定の計畫をして、いざそれを占領といふ間際に急に更に前進を起したので、全く朝から其計畫のなかつたよりは却つて惡るい結果を來し、終に夜に入つて各下級指揮官が必死獨斷專行を行ふて、それで漸く其軍司令官の計畫變更の不足を補ふといふことになつたので。これに付けても命令を下したり之を變更したりすることは、容易ならざる大影響を部下全體に及ぼすといふことを、深く〳〵銘肝して居らぬといふと、

頗ぶる恐るべき結果を來すは目前のことである。

先づ第三師團は此れ位にして、更に今から第五師團の十四日の行動に就て論ずることにし樣と思ふ。第五師團は戰史第一卷五七四頁にある部署を以て、十四日午前五時出發して右縱隊は山咀に、左縱隊は呂家溝に向はんとして居たが、南瓦房店附近では若干敵の手剛はい抵抗が或はあるかも知れぬと考へたので、左縱隊は其出發の間際に至て右縱隊前衛と協力して此敵を攻擊することになつたので、南瓦房店に向つて前進したが敵はさしたる抵抗を爲さずして、左縱隊はほんの若干の加勢をした而已で右縱隊前衛は首尾よく敵を驅逐して南瓦房店を占領した。で山田少將は最早協力の任務は果てたと思ふたので、これから呂家溝に向かはんとして李家屯南端――南瓦房店西南――に其諸隊を集合せしめて居た。丁度それが十四日の午前十時少し過ぎであつたが、此時右縱隊の本隊と共に前進して居た第五師團長上田中將は、南瓦房店東南の于家屯附近で山梨軍參謀の行進目標變更の命令を受領したので、直ちに左縱隊の編成を解いて、師團諸隊を南瓦房店附近に集合せしめて、舊左縱隊は舊右縱隊本隊の後尾に續行せしめることにしたのである。

此樣な次第で第五師團は昨夜の命令を今朝少しく修正した爲めに、左縱隊たる山田少將の縱隊の分進の時間が遲れたのが却つて大好都合を持ち來して、軍命令の變更の爲めに其部署の上にはさしたる混雜を生せなんだ。勿論これが爲めに幾分の時間を徒消せしめたのはいふ迄もないが、要するに此の師團は命令變更の「プラス」と「マイナス」とで其運動が極めて都合よくいつたのも實に奇妙千萬であると自分は思ふ。單にこれ而已でないのであつて、敵の騎兵の不注意とクロパトキン大將の後方よりの干涉とで、敵の方では多分此の得利寺陣地の左方へ日本軍は迂回するであらうと、自分勝手な考がへを定めて居たシタケルベルグ西伯利第一軍團長は。此の第五師團の鐵道線路より遠く左方に出でざる樣になつた、我此の運動の報告を今擊退せられたシモノフ騎兵支隊から受領して、全く敵の一個師團を見落したとは夢にも知らず、これを以て我第二軍の最左翼と考へて他方面から得たる情報と照し合せて、我第二軍を四個旅團よりなる一軍と誤まりたる判斷を下したのである。由來世の中の事といふものは何が仕合はせになるか知れぬもので、此の第五師團が若しも昨夜の計畫通り、其左縱隊を盛家勾より張家屯、三道溝を經て呂家溝方面に進まして居

たならば。軍命令變更の爲めに第三師團同樣な過廣な正面に其諸隊が散らばる而已か、敵騎兵の注意を鐵道西方に惹くの結果は場合によつてはこれが動機となつて、其少しく西方に前進して居る第四師團のあることを敵に感づかれたかも知れぬのである。甚だ申上方に語弊があるかも知れぬけれども世の諺にいふ所の『過失の功名』といふのは此類のことをさしたのではあるまいか。去るにても我第二軍は實に天祐を蒙むること多大であると、自分は常に此の樣な不思議な事實を見る毎に、深く我日本軍には　皇祖皇宗の冥々の中より、御加勢あらせられるのを信ぜざるを得ないのである。

此樣な次第で第五師團は兵力を集結して、山咀、八張礇子といふ方に前進したが、復州河の右岸には至る處に敵の歩騎兵を見る而已か、少しく前進を始めると處々方方より砲擊を蒙むるといふ有樣であつたので、若し此の夕方近くなつて無理な前進をした爲めに、思はぬ本戰を惹起してはと大事を取り、北溝から干河子に亘る師團に適當なる正面を占めて、復州河の左岸に停止し其兵力を縱長に配備して宿營に就いた。此日に於ける第五師團の行動は先づ概して適當であつたと思ふ。併しこれに

得利寺ニ於ケル急雨中ノ露軍ノ退却

筆道白原石人道九十九

は理由があつて其前面の敵は、豫定の退却を行ひつゝあるシモノフ騎兵支隊であつて、更に敵の本陣地とはずつと距れた所で停止したのであるから、隨て第三師團の樣に種々樣々の間違ひが生じなかつたのであつて。强ち第三師團と比較してこれが非常に巧みに軍隊を運用したといふ次第ではない、要するにそれは好運に總てが運んだといふのが何よりの適評ではあるまいかと自分は思ふ。

第四師團は昨夜の豫定の如く、其復州街道が鐵道線路を離れて居る度合が廣くなるに從ふて、愈主力との間の間隔が廣くなる如く行進したる而已か。其獨立騎兵を巧に使用して復州にある敵の西伯利哥騎兵第五聯隊の第五中隊を、此の早朝に威嚇したので彼れ騎兵隊長ブトリン二等大尉は頗ぶる周章狼狽を極めて、其小哨も信號兵をも收容するの暇なく、命からゞ〳〵東北方へ退却して仕舞た爲めに、全然此方面に第四師團の前進したことは少しも敵には知れぬといふことになつた。但し第四師團も此の復州の騎兵を追ひ飛ばすには、少なからざる盡力をしたものであつて、歩兵第八聯隊の下江大隊からは選拔の二中隊を輕裝さして、又た更に歩兵第三十七聯隊の竹迫大隊を全部背嚢を卸さして、復州の騎兵追放の爲めに驅けらせた而已か。

此の竹迫大隊の石井大尉の中隊は早朝より獨立騎兵の支援として、既に復州方面に活動して居たのであるから、油斷千萬にもほんの申譯的に復州に置いた敵の騎兵の狼狽は非常なもので、何等我軍の兵力や編組に就いて報告する處の沙汰ではない、殆んど取るものも取りあへずして退却し、而も此の復州の敵騎兵中隊は此日はもとより其翌十五日の戰鬪の終るまでも、まだ其本隊なる西伯利第一軍團に合して居らぬ樣であるから、此の方面は全く以て黑暗々といふ有樣であつたのである。蓋しこれ敵の油斷が第一の原因ではあらうが、併し前にも述べた第五師團の十四日の行動と、第四師團の前進と實在を、敵の上下一同に少しも知らしめなんだのであつて、第四師團の此日の行動は實に申分はなかつたものと考へる。

此日に於ける秋山騎兵旅團の行動は別に評すべき所はないが、總ての情報よりして我が第二軍が曲家店以北に進出したと考へたので、明日は勇ましく前進して此の第二軍の行動に伴ふ樣にせんと考へて、其考を以て宿營と明日の集合地を命令したのは、何でもないことではあるが、爲めに明日の行動に少なからざる勢を付けたも

のといふも支障あるまい。

此日午後四時過ぎに於て軍司令官が南瓦房店に到著して、第三師團の狀況が極めて不明であつたに關はらず、其他の各方面の情報を綜合して敵の兵力を我と同等以下と判斷して明朝此敵を攻擊するといふことに斷乎として決心を確定して、第三第五師團には其現位置を堅確に固守して明日の攻擊を準備せしめ、第四師團には現在の位置を守備して軍の左側を掩護し、若し情況が之を要したならば一部を以て直接に、敵の　側を脅威すべきことを逸早くも命令して、更に騎兵第一旅團には此の明日の第二軍司令官の意圖を通報して、明日の行動に向つて先づ不取敢據るべ根底を各團隊長に與へたのは、流石は熊本連絡以來我國唯一の戰略大家として、軍人界に名高い人傑だけに實に敬服するの外はない。此の急場を處理する機敏なる命令を得た各師團は、略これによりて明日の爲すべき概略を推し得られるので、其考を以て宿營に就きつゝも明日の心構へをするのである。そこへ丁度明日に對する本命令が下るのであるから、此の逸早く大略の梗概だけを示した豫告命令を、此の十四日の午後八時過ぎに發したのは、實に奥元帥の奥元帥たる大價値のある所を示したもの

と自分は考へる。

奥元帥は此夜午後八時過に得たる情報によつて、愈〻明十五日の攻撃に關する本命令を下したが、それは十五日の戰鬪を研究する次回に於て評論することゝして、一寸こゝで此の十四日迄に於ける露の南部兵團と稱したる西伯利第一軍團の行動に就いて評論を試みて、此の第五回の研究を終ることにし樣と思ふ、

此月六日に於てクロパトキン將軍より南進準備を命せられたる西伯利第一軍團長シタケルベルグ中將は、必死其軍團を得利寺附近に集中するを勉め、其兵力を集結し得次第に更に旅順方面に南進せんとしつゝあつた。が此の中將は此の前後に於て普蘭店夾河の間に集中しつゝある我第二軍を如何に判斷したかといふと、サムソノフ騎兵支隊も更に其後來りて其騎兵を指揮したるシモノフ中將も何れも思はしき確かな報告を齎らさぬので。種々なる內外人の諜報やら歐洲方面からの通信やらを綜合して、南山攻撃の爲めに用ひたる四個の師團は、之を等分して其半は旅順に向ひ、他の半數たる二個師團は北方に向ふたに相違ない、其後若干の日本よりの兵力輸送はあつた樣であるが、それは思ふにあの堅固なる旅順の攻圍方面に加はつたであら

うから、多分此の普蘭店附近一帶には二個師團以上の兵力はあるまい、といふのが南部兵團長たるシタケルベルグ西伯利第一軍團長の敵情判斷であつた。但し此の判斷は極めて其の根據が不確であるのであるから、盛に騎兵を前面に放つて我情報を得るに勉めたけれども、少數ながらも我各師團の獨立騎兵の巧慧機智に富んだる行動と、秋山第一騎兵旅團の剛膽なる勇壯なる挺進等は、常にサムソノフ支隊の敵情搜索を思ひの儘に妨害した爲めに、彼れは適確なる有力なる兵力上の報告を呈出し得なんだ。で六月七日此のサムソノフ支隊の活動不充分なるを齒痒ゆしとして、瓦房店に於て同支隊に達して其以後騎兵支隊の指揮を取ることになつたシモノフ中將は、到底此の樣な騎兵ばかりの偵察では、敵の兵力編組を暴露せしむるの目的を達し得ないといふ所から、歩砲兵の增援をシタケルベルグ將軍に請求したので、同將軍は歩兵二聯隊、騎兵一中隊、砲兵一中隊よりなれるルトコフスキー少將支隊を編成して、これを同中將の指揮に屬したのが六月十日頃のことであつたが、クロパトキン總司令官は此の支隊の前進に不同意であつて、斯くては無益に兵力を分離する樣なものである、速に得利寺附近に全西伯利第一軍團を集合してそれを一括して南

進するがよい。左もないと各個擊破に逢ふの恐れがあるといふ訓令を與へて、全く此のシモノフ中將の步砲兵を加へて我軍の兵力を威力を以て探索せんとする計畫に同意せなんだ。爲めに前述の步砲の有力なる增援を得たけれども、充分に之を使用してシモノフ中將の意圖通りの大搜索を行ふことを得なんだので、依然敵情は極々不明であつたのである。

斯く種々なる事情の爲にシモノフ中將支隊の行動が、殆ど逡巡式に陷て少しも活潑なる動作を爲し得ぬ中に、忽にして我第二軍が大擧して北進を起すに至つたので、同騎兵は其强壓を蒙むることになつて手も足も出せぬ羽目に陷り、充分に敵情を探るを得ずして、漸次に瓦房店方向に退却する樣に餘儀なくせられて、其間に於て

『敵の大沙河以東にある兵力は步兵三旅團、騎兵、砲兵各六中隊にして、同河以西のものを合せば其總兵力は想ふに步兵四旅團、騎兵十二中隊、砲兵若干中隊ならん。廣大なる正面を以て北進中なれば今や攻擊の好時機なれども、支隊の兵力は到底これが決行を許さず』

との報告を六月十三日午後三時三十分に呈出した。彼れシモノフ中將は敵情不明

の爲め步砲兵の增加を得て、普蘭店、夾河間にある我第二軍に向て、攻勢的に偵察を決行するの考であつたので、シタケルベルグ中將もこれに同意して、一時ルトコフスキー支隊を編成して之に屬したのであるから、其儘にして置けば今少し我第二軍の狀況が露軍の方にも知れたに相違ないが、クロパトキン大將が之に同意を與へなんだ爲めに、折角の計畫も途中で腰を折られたといふ有樣で居た所へ、思ひがけなく我第二軍が急に北進を始めたのであるから、忽ちにして其强大なる兵力の壓迫を受けて、騎兵が自由自在に搜索の術を逞ましくするの餘地がなくなつて、押されて押却しながら前に揭げただけの敵情を探り得て、報告を軍團長に呈したのであるが、此の報告に於て既に全く第四師團なるものが見落されて仕舞ふた。蓋しこれシモノフ中將無能の致す所ではあらうけれども、遠き後方から矢たらに最前方の騎兵のことに迄干涉の手を總司令官が伸した爲めに、終に其搜索の伎倆を充分に發揮するを得ずして、此の樣な大々的な過失を犯すに至つたので。當の責任者シモノフ中將の責むべきは勿論であるが、クロパトキン大將も此の敵情誤報の責任の一部を負はざるべからざるはいふ迄もあるまい。

此我第二軍が得利寺に向ふて攻撃の決心を以て前進を起したる六月十三日に、不思議千萬にも西伯利第一軍團長シタケルベルグ中將はクロパトキン大將から蓋平まで呼び寄せられて、そこで南進の計畫を謀議して愈〻來る十八日よりシタケルベルグ西伯利第一軍團は、普蘭店附近の敵に向かつて南進を起こすことに決定した。丁度面白い暗合で此の十三日の朝に我第二軍は北進を起こしたので、其の急報は電話を以て得利寺の軍團司令部から、午前十一時ごろに蓋平の軍議の最中へ報告せられたので、同軍團長はクロパトキン大將と列席して今後の處置を略〻相談して、何はさて置き此の附近にあつた露軍を得利寺方面へ增援せしむることなどを議定して、急そいで得利寺へ歸著して見ると例の歩兵四旅團云々のシモノフ中將の報告を手にしたので、自分はもとより歐洲よりの諸通信及クロパトキン大將よりの談話等より考へても、敵の北向したものは歩兵二個師團と見るが至當である。然るに今此の直接之が搜索に任じて居るシモノフ中將の報告を得て見ると、それが全くしつくりと符合して居るのであるから、シタケルベルグ將軍は自己の推察の殆んど神の如きに自から驚歎して、全然日本軍は二個師團と確信して仕舞た。此の樣な誤りに陷つたのは

其前に出て居るシモノフ中將も同樣であつた。であるから鐵道線路附近を最左翼として竈子窩――北瓦房店街道の間に、五個の縱隊となつて前進する日本軍の方に而已全部の注意を向けて仕舞つて。普蘭店から左斜めに復州へ向つて肅々として前進してゆく第四師團方面には、隨分相當に其行進に氣付かねばならぬ徵候はあとで考へて見れば、少なからず澤山にあつたのであるが、それを無理に打ち消して何にそれはほんの一部の騎兵の行動であると見做して仕舞た。これ蓋し實際目前に現出する徵候を重んぜずして、自己の心中に豫め想像式の敵情を畫いて仕舞て其他を顧みなんだのである。是れ全く單に一人や二人の誤りとはいへぬ、露軍指揮官の大部分が此樣な誤りを犯したのである、それが抑〻得利寺敗戰の大原因である。野外要務令第十四に曰く

『情況ヲ判決スルニハ直接ニ敵ヲ探偵視察シテ得タル情報ト他ノ諸點ヨリ得タル認識推測ヲ集メテ成レル證迹トヲ以テスルヲ最モ確實ナルモノトス』

如何にも其通りであるが、併しこゝに最も注意すべきは、此時の場合の樣に眞つ先きに自分の腹の中で、推想的に敵の兵力を決定して仕舞て置いて、それを根據と

して情況の判決をすることになると、前に鴨綠江の戰鬪の評論の時にもいふたと思ふが、其判決は全然實際と相合はぬものになつて仕舞ので、結局此の場合の如き南山攻擊の日本軍四個師團は、其一半二個師團を旅順へ進め其他の二個師團を北方に向けたといふ推想が、クロパトキン大將以下シタケルベルグ中將も、シモノフ中將も其頭の中へ先入主となつて仕舞たので、それを標準として敵情を判斷し樣としたので、全く一師團を見落すといふ大失態を生じたのである。其主なる原因は騎兵の無能にあるは勿論であるが、或る一個の自分に都合のよい成案を腹の中で決定して、それから偵察させたり情報や諜報を聞いたりすると、自然其成案に都合のよい樣に引きつけられるものであるから、よく〳〵公平無私なる心を以て此の要務令第十四の比較をせぬと、如何にそれがきつしり符合した樣に思ふても、それは實際と全く反對な結果を生ずるのは、現に此の得利寺の一個師團の見落しでも知れるではないか。

そこで十八日前進の相談に蓋平にまで招致せられたシタケルベルグ中將は、我軍の前進するといふ急報に接して急いで得利寺に取つて返し、更に此夕のシモノフ中

將の報告と自分の推想とを照合比較して、自己軍團と其兵力に大差のない二個師團の進來するものと確信し、こゝに始めて先づ得利寺の陣地を占領して我第二軍を迎へ、敵が愈〻近迫した所で攻勢に移轉するといふ考で、十三日の夕に得利寺陣地占領の命令を下した。一體シタケルベルグ將軍は得利寺に最初到著した時から、攻守何れにせんかとの決定が甚だ不確かであつたので、三日も費やして陣地の偵察をして、六月九日から得利寺の陣地に工事をさせ始めたが、其方法が占領部隊に其地區の工事をさせ樣といふやり方でなく、工夫代りに兵卒を一般的に使用したのと、土工器具が不足であつたのとで、極めて不充分なる工事しか出來ずして、更に此の十三日より愈〻防禦陣地占領と決定したので、大に努力して工事を急いだけれども、終に戰鬪開始までにこれを完成するを得なんだ。これ蓋し以上の如き種々なる原因も元より影響をして居るけれども、先づ第一番に大影響を與へたのは軍團長の心が攻守何れとも決せなんだのが抑〻の根本であつて、其の又源を探つて見るとクロパトキン大將は、左の如き訓令を同軍團長に與へて居る。

「貴官ハ旅順方向ニ前進シ、成ルベク大ナル敵ノ兵力ヲ誘致スベク、之ガ爲メ當面

ノ敵若シ微弱ナレバ速ニ之ヲ擊破スベク、之ニ反シ敵若シ優勢ナラバ決戰ヲ避クルヲ要ス、又情況判明セザルトキハ、戰鬪間豫備隊全部ヲ費消スルヲ許サズ、要スルニ其軍團最終ノ目的ハ、金州陣地ヲ恢復シ更ニ旅順ニ前進スルニアリ』

クロパトキン大將の樣な世界的大豪傑が見たらば、決して了解出來ぬことはないであらうが、自分の樣な單純な頭のものには此樣な錯雜混淆した任務は到底實行しきれぬと思ふ。何れにしても此樣な訓令を受けて居ては、シタケルベルゲ將軍の心中に攻守何れとも決し切れなんだのは無理ではないと思ふ。左すれば此の得利寺の陣地が戰鬪までに相當の時日があつたに關せずして、充分に工事を以て堅固にすることの出來なんだのは、全く此の總司令官の訓令に源を發して居るといふても一言もあるまい。我野外要務令第五に何といふてあるか、

『命令ハ其傳達ニ長時間ヲ要シ其時間中情況ノ變遷測リ難キ時ハ殊ニ簡短ニシテ細事ニ渉ラザルヲ要ス又發令者情況ヲ豫知スル能ハズ受令者ヲシテ現況ニ應シテ施行セシムル時ニ於テモ亦然リ此ノ如キ場合ニ於テハ訓令ヲ下スヲ適當トスルコトアリ而シテ訓令ナルモノハ唯其目的ヲ示スノミニシテ其施行ノ方法ハ全ク受令者

ニ委任スルモノトス』

前の訓令の極めて戰術上の原則に違反して居ることは、自分が拙ない筆をふり舞はす迄もない、一度び此の野外要務令の條文と前の訓令を並べて置いて、一寸一覽したならば皆無戰術なることいふことを知らぬものにも、如何にもこれは至當ならざる指圖のし方であるといふことが知れ樣。であるから此樣に細かしく情況を豫想して命じた甲斐は少しもなくして、其結果は同條末文の

『長時間ヲ隔ル將來ノ事項ヲ豫メ細密ニ渉リテ命スルハ常ニ十分ニ實施シ得ル稀ナリ』

といふ結果になり終つた。これ實に其根元の罪は全くクロパトキン大將の此の訓令にあるのである。

此樣なことをして混雜をかへして居る最中、我第二軍はシモノフ騎兵支隊を追ひまくつて、早や其翌日の十四日にはまだ陣地の充分に工事の出來ぬ所へ、ひし〳〵其の顏前へ近迫して來たが。先入主となつたるシタケルベルグ中將はどこ〳〵迄も二個師團と我軍を見くびり切つて居たのであるから、右翼及び中央の地區を以て日

本軍の攻擊を支持して、左翼方面にグルングロース師團とクラスゴ旅團を用ひ、相協力して攻勢に轉せしむるの計畫を立てた。併しながら其内心には不安な點があつたものと見へて、此の十四日の夜になつてから殆んど眼前に接著したる我日本軍に向つて、騎兵又は獵兵を用ひて暗夜に乘じて其配備、增加、退却を偵察する樣に、各部隊長に命令した。これ實に何といふ變てこなるやり方であらう、此樣なことをしても何の利益のないはいふ迄もあるまい。

更に此時ゲルングロース將軍に向て、午後六時に攻勢移轉の命令を下したが、同師團長は意見具申をして此攻擊を明朝に延してもらつた。此場合日本第三師團の左右縱隊の中間が大空隙を生じて居たので、此の我軍の過失缺點に乘じて西伯利第一師團をして、下瓦房窩堡方面から此の虛につけ込まうといふ根抵のある計畫ならば、それは隨分夜間攻擊でも成功したかも知れねば、又適當な處置であつたらう。然るに同軍團長の之を命じたのは去る見込を立てたのではなくして、單に漠然と此の午後の六時から攻擊を開始せしめ樣といふのであるから、これも亦無謀極まるやり方であつて師團長の意見具申は實以て尤千萬である。斯くの如く此の軍團長が戰術的

能力が不充分であつたのと、軍團の耳目たる騎兵を指揮したシモノフ中將は自己の意見が行なはれず、頻りと諸方から小言ばかり飛んで來るので終に病氣になつて、其指揮權をサムソノフ少將に渡して仕舞て、唯だ非役として其支隊に食客をして居るといふ有樣。此の邊にも何か露軍指揮官中の感情の衝突があつたのであるから、爲めに愈〻騎兵の搜索の運動は唯々申譯的であつて、少しも活氣ある有益なるやり方は出來ず、得利寺陣地の前まで追はれて來て、其所で先に增加を得たルトコフスキー支隊を中央及右翼陣地へ返却して、騎兵支隊は穴の中の樣な右翼の孫家屯に隱居したので、最早何としても第四師團の前進を見付け出すことは出來なくなつた。

軍團長はこれより先き西伯利哥騎兵第五聯隊第五中隊を、二等大尉ブドリンに指揮せしめて復州に出してあつたのは前にもいふたが、同大尉は其前方黃旗大屯、高力城子には小哨を出して廣く東南方を警戒し、其後方の馬廠、臺山には發火信號隊を配布して、此方面に對する用心おさ〳〵怠りなかつたのであるが。寡少な兵力を以て廣大なる警戒に任じて居たので、充分なる情報を得ることが出來なんだ而已か、十四日の早朝には我第四師團より出せる將校斥候や、其邊の馬賊の爲に脅かされて、

前に述べたる信號兵はもとより二個の小哨をも收容せずして軍團本隊の方へ逃げ出すと、そこには第四師團の主力が到著して軍團との中間を遮ぎり、最早到底其方面には進めぬので生命から〴〵北に向つて當て度もなく逃げて仕舞つた。此の樣な出來ごとのあらうとは軍團長は元より夢にも知らぬ。ブドリン大尉の報告がないから此方面は大丈夫であると、少しの懸念もせずに濟して居たのは氣の毒な程な油斷である。但し此の騎兵中隊は實に不思議な退却をしたもので、其主力は北に向つて逃げて仕舞つたが、それが棄て放してゐつた例の黃旗大屯と高力城子の小哨と其他二ケ所の發火信號兵は、此の得利寺の戰鬪が濟んでしまつた翌日の、六月十六日まで我軍が近く其軍團主力との間に進入し、其中隊が逃亡してしまつたことも知らずして、安閑として依然其地を守備して居たといふことである。これでは如何に軍團長が復州方面の敵情を知らんとしても、到底其希望を達し得ることは出來ぬのが至當であらう。

即ち我第二軍に於ては此の得利寺の陣地に、一個師團以上の敵兵が據守するといふことを偵知し、其前面へ近かく相接して陣地を占領して、明日を以て此の敵を攻

擊するの決心を定め、まだ確然たる命令は下さなんだが、其意圖だけを日沒前後に於て部下の各師團に豫告させた。是れは即ち野外要務令第十五に

『部下ハ其上官ノ直後ノ意圖ヲ告知セラルヽコト愈〻詳ナルニ從ヒ其意圖ニ關シ候察事件ノ要否ヲ判別スルコト益〻容易ナルモノナリ』

とあるが如く明日の攻擊準備をなさしむるに、最も缺くべからざる必要なる處置を機敏に不取敢して置いて、それから其後の情報等に考へて攻擊命令を下さんとしつゝあつた。然るに露軍に於ては先入主となりたる誤まれる情報に信を置き過ぎたのと、更に彼の復州の騎兵中隊に野外要務令第十五の所謂、

『又一定ノ時間中形勢變化ノ有無ヲ確知スル等ハ大ニ價値アルモノトス』

とある注意を與へて置くことをせなんだので、何等報告のないのは即ち無事の知らせであると速斷し、其騎兵中隊が遠の昔しに追ひまくられて、そこには恐ろしい我第四師團が入れ替つたることも知らず。右翼、中央を以て我軍の前進を支持して、其左翼方面より一師團半の大兵力を以て攻勢に轉せんとして、十分に其成功を期待したるシタケルベルグ將軍は、自己の敵情判斷に一個師團の大違算を生じて居るこ

とを知らずして、其攻撃の成功を夢みつゝ此日午後の六時より無謀にも攻勢に轉せんとして居つたのであつた。未だ眞面目の勝敗を爭ふべき戰鬪は交へぬけれども、此の十四日夕の兩軍指揮官の決心と處置を一見した而已で、既に明瞭に明十五日に於ける本戰の勝敗は決定して動かすべからざるものとなり了つたのである。

戰史評論

第六回得利寺の戰鬪

成仁武夫補
無名戰士評

文部省
圖書館

六月十五日の戰鬪

軍司令官奥元帥閣下は前回に述べしが如く、先づ不取敢明日に關する自己決心の梗概を日沒前に於て其部下に傳達して置き、さて諸方面より頻々として到著する情報報告を綜合して、同夜大略左の如く敵情を判斷した。

「敵は龍王廟高地附近一帶より蔡家大房身に亘つて陣地を占領し、龍王廟及蔡家大房身北方高地には敵砲兵あり、前面一帶に騎幕を張り居たる有力なる騎兵は、復州方面に在りしものと諸共に北方に退却して隻影なき而已か、右翼騎兵第一旅團

大正
2. 8. 22
内交

方面の敵も亦北方に退却せり。斯くして敵は主要陣地に據りしものにして、其主要陣地にある敵の兵數は約一師團なるべく。其他諸方に散在するものを合するも多くも二個師團の上に出でざるべし』

敵情が頗ぶる不明であつたのであるから、其判斷も極めて漠然たるものであつたが、要するに如何に多く見積るも我第二軍より優勢ならずといふことだけは確認したので、前に各師團へ軍司令官の意圖を傳へにいつた軍參謀の歸るのを待つて居る所へ、午後十時前後に其各參謀は確かに司令官の意圖を傳へて、更に各師團の參謀官を同伴して歸著したので、其各報告に接して愈〻全般に亘れる情況が明瞭になつて、正面得利寺附近には大に兵力が增加した樣であるが、之に反して復州方面には少しも敵兵力の增加と見るべき徵候なく、其兵力も推想ではあるが略〻二個師團內外との算當がたつたので、愈六月十四日午後十一時に於て更に明日に關する大要左の如き本攻擊命令を下した。

一、第三師團は現在の位置を固守して敵を拒ぎ、第五師團の戰況發展を待ちて適當に動作すべし

二、第五師團は明十五日未明に於て小鄒家屯に進出し、右旋回をなしつゝ蔡家大房身高地の敵を攻擊すべし

三、第四師團は復州――蓋平街道より南進する敵に對して軍の左翼を掩護し、情況によりては其一部を以て敵の右側を脅威し、主力の攻擊を助くべし

即ち大體に於て鐵道右方に於て守勢を取り、其左方より攻擊を開始し此攻擊進捗すれば第三師團をも攻勢に轉せしめ、以て敵を一擊の下に破摧し盡さんと計畫したのであるが。此命令を發したる後更に軍副官を特に第四師團に派遣して、明十五日少なくも一旅團の兵力を東方に分遣して、直接主力の戰鬪に參與せしむべきことを命令した。此の夜に於ける奧軍司令官の情況判斷及び其判斷より生じたる決心と處置とは、一點の非難すべき所がないと自分は思ふ。敵兵力の判斷の上には少しくこれを寡少に見たといふ傾きはあるけれども、大體に於て之を二個師團內外と見做して、其攻擊に二個師團半を使用したのであるから、敵兵力の判斷も先づさして非難すべき程の誤判ではない。又主力攻擊の向ふべき本攻方面を第五師團の方に定めたのも實に適當であつて、此方面には前に橫たはつた復州河があるけれども、到る處

徒渉が出來るからこれは前進に大障害を爲さず、一般に地形は第三師團方面に比して、其攻擊動作を進捗せしむるに都合がよい。これに反して龍王廟から二拉子山大拉子山に亘れる、第三師團前面の敵陣地は土地一般に我陣地より比高大きく、多く瞰制の位置を占めて居る上に、其最東方には城兒山の巍然として天表に隆起するありて、容易に攻擊前進をなし難い地形である而已か、其れに對抗したる第三師團は六千餘米突の間に其師團が散在して、左右兩縱隊の間には大なる空隙があつたのを、漸くにして補綴し得たといふ有樣であるから、此の師團の現在の狀況からいふても、これを第五師團が山咀附近に其兵力を集結して居て、何時何れの方面へ指し向けるにも支障のないのに較べると、是非とも此の十五日の攻擊は第五師團方面を主攻擊とするが至當であるばかりか、更に此方面には第四師團の一部を以て敵の全く不意に出でゝ、此の攻擊方面の敵の側背を衝かしむることが出來るので、此の攻擊點の選定は、地形上、情況上、何れよりしても尤も當を得たものであると自分は考へるのである。

而して右翼の防勢を取るべき第三師團の方面はといふと、一般に陣地が敵陣地より低いから少しく瞰制せられる害があり、且つ其正面が少しく廣大に過ぐるかの感があるけれども、右には候家嗚山といふ據點ありてこれに右翼を托すれば最も堅固である而已か、鐵道附近には城子山といふ高起したる良據點があるので、此の二所が防禦の支撐點に敵當であるはいふ迄もなく、此の兩高地の展望は何れに向つても自由自在である爲めに、敵の行動は一も見のがすことなくこれを察知し得るのであるから、此場合は純然たる防禦ではないけれども、歩兵操典第二部第五十六の

『陣地前ノ地形開豁ニシテ遠キ射界ヲ有シ且其內部及背後ノ交通自在ニシテ敵眼ヲ遮蔽シ其翼ヲ堅固ナル支撐點ニ托スルコトヲ得バ最モ有利ナリ』

とある防禦の條文に悉皆とはゆかぬけれども其大部分は適合して居るので、此方面を以て一時敵の前進を支持して、第五師團に攻擊を決行せしめて其戰況によりて、更に此の師團をも攻勢に轉せしめんとした奧閣下の攻擊計畫は、自分は更に一點も不同意をいふ所はないと思ふ。

前に既に不取敢攻擊の決心を示されて居る上に、更に夜に入つて此の詳細なる本命令が傳へられたのであるから、各師團はそれ〴〵明日の準備を整頓して十五日の

拂曉までには何れの方面も遺憾なく其準備が整頓した。此位手まはしよく豫め仕度が出來て、それで攻撃が成効せねばそれは實に不思議であるといはねばなるまい。

此場合に於て露軍當方面の指揮官たる西伯利第一軍團長シタケルベルグ中將は如何に敵情を判斷したかといふと、既に度々前にも述べた通り全然我第二軍を以て二個師團と確信し、自己軍團と同等若しくはそれより劣勢なりとして、昨日以來陣地前に近迫して夜を徹したる我軍に向ひ勇ましく攻勢に轉ずることに決心して、概要左の如き處置をなした。

一、東狙兵第五師團は龍王廟附近より右翼李家店西方高地に亘る線を占領して敵の前進を支へ、已むを得ずんば漸次退却して干家溝口隘路を死守すべし

二、東狙兵第一師團はグラスゴ旅團と協力し上下瓦房窩堡方面より前面の敵の左翼を攻撃すべし

三、サムソノフ騎兵支隊は孫家屯附近にありて軍の右側を警戒すべし

大略右の如き命令を下したのであつて、兩軍共に同じ樣に一部を以て陣地を支持して主力を以て攻撃を決行したのである。それが其攻撃の方向が入れ違ひになつたのであるから、丁度紋所の二ッ巴といふ樣な狀況を呈して、もしも何れも其攻撃が成効したとすれば、ぐる〳〵まいをせねばならぬ樣な都合であつた。事實さうなつたら實に奇觀であつたらう、がその樣な閑話は休題して。さて此のシタケルベルグ將軍の處置は如何にといふと、既に其判斷の上に於て敵を三分の一だけ少なく見たる大過失があるのであるから、到底此の攻撃の成効すべき見込のないのはいふ迄もないが、まだ其上にも其攻撃點の選定がこれが決して適當であるとはいへぬのであつて、此陣地から攻撃に移るとすれば中央よりはもとより進めぬ。左右何れの方面からも決して都合のよい攻撃は出來ぬけれども、土地が攻撃動作の比較的にやり易いのと、早く我第二軍の退路を衝くの便があるので、蔡家大房身の方面から老孤山西方へ突出するも一方法であらう。又現在の方面即ち敵の右翼から攻撃するにしても、其主なる兵力を上崔家屯附近に集めて、我第三師團の右翼據點たる候家嘴山を第一に占領し、此の成効と同時に上下瓦房窩堡方向から協力して攻撃したならば、これこそ實に此の日の攻撃の最も適當なるやり方であつたらうと思ふが。シタケルベルグ中將は東狙兵第一師團長ゲルングロス少將に下瓦房窩堡方向より敵の左翼を

攻撃すべく命令して、更にグラスゴ少將にこれに助力すべきを命じた。これでは此方面の攻撃は容易に成効せぬ理由である。先づ一翼を奪略して敵の注意をこれに惹き、敵が兵力を其方面に注ぎかけんとする虚に乘じて、下瓦房窩堡方面から一氣呵成的に遮二無二我陣地へ突進したならば、思ふに成効を占め得たかも知れぬのである。で陣地の左方より攻撃に轉じたのは先づよいとしても、其攻撃實施を我軍の中央に當る第三師團右翼隊の左翼よりせしめたのはこれ實に大失策であつた。此の如く其攻撃計畫が至當でなかつた上に、一師團の見落しをしたのであるから、終に大敗北を招くに至つたのは已むを得ぬ次第である。元來前回にも述べた如く此陣地占領のシタケルベルグ將軍の考といふものが、攻守何れであるか漠然たるものであつたので、何れともつかずで此の得利寺の陣地を占領したのであるから、勢ひこれが適當に利用出來る筈がないのであつて。其上攻勢に移轉せんとする陣地としては、此所は決して都合のよい陣地ではないと自分は考へる。

此の指揮官の十四日夜に於ける決心及び處置をざつと一覽したならば、此の戰鬪の如何なる結果に終るべきかは、餘りに判斷しにくい程の難問題ではない樣に思ふ。

思ふに敵は非常な危險に瀕しつゝあるを知らず、尙ほ且大勝利を夢想して居るのであるから、如何なる大困難、如何なる大危險に陷るかも知れぬ、實に恐ろしい〳〵場合に立つて居るのであつて。我は飜つて敵の見落したる第四師團の一旅團を、全く敵の豫想以外の地點より、彼の退路に迫らせんとしつゝあるのであるから、其勝敗の數は戰かはざる以前に於て決せられて居るのは何人も否認すまい。況んや敵は其極めて不合理なる危險なる計畫をも思ふ樣には確かに實行し得ずして、到る處で手違ひや過失を連發したのであるから、あの位の敗北で濟んだといふのは露軍の爲めには頗ぶる僥倖で大仕合はせであつたのである。いでやこれから此戰鬪の細部に亘つて委細に評論して見樣。

先づ第一に最右翼に位置した騎兵第一旅團の行動から研究して見樣と思ふが、戰史の上で見ると昨夜既に軍の攻撃計畫に就ては詳細なる通報を得て居るべき譯であるのに、該騎兵旅團は依然軍の主力は曲家屯以北に前進したものと推想して、費家屯に向て前進した樣に記述してあるが、これは少しく不審である。が併し要するに何れにしてもさして其旅團の行動に變りはないとしても、昨夜の軍の通報の屆いた

か否かゞ極めて不明であるのは、如何にも其記述のし方が不充分である樣に考へられる。で十五日の午前五時に旅團は吉利少佐に騎兵二中隊を附し、前衛として梁家店に向はしめて更に他の一小隊を城兒山方向に出して、第三師團と連絡せしめんとしたが。兵力不明の敵が和尙屯に居るといふ報を得たので、歩兵一小隊、騎兵一中隊、機關砲二門を前衛に增加して、前の吉利少佐の率ゆる二中隊と合して、歩兵一小隊、騎兵三中隊機關砲二門の前衛となし、新に其前衛司令官を大佐田村久井（現少將）に命じた。斯くして前進してゆく中に前方及び左方には所々に敵兵を見るに至つたので、旅團の主力は一時梁家屯南方に開進した。此時の秋山支隊の兵力は騎兵第十三、第十四兩聯隊、歩兵第六聯隊の三個中隊（少佐澤井佳十郎指揮）、砲兵一中隊と外に機關砲が六門あつたのである。これだけの兵力があれば先づ一寸と一仕事は出來るのであるから。和尙屯に敵あり又費家屯附近には敵の槍騎兵の樣なものが彷徨して居り、更に陽家口の高地には敵砲兵の布陣しあるを知つて速に之を攻撃せんとして、其準備をして居る所へ軍命令が到著して、左の要旨を傳達した

『騎兵第一旅團は其歩砲兵と協力して賈家店附近より敵の左側背を脅威すべし』

そこで秋山少將は先づ其砲兵中隊に命じて、梁家屯の西北高地に放列を布かしめて、費家屯及陽家口の敵に向て砲撃を開始し。それと同時に全旅團が大活躍的に運動を始めたので、丁度此方面に向ふたるグラスゴ旅團のベルフイリエフ中佐の前進部隊は大に此の騎兵旅團の爲めに牽制せられた。單にそれ而已でない此の秋山騎兵旅團と、澤井少佐の歩兵大隊と砲兵一中隊の大活躍は、前に述べたクロパトキン大將の『左翼は迂回され易し』の注意と符合したので、非常に敵の左側に危險の念を抱かしめて、彼れグラスゴ旅團が躊躇逡巡して此日の攻撃の機を逸したのも、要するに其主因は此の騎兵旅團の脅威が大成効をした結果に外ならぬ。此日に於ける此の騎兵第一旅團が、騎兵第三聯隊と相協力して其支援の歩砲兵を極めて大膽に使用して、僅々一中隊の砲兵と三個中隊の歩兵を、左右前後に巧妙に移動運轉せしめて、變幻出沒敵をして非常の大兵力が此方面に向ふたる如くに信せしめたる爲めに。東狙兵第一師團の攻撃にも參加せねばならぬが、去りとて此の大切な軍團の左側を開放して置く譯にもゆかぬと、思案に時を費やして決斷無きグラスゴ少將は東部上瓦房窩堡から城兒山にかけて其全力を展開して、我が第三師團右翼隊の側背に迫るべ

き大任務を決行するの勇斷が出來ず、躊躇逡巡して只管此の方面の警戒に而已心配して居る中に。此の旅團の進出を待ち兼て、前面下瓦房窩堡方面から第三師團の右翼縱隊の左翼に向て攻擊したる、東狙兵第一師團の大部分は大苦戰に陷つて仕舞て、終に此日の攻勢移轉をめちや〳〵に打ち毀して仕舞たのである。これ蓋し何人の罪であつて何人の手柄であるかといへば、秋山騎兵旅團長の思ひ切つたる冒險的なる大膽極まる行動と、其支援として之に屬したる澤井步兵大隊と砲兵中隊の、神出鬼沒殆んど端睨すべからざる働をなして、其兵力を五倍にも十倍にも敵に信せしめた伎倆の致す所であつて。グラスゴ少將躊躇の罪も勿論輕くはないが、此の秋山旅團長の拔群なる大勳功は實にそれと正反對に、それよりも二倍も三倍も大きいのである。若し此の最右翼方面の騎兵旅團の脅威が不充分であつて、グラスゴ旅團が時機を過またず東狙兵第一師團に協力して、一師團半の兵力を擧げて第三師團の右翼縱隊の兩翼から猛進したならば、如何に兒玉少將が頑强に死守しても、此の候家嗤山より北大丁子山東北方までの陣地は、守りをほせることが或は出來なんだかも知れぬ。若しさうなると軍にも師團にも大なる豫備隊は控置してないのであるし、且つ其豫備隊のある地方からは頗ぶる遠隔して居る方面であるから、終に此方面から我第二軍の戰線は擊退せられることになつて。よしや左翼第五師團方面の攻擊が成功しても、此方面の失敗の爲めに其勝敗は何れに歸するか知れぬといふ、非常な大危險が生ずるのであつたのであるが。騎兵旅團の思ひ切つたる勇敢無双の行動で敵の一旅團を巧みに此の方面に牽制して、機を失なはず正面の攻擊に參加し得せしめなんだ爲めに、例のゲルングロス少將の攻擊は全然失敗に終つて仕舞て、戰は全く我第二軍の勝利に歸したのである。斯く考へて見ると此の騎兵旅團の動功は實に容易ならざるものである。特に其行動の勇猛にして機敏なりしが爲めに、敵は騎兵の徒步戰を以て全く步兵部隊の攻擊と誤認して、更に一層の不安を此方面に抱いたといふことは、露軍の行動といふ書物の中にも明記してあつたと思ふ。先づ軍の翼方に行動すべき騎兵支隊の行動としては、此の騎兵第一旅團の六月十五日午前に於ける行動の如きは、實に模範と稱するに足るものであつて、騎兵操典第二部第十三の『會戰間騎兵ハ我ガ軍ノ側背ヲ掩護スルト同時ニ敵ノ側背ヲ搜索若シクハ脅威シ苟モ乘ズベキ機會ヲ得バ攻擊ヲ決行シ云々』とあるのに全く一致して居るのである。

而して其騎兵指揮官の意を體して少しも勞苦を辭せず危險を顧みず、時々刻々に其隊を行動移轉せしめて、殆んど秋山將軍の手指を動かすと同樣に、機敏勇敢に活動したる澤井歩兵大隊と砲兵中隊は。これ全く騎兵支援隊の好模範と稱するもなほ餘りあるものと自分は考へるのである。で今度は更に第三師團右翼縱隊の戰鬪に就て少しく研究して見樣。

其前に騎兵第一旅團と此第三師團の右翼縱隊との間に介在して居た、第三師團の獨立騎兵のことを一寸研究して、それから右翼縱隊に移ることにし樣。此日此の騎兵第三聯隊は午前七時西南屯に達して見ると、前方小陳家屯の方から敵縱隊が我に向つて前進して來る。其兵力容易に侮るべからざるものであるのを見てとつた中山聯隊長は、若し此の敵兵にして我右縱隊の右側背に迫るに至つたならば、容易ならざる全軍の危險であると考へたので、直ちに其一個中隊を陳家小店北方高地に徒歩戰を爲さしめ、其地に注意深くも掩體を築設して堅固に之を守備する覺悟をして居ると。敵には中々多くの後續部隊があつて砲兵もある樣であるので、愈此地を死守するの必要を認め、更に他の一中隊の半を徒歩せしめて戰線に加へ、且つ其危殆の

狀況を述べて急使を派し、騎兵第一旅團に向つて來援を求めた。其中に前面の敵は大陳家屯へ向つて前進して來るので、始めて之に向つて射擊を開始して大に敵を狼狽せしめたが、敵は漸次其兵を展開して大陳家屯より張家廬に亘る線を占領して猛烈に射擊し、我も亦之に應射したけれども、彼は少なくも歩兵二個中隊以上の總數なり、我は騎兵一中隊半の徒歩せるものであるので、其困難は實に非常であつたけれども毅然として少しも動搖することなく、此の强敵の前進を喰ひ止めて居る中に、獨立騎兵旅團から連絡の爲め且つは應援の爲め到著した歩兵一小隊と、これより先き右縱隊から元興へ出してあつた歩兵一小隊が、直接間接に加勢に加はつたので、敵は數度前進を企てたが遂に其目的を達し得ず、現在の位置に停止して盛んに射擊を此の騎兵第三聯隊に指向した。もし此の騎兵聯隊の大努力がなかつたならば、騎兵第一旅團が軍所命の賈家店附近まで進出せぬ中に、敵は此の騎兵旅團と第三師團右翼縱隊との間に侵入して、其連絡を遮斷して仕舞ふのみか、此の樣な情況を呈して來ると勢ひ騎兵旅團も背後が不安になつて來るので、前に述べた樣な勇敢剛膽なる動作をなして、敵を此方面から脅威することが出來なくなり、奥軍司令官が我が

左翼第五師團方面の攻擊に向つて、敵が此の方面から兵力を加勢にやることが出來ぬ而已か、得利寺附近にある總豫備隊をも、成し得たならば此方面に牽制してやらんとの考から、『全力を盡して敵を此方面より脅威せよ』と同旅團に命じた計畫も全く畫餅に屬するに至つたかも知れぬ。これ實に騎兵第三聯隊長が彈藥少なく兵力寡弱なるにも關せず、毅然として陳家小店附近の陣地を占めて、諸兵連合の敵のブトクザイノフ中佐部隊を拒止しをほせた爲めに、此樣な右翼方面の大成効を成就せしめたといふも溢美であるまい。これ實に騎兵操典第二部第五十八の『騎兵ハ敵ノ前進ヲ遲滯セシメ或ハ自衛其他特別ノ目的ノ爲徒歩防禦ヲ行フコトアリ而シテ巧ニ地形ヲ利用スルコトハ此目的ヲ達スル主要條件ナリトス』と、同第六十二の『各部隊ハ勉メテ工事ヲ施シ陣地ヲ堅固ナラシムルヲ要ス』とある原則に全く適合して居るのである。更に其後騎兵第一旅團の增援と共に彈藥の補充をも受けて終日奮鬪し、敵の退却に當つては少しも躊躇することなく、尾擊して敵の退却を困難ならしめて尹家口子まで進出し、敵に大打擊を與へたのは師團の獨立騎兵聯隊の動作として、少しも申分のない大手柄であると自分は考へる。

で、まづ此の前置きの騎兵第三聯隊のことはこれ位にして切りあげて、これから第三師團右翼縱隊の戰鬪に移ることにし樣。此の右翼隊は昨日既に相當な苦戰をして、一夜を非常に廣い正面を持ちつゝ强大なる敵と對峙して過ごしたので、軍司令官から豫告の命令は早く受領して居たけれども、此の十五日に於ける防戰の諸手筈は中々充分に整頓したといふ譯にはゆかなんだのである。で危險極まる狀態にあり し昨夜は幸にして夜襲も受けず。更に今曉拂曉に乘じて敵に出て來られても大に困つたに相違ないが、敵はグラスゴ旅團と東狙兵第一師團の攻擊計畫が、殆んど全く一致しない樣に出來て居たので、それで終にこの攻擊最好良の時刻とも稱すべき夜明け方をも空しく過ごしてくれた。此樣に敵が僥倖にもどん〳〵餘裕を與へてくれた爲めに、此の右翼隊も大に諸準備が整ひかけたる午前七時過ぎより、敵が漸くにして攻擊を始めてくれたので、我軍の爲めには實に萬事非常な好都合であつたのである。前述の如く敵の攻擊計畫の齟齬からして時間に思はぬ餘裕を得たので、此の第三師團の右翼隊は陣地至る所に堅固なる工事を施した。その上に尖々山東方の砲兵中隊の陣地の如きは、射擊方向を充分に廣めると共に、其肩墻も極めて立派なも

のが出來あがつた。丁度此の樣に徹夜必死に防禦の準備をして、それが略完了する頃に西部上瓦房窩堡方面から、一旅團以上とも思はれる敵兵が、堂々として攻擊前進を開始したので。尖々山の東方に於て諸準備完成して手ぐすね引ひて待ち居たる、我砲兵第三聯隊の第四中隊は全力を擧げて此攻擊歩兵を猛射し、出るに隨がひ進むに隨がつて其鼻尖きを頗ぶる猛烈に、遠慮も會釋もなく打ちとばしたので、流石の東狙兵第一師團の第二、第三聯隊も其猛威には敵する能はず、終に潰走に陷つて上瓦房窩堡村端に二線となつて停止するといふ始末。終には此の師團も此の砲兵の威力に怯びへ込んで仕舞て、最初到底あてにならぬと見切りをつけて、獨力で攻擊する決心をしたグルングロス少將も、グラスゴ旅團の進出する迄已むを得ずして攻擊を中止せしめた。是れ實に此の野砲第三聯隊第四中隊の射擊の確實にして、且つ自己の危險を顧みずして全力を此の攻擊歩兵の撲滅に努めた功である。右翼隊は一方其左翼へ迫つて來た前述の攻擊部隊を躊躇せしめると程もなく、又其右翼高家勾附近には敵砲兵が現出して、盛んに我第四中隊に向て砲擊を加へたが、不運千萬にも此の中隊の陣地からは此の高家勾方面が射擊することが出來ぬ。大に煩悶して居る中に敵は此方面にも數大隊の歩兵を進めて、城兒山に向ふものもあれば、其西麓を過ぎて我が右翼に向つて進んで來るものもあり。又更に陳家小店の騎兵第三聯隊の方でも有力なる敵兵が攻進して來たのであるから。今や此の兒玉少將の指揮する第三師團の右翼縱隊は、左右兩翼及正面より優勢なる敵の攻擊を受けて、多事多端戰鬪頗ぶる困難なる境遇に立つたのであるが、物に動せぬ兒玉少將は少しもこれを驚ろかぬ。敵の兵力を約我に三倍するものと判斷して、現在の地を固守して師團主力の進出を待たんと決心し、午前七時の此の決心を大島師團長に報告すると共に、成し得たなれば若干の增援を得たき旨をも申添へた。此の判斷も此の增援請求も此の場合の都ての處置も、自分は全然同意である。斯くする外には詮方があるまい。此樣に兒玉少將が寡兵を以て、泰然と敵を拒止するの決心の臍を堅め得たといふ原因は、昨夜以來今朝にかけて敵が豫想外の時間の餘裕を與へてくれたので、歩砲兵ともに急峻なる斜面の頂上に堅固なる掩體を築設し得た爲めに。攻擊を準備する諸方面よりの敵の砲擊も、攻擊歩兵の猛烈を極めた小銃射擊も、大なる損害を我が此の方面の守兵に與へることが出來なんだので、それで沈著して此の樣な堅忍なる決

心をすることが出來たのである。

自分は此の場合に於て深く感心したことがある。實に奥元帥といふ人は傑らい人であると思ふ。これ實に所謂神算鬼籌とも稱すべきものであらうと考へるのは、決して自分ばかりではあるまい。今朝來の戰鬪を祝家屯の軍司令部にあつて、じつと觀察して居た軍司令官は全軍戰況の中に於て、最も第三師團の右翼隊方面が危險であることゝ、其師團の豫備が少ないことを看破して、機に遲るゝことなく何等第三師團長から請求があつたのではないけれども、僅々軍の總豫備隊として歩兵第六聯隊の二個大隊しか貯へて居らぬ、極々手薄な豫備隊の中から其一半たる歩兵第六聯隊第三大隊を、其大隊長高島少佐に率ひしめて急行第三師團へ增加した。その祝家屯を出發したのは午前八時過ぎ頃であつたが、此の高島友武少佐の大隊が第三師團長のもとへ到著して、第三師團長の豫備として握つて居るのは歩兵第十八聯隊第三大隊而已で、今此軍から送られた高島大隊を合せて二大隊となつた所へ、丁度兒玉少將から增援の請求が到著したので、直ちに歩兵第十八聯隊の第三大隊を其請求に應じて右翼隊へ急派した。然るに此の增援隊たる遠藤少佐の大隊が丁度又都合好く

右翼隊右翼の最危急の場合に、戰線に到著することが出來たので、爲めに此方面の形勢を挽回し、志氣大に振起したのである。蓋し此の樣に昨夜以來錯雜を極めたる第三師團の戰況を、遙か後方の祝家屯に居る奥元帥が、其掌を指さすが如くに詳知して居り、且つ其右翼隊の右翼が少し危險と思はれるのに、大島中將の手下には第八聯隊第三大隊が一つしか居らぬことを、適當に判斷してそこへ躊躇することなく殘り少なの總豫備隊の半部を急派し、それが丁度兒玉少將の求援の請ひと全くゆき合ふて、少しの遺憾もなく其右翼へ增加せられて其方面の戰況を、立派に持續せしめ得たのは偶然といへば偶然かも知れぬが、此所に確かに奥元帥用兵の巧妙が含まれてあるのではあるまいか。否自分は決して偶然とは思はぬ。これは必然奥元帥の深謀遠慮の致す所であつて、此元帥の他に立ち勝つた點は即ち此樣な際どい所で著々として現はれて來るのであると信ずるのである。

グラスゴ旅團が此方面から攻進して來たに就て、此右翼隊の關谷聯隊の右翼を托した候家嗤山が非常な大切なるものになつて來た。もし此の嶮山を昨日我手に握つて居らなんだならば、城兒山を占領して其比高の高きを利用して、我右翼へ迫つて

來た敵を防ぐに非常に不利で、終には爲めに尖々山附近の右翼隊主力方面の陣地も、これが爲めに其右側背が危險になり、或は之れを維持し切れぬ樣になつたかも知れぬ。然るに昨夜口羽大隊が之を占領して居て、其後度々兵員を加へて此れを右翼の據點としたので、敵も容易に我右翼へ近接することが出來ず、終に確實に此陣地を立派に守りをほせる樣な、非常な我軍に好都合を持ち來したのであつた。

其の後此の右翼方面に於ては、彼のグラスゴ旅團の再度の攻擊に當り、殆んど兒玉少將の全豫備を使用し盡して、更に危險を感ずる迄の場合があつたけれども。其時は既に第五師團方面は勝利の我軍に歸したること明白なるのみか、更に其左方敵の右側背へは、歩兵第十九旅團を基幹とせる混成旅團が進入したので、全般の戰況全く我に大有利なるべき徵候明瞭となつた時であつたから心配する程のことはなかつた。此際に於ける下瓦房窩堡東方に突出して、近く敵の大兵と相接して居た歩兵第三十四聯隊第八中隊の、宇都宮少尉の先進部隊が敵の必死の逆襲に對する奮鬪の如きは、實に目ざましきものであつて、爲めに僅々二分隊の同少尉の部下は二十二人迄死傷して、殆んど全滅の慘怛たる有樣を呈したが。頑然として前進陣地を守つて一歩をも退ぞかず、箕形大隊其他の增援を得て、終に全く彼れ五百餘人の逆襲の敵兵を殆んど殲滅に陷らしめたのは、大局に於ては大なる關係はないけれども、最も激烈を極めたる勇ましい戰鬪といはねばなるまい。

第三師團左右兩翼隊の間には入り込んで、北大丁子山と城子山とを占領し此空隙を補綴して居た、歩兵第十八聯隊の箕形大隊と前田大隊とは、何れも兩翼隊との連絡不充分なりしに關はらず、前に大敵を控へ烈しき銃砲火を被むりつゝも、頑强至極に此廣大なる正面を守りをほせて。更に敵の退却するに當つては勇敢に前進し、前田大隊の如きは左翼縱隊に先だつて上拉子溝附近を占領し、以て敵の退却に非常な打擊を與へたのは其意志の堅確なる實に稱賛すべきものがある。特に中央の支樽點たるべき城子山を、此の兩大隊が一中隊宛を出して占領して、これが瞰制的の射擊を以て敵の攻擊前進を苦しめ、且つ我左翼縱隊の突進に有力なる掩護を與へたる功は、決して少々なるものではないと自分は考へるのである。

そこで今度は第三師團左翼縱隊の戰鬪に移るが、此山口少將の前衛は依然昨夜の位地の儘にあつたが、午前十一時頃より敵の龍王廟附近の砲兵の射擊が、頗ぶる緩

慢不正となつた所から全力を擧げ、突擊を敵の中央に決行することゝなり。歩兵第三十三聯隊長藤本大佐が二個大隊を率ひて、第一線となりて老燒鍋東方高地を目標に猛進し、同隊の第三大隊を豫備として山口少將がこれを率ひて中央後から續行する計畫で、餘り後方に引込んで居た爲めに充分敵情が知れ兼ねるといふ所から、藤本大佐自から一中隊を率ひて偵察をして見たが、當然退却したらうと考へたる敵は依然として龍王廟高地に居るらしく。且つその前から老孤山北方に出て居た同聯隊の第二大隊の一部の見た所によると、敵は退却所ではない、今の先得利寺停車場から三聯隊程の兵が下軍して、それが右左りに分進して我兩翼へ向ふたとの御注進。これも實は敵情を過大千萬に報告した、穿鑿すれば切腹ものゝ輕率なる誤報であつた樣だが、それが爲めに折角計畫した突擊前進も一時腰を折られた有樣であつた。併し其新來兵の增加した報告のあつた頃から、愈前面の敵の銃聲は振はなくなり、第五師團の攻擊前進は著々として進捗し、正午頃には龍王廟高地には全く砲聲を聞かぬ樣になり、其時前後から敵大縱隊が得利寺附近の隘路を退却するのが、老孤山から引きりなく見へる樣になつたので、先づこれならば大丈夫といふ見當がついた

から。こゝに始めて追擊前進を起して急進し、終に龍王廟高地其他に於て敵の砲煩を鹵獲したり敵の軍旗を奪略したりしたのは、先づ〳〵以て大手柄といはねばなるまい。が併し此の藤本聯隊が此の十五日の午前に於て、機に乘じて突擊前進をする爲に適當なる時機を知り得ずして、一度前進を決してから又躊躇するといふ樣な、面白からぬ行動をするに至つたのも、結局昨夜老孤山の北まで進出して居らなんだのが原因であつて、歩兵操典第二部第二十二に何とある、

「戰勝ヲ豫期シ得ルニ至レバ各級指揮官ハ時機ヲ失セズ追擊ノ準備ヲ爲スヲ必要トス此際各級指揮官ハ成ルベク前線ニ在ルヲ要ス」

とあるではないか。又同第三十九に何とある、

「前線ニ在ル指揮官ハ射擊ノ成果其他敵ニ對シテ獲得シ得ベキ利益ヲ最モ速ニ判別シ得ルヲ以テ機會ヲ逸セズ直ニ突擊ヲ決行スルヲ要ス此際後方部隊ハ直ニ前線ニ跟隨シテ之ヲ推進シ其効果ヲ完ウスルコトヲ圖ルベシ然レドモ上級指揮官ハ前線ニ在リテ自ラ好機ヲ看破シ突擊ヲ命令シ又ハ後方部隊ヲ前線ニ增加シ以テ突擊ノ動機ヲ誘起スルヲ要ス」

と明記してあるではないか。此兩條の記載する所は實に尤も千萬な次第であつて、これから考へて見た時には、假初にも指揮官と名の付くものが後方に而已引込んで居ては、到底追擊や突擊の好機を看破することが出來樣筈がない。であるから此の第三師團の左縱隊前衛も、聯隊長や旅團長が今少し前に位置して、否や其部隊も諸共にずつと前に進めて居たならば、誤まつたる第二大隊の報告の爲めに、折角の前進時期を躊躇するには至らなんだであらうのに、これは實に殘念千萬なことであつたと自分は思ふ。けれども少しは遲れたとはいふものゝ、此左翼隊が中央より勇進した爲めに敵は非常の窮境に陷ゐり、軍旗も砲車も打ち棄てゝ退却するに至つたのであるから、此の日に於ける中央よりの進擊に於て、先づ昨日以來の失態の幾分かを賠償し得たといふてもよいであらう。併し何れにしても此戰鬪に於ける第三師團の主力たる左縱隊前衛の行動は、不充分であり例の『爲サヾルナリ』に近かつたと評するが極めて公平なる概評ではあるまいか。

さて防勢にあつた第三師團方面はこれ位にして、これからは此日最も華やかな立役者の位置に置かれた、第五師團の攻擊に就て研究することにし樣と思ふ。一體此

日に於ける第五師團長上田閣下の攻擊計畫は、如何にも餘りに大膽千萬にして、且つ巧妙に過ぎたるの觀がないではないが、それが思ひの儘に成効して敵を十分に擊破し得たに付ては、蓋し大に理由があるのであつて、これは充分に研究して置くべき價値があると考へる。今第五師團が十五日午前二時に部署した所を、戰史第一卷六二五頁に就て見ると。少佐平野金六の率ゆる步兵一大隊砲兵二中隊を右翼隊として、それに復州河左岸王家屯の高地を堅固に占領せしめ。夜暗中に於て他の中央隊、左翼隊をも復州河の右岸に移し、さて拂曉と共に此の王家屯の平野大隊を樞軸として、殆んど九十度以上にもならうといふ大右旋回を、敵前咫尺の地に於て決行し樣といふのである。これをしも大膽に過ぎ、巧妙に過ぐるといはずして、はた何ものをか大膽巧妙といはうやであるが。併しそれには大なる根據があつて、其實行が決して至難でないといふことを思慮深き上田師團長が、昨夜半に於て看破して居た爲めに、此樣な思ひ切つた大膽な行動をやつたのである。決して〳〵無謀な無計畫な眞似をしたのではないのである。でそれを一つ詳細に述べて自分の意見を加へて見樣と思ふ。

前にも一寸述べたと思ふが、第五師團は既に昨日の午後に於て、復州河の右岸に進出する考があつたのであるが。昨夜占領して居た陣地附近まで進出して見ると、所々方々前方一面に歩騎兵が出沒して、且つ其後方からは砲兵が烈しく砲擊を向けるので、復州河の左岸に停止して夜を徹したのであるが。熱心にして思慮周密なる上田將軍は、山咀附近に到著して此の前面の敵情不明なるを感ずると共に、其師團を河の左岸に止めて全力を盡して敵情の偵察をしたのである。で其諸報告を綜合して見ると頗ぶる敵情を明にすることが出來て、復州河右岸一帶に散在せる敵の歩騎兵は、これ全く彼の陣地前に出せる先進部隊であり、盛んに虛勢を張つた砲兵の如きも、其の敵の本防禦陣地ではなく。つまり西房身から買賣街を通じ馬家房身に亘る一線より以南にあるものは、全然敵の前進哨的の先進部隊であることを確知し得た。實際敵の本陣地はそれよりもまだ〳〵ずつと後方であつたけれども、上田將軍は今述べた線の西南には、眞面目に我に抵抗するものが居ないと知つたので、そこで自己師團の主力を復州河の右岸小鄒家屯附近に集結するのは困難でない。若し此所まで我師團が進んだ場合に敵の攻擊に出會ふとしてからが、彼も其本陣地から此

所まで進出して來ねばならぬのであるから、一度復州河の右岸小鄒家屯北方の高地を占領し、そこに立脚地を定めた以上は、彼と對等互角の戰鬪をすることは出來る。左すれば十五日午前一二時の暗夜に乘じて、先づ王家屯の復州河左岸の高地に小さいながらも要地を占めたる一部隊を出して、之を師團旋回の樞軸として歩砲兵に若干の騎工兵までも加へて、先づ扇の要の如く小さく堅固なる右翼隊を置き。更に中央隊と左翼隊を編成して、小鄒家屯を中央として其左右に展開せしめ。其中央後の花子尖に師團の豫備隊を配備するごとく命令した。これ等諸隊は其豫定位置を午前五時迄に確實に占領し、さて一同それだけの準備が出來たれば、右翼平野大隊を軸として右に大旋回を決行し樣といふし組み。蓋し此の大右旋回區域内に敵の本線があるとすれば、如何に優勢なる兵を用ひても味方の計畫を少しも躊躇せしめず、其實行が出來ると期待することは少しく無謀であるが。それ迄の間には前進哨的の敵が居る而已で、決して手剛はい敵が居らぬと確信したる上であるから、上田師團長は此樣な大膽なる思ひ切つたる計畫をしたのであつて、果せる哉敵の配備は全く上田將軍の判斷の如く、西房身から馬家房身に引ひた一直線より西南には居らなかつ

たので、此巧妙にして大膽に過ぐると思はれる計畫は、思ひ通りに決行せられたのである。が此所が一つ大に注意を要すべき點である。此の日に於ける第五師團の此の樣な大膽巧妙な計畫が、十二分に成効したからといふことを獨鈷にとつて、其敵情にも其場合にもお構ひなく、濫りに敵前大旋回を行ふが如きは蓋し非常な過失である。敵に向て攻進するに當つては一直線に進むのさへ、中々容易に出來ることでないのは、一度實戰を經た人は何人も否認せまい。然るを左右に連繫しつゝ其進度を加減しつゝ、敵彈雨下の間に於て旋回を實行するといふことは、これは實に殆んど不可能といふてもよいのであつて、密集教練の方向變換のやりにくいのでも知れるでないか。それを强いて決行し樣といふ人があれば、それは無謀である、無理であるといふても決して過言でないと思ふ。で此の上田將軍が復州河の右岸近傍には敵が居ぬことを確知して、其敵の澤山居らぬ地方で大旋回をして。始て北面から東北面に其戰線の方向を變へ、此れから眞面目に攻擊を決行し樣とした。此日の樣な場合で且つ敵情が確かであつた時には、決して其やり方に非難すべき點はないけれども、若し如何なる場合に於てもこれを證例として、猥りに旋回や何かを企てゝは、

それこそ實に大變である。一大事である。彼のクロパトキン大將の遼陽會戰に於ける、太子河右岸の大兵力の大右旋回の如き、如何に其失敗の悲慘であつたかは何人も知る所であらう。更に奉天會戰に於ける故乃木大將閣下の第三軍の大右旋回の如き。これは其場合なり敵情なりが極めて此の第五師團と酷似して居た。からして頗ぶる冒險的なる大膽な行動であつたに關せず、苦戰はしたけれども大成効を收め得たのである。此の二大戰例と此の第五師團の行動との比較研究をして、嫌ふべく忌むべきではないけれども、漫然として敵前に於て大旋回的に、攻擊進行の計畫を立てるなどは非常に危險なことである。常によく〳〵銘心する必要があるのである。但し敵情と其場合とによりて指揮官自身の心中に、確然として勝利の自信が立つた場合には、決して之を避ける必要はないのであつて、要するに此の如き攻擊のやり方は、常法でないといふことを心得て居られるのが必要であらう。

其後に於ける第五師團の行動に就ては、細部に亘つて之れを研究したならば、容易ならざる紙數を費やさねばならぬから、其關大に注意して研究せねはならぬことを而已を評論して、他は概して適當に實行せられたりとの一言の下に此公評は略した

いと思ふ。第五師團が最初午前五時頃、王家屯から小鄒家屯左右に亘る線に展開し、更に前進して午前九時頃には右は王家屯から左は楊樹溝東北高地に亘る線に進み。更に正午頃は右翼董家屯成山より左翼窰溝附近に亘る線まで、歩兵第十九旅團と相連繫して前進した有樣は。其間多少の齟齬や行違ひは元よりあつたとしてからが、實に正々堂々たるものであつて、全く立派な攻擊前進であつた。就中砲兵第五聯隊長永田現陸軍少將が、聊かも躊躇することなく歩兵の前進に跟隨して、殆んど歩兵線と其距たる遠からざる成山附近に、危險や困難に少しも頓著せずして陣地を進め、第五師團の攻進に少なからざる有形無形の大援助を與へしは論ずる迄もなく。第三師團の左翼隊が前進を喰ひ止められて昨日以來大困難をして居た、其障碍の本尊たる龍王廟東方高地の敵砲を、其の側面から縱射したのは、實に大なる手柄であつて、此方面の砲兵が其砲煩を委棄して逃げたのも、つまりは此の砲兵第五聯隊の威力が、其主なる原因となつたものであらうと自分は思ふ。先づ此方面の砲兵の動作は歩兵攻擊に隨件して前進する、砲兵の模範と稱するに足るであらうと思ふのである。其の他左翼隊に屬したる歩兵第四十二聯隊が、勢に乘じて蠟樹溝東北高地を占領せん

として、旅團長塚本少將から他隊との連繫を破るといふので、其前進を制止せられた如きは、左して大したことではないが、攻擊に加はる部隊は常に此樣な意氣があつて欲しいと自分は思ふ。兎角前進々々と其度毎に催促せねば、容易に前進せぬといふ樣な風に陷り易いのは、實に慨嘆すべき傾向であつて愼重な態度をとるといへば頗ぶる立派な樣ではあるが、これを一面から見た時には、確かに一種の志氣沮喪と評せられても辯解のし樣はない。で自分は軍人には常に上官から控制せられる樣な意氣を失なはず、何時でも何處でも推し進められる樣な態度に出ることなく、常に引き止められる樣な勢にあつて欲しいと思ふ。此の歩兵第四十二聯隊のことに付て、一寸平素の自分の考を述べて置く次第である。元より此樣なことは此隊ばかりではなく、他にも澤山あつたに相違ないが、今目に付いた所で自分の理想を一寸述べて見た次第であるのだから、其つもりで聞いて頂きたいのである。

其後第五師團は歩兵第十九旅團と連繫して、前進を續けつゝ敵の此方面の本陣地たる山嘴より李家屯西方高地に亘る、堅固なる工事を施こせる敵陣地を午後二時前後に於て、激烈なる戰鬪を交へたる後奪略した。此の勇戰は敵の防禦方面に致命傷

を與へて流石頑强を極めたる西伯利第一軍團も、終に總退却をせねばならぬ運命に陷つたのであつて。此十五日の戰鬪を概評して見ると、最も骨を折り最も危殆に瀕しつゝ、よく其戰鬪を持續したのは第三師團の右翼隊であつて。正々堂々勇猛無双に前進して其實力を以て敵を壓したのは第五師團である。而して天から降つたか地から湧いたかと敵が全く、吃驚仰天する程に彼の意表に出た爲めに、終に敵を總退却に陷らしめたのは第四師團の混成第十九旅團の手柄である。で今から此の歩兵第十九旅團のことを研究して見樣と思ふ。

第四師團長は十四日の午後九時に於て、全師團を率ひて東派子に向つて前進することに決心して、それ〴〵命令を下して仕舞つたが。十五日の夜中の二時に軍命令を受領して見ると、『現在の地を守備して軍の左側を掩護し、情況により一部を以て敵の右側を脅威すべし』といふことであつたが、小川師團長の考へでは此方面には敵が兵力を派遣せぬのであるから、此所に停止して守備して居る程の危險は少しもない。で昨夜の命令通りにして置けば、自然と得利寺の敵を脅威する而已ならず、場合によつて軍主力の本戰に參加するにも便利であると考へたので、昨夜の部署を

變更せずして、依然東派子へ向て前進することに決心して居た。此場合に於ける小川師團長の決心は至當である。停止の命令は此方面の情況を小川中將程には知らぬ、奥軍司令官から發せられたものであるから、更にそれ以上に此方面の敵に付て心配のないことを承知して居る小川閣下が、停止を前進に改めたのは少し穩でない樣ではあるが、それで十二分に軍司令官の意圖には合して居るのである而已か。軍命令が出てから停止を前進にしたのでなくして、既に五時間も前に師團命令を下してから、其後に停止の命令を受けたのである以上は、軍司令官の意圖に背むかぬ限りは、師團の命令も變更せずして部下に心中の混雜を起させぬがよい。前に十四日の所でも評した如く、命令の變更は少なからず其各隊に手違を生せしむる上に、其命令したものゝ信用を害することも亦莫大であるから、此の場合に於ける小川師團長の獨斷は、自分は實に少しも支障ないと考へる。で小川中將は依然昨夜の命令通りに實施する考へで居つたが、午前五時に至り更に奥元帥から少なくも歩兵一旅團を其地より尖山子楊家店方面に派遣し、直接第五師團の左翼に連繫して、敵の右側背を攻擊せしむべしといふ命令を受け取つたので、こゝに始めて昨夜の命令を變更して一

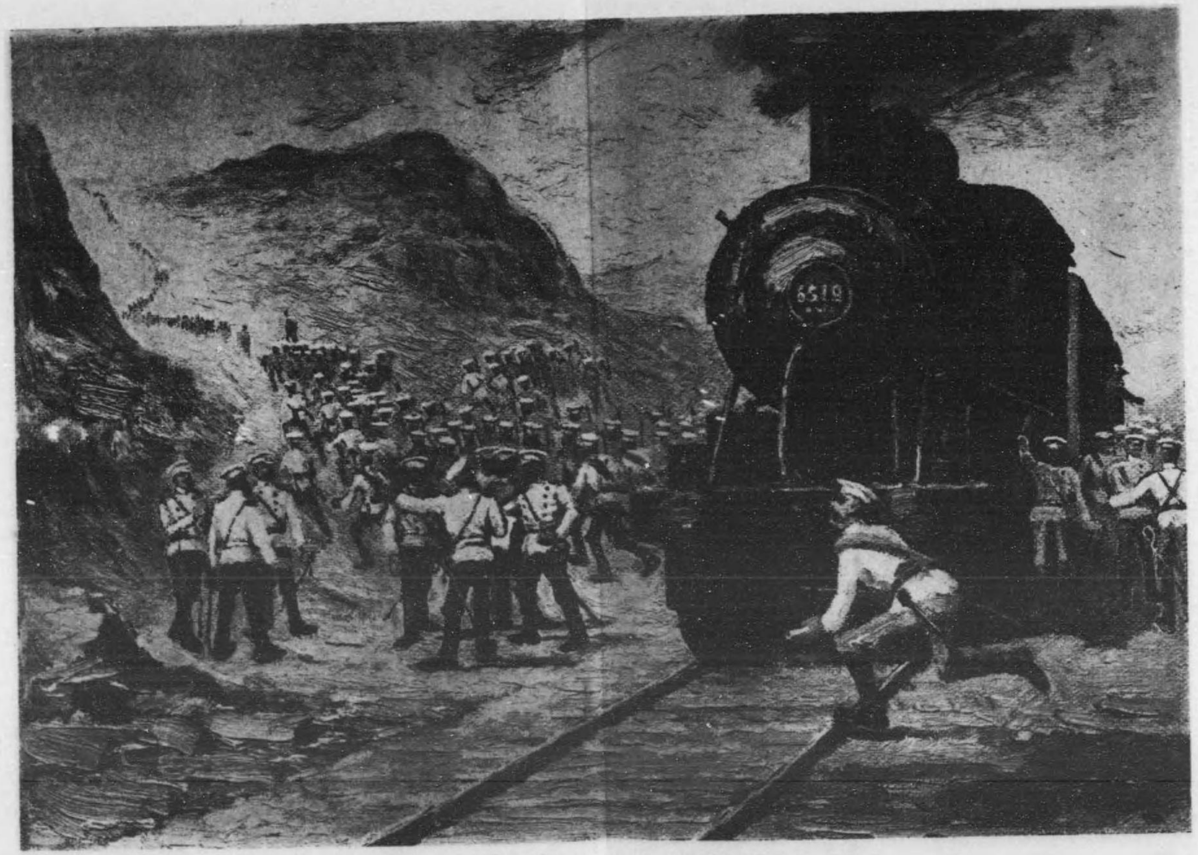
の混成旅團を編成した。其兵力は歩兵第十九旅團と、騎兵一中隊砲兵一大隊工兵一中隊であつて、これを歩兵第十九旅團長安東貞美少將（現中將）に指揮せしめて、軍命令の如く直接敵の右翼へ向はしめて、他の師團の主力は依然として昨日の命令の如く運動を開始するに至つた。それで第四師團長の此日に於ける處置に就いては、少しも間然する所がない上に、此混成旅團に分進を命じてから後は、何等の出來事もなかつたのであるから、師團主力方面に對しては此の小川師團長の、軍命令を受けたる場合に於ける、獨斷專行の、極めて穩當であつた而已か、時機に適當せる兵力を以て、安東支隊を急速に編成して軍主力へ加勢せしめた、其處置の機敏なりしを稱贊することに於て、其方面の研究を止めて置いて。今から此の一番の大手柄を收めたる安東旅團に就て聊か批評を試み樣と思ふ。

昨夜の師團命令の通り潘家屯に集合して、師團本隊に入らんとして居る歩兵第十九旅團は、此地に於て突然前の軍命令に關する師團の訓令を受領したので。そこで直ちに諸隊に合して輕裝をなさしめ、午前六時三十分先づ騎兵中隊を獨立して出發せしめ、歩兵第九聯隊の二大隊を前衛とし、前衛は更に其二中隊を第三大隊長鈴木少佐に屬して前兵たらしめ。午前七時前後に於て楊家店に向つて集合地を出發した。

此場合に於ける安東旅團長の處置は極めて適當であつた。これから急に轉進して軍の本戰に參加し樣といふのであるから、距離は遠くはないけれども餘程急ぐがぬと時機を逸する虞れがある。そこで諸隊を輕裝せしめたのは最も其機宜に適して居る。且つ此の當日の朝になつて變更せられた命令を接手して、僅々一時間足らずの間に混成旅團の行軍諸準備を整頓して、轉進を開始せしめたのは決して緩慢なる處置ではない。先づ普通以上に其處置が敏活であつたと評することが出來樣。斯く速かに出發して急行したのであるから、午前八時三十分前後に於て其騎兵は第五師團の左翼と連絡し、且つ前面の敵情を報告して來たので、午前十時前後に於て安東少將は馬家房身西南の高地に到著した。此所へ到著して實見する所に依ると、敵は全く我が混成旅團の前進には少しも氣がつかなんだものと見へて、何れも南方より猛烈を極めて攻進する第五師團の方へ面して、全く此の安東支隊の方へは、其側面を丸出しにして居るのであるから。安東少將は敵の備なきに乘じて、彼が側背を衝破してやらんと考へたので、僅に歩兵第三十八聯隊の第一大隊を豫備として、自分の手許

へ殘した而已で全旅團の五個大隊を、悉皆第一線に增加して疾風迅雷的の大攻擊を行なはしめ。砲兵第四聯隊第一大隊には、此の馬家房身附近に於て放列を布くべきを命令した。敵の不意に出でたる場合に於て、少しも他に顧慮することなく即時全旅團を展開して、急遽敵の備へなき側背に大攻擊を指向したのは、實に安東貞美少將の大出來である。此樣な場合に於ける處置として聊かも申分がない。これから先は急轉直下の勢を以て、常に敵の備へなき右側右背へと猛進したので、此方面に敵は新來の精鋭を盡して增加したが、それでも終に其頽勢を挽回するの機を握る能はずして、此の奇襲的に現出した安東支隊の爲めに、敵全軍は全く膽落ち氣沮みて退却の決心をせざるを得ざるに至つたのであつて、此日の安東少將の行動は、否歩兵第十九旅團全體の行動は、彼の南山戰鬪に於ける金州夜襲の大失敗を、此一戰に於て全く恢復しをほせたといふても支障あるまい。且つや自分は此所に於て偶然であるかは知れぬが、小川故大將閣下の軍隊の使用其宜しきを得たるを稱せずんばあらずである。人間は如何なる人と雖ども過失のないとは請合はれぬ。萬一にも其過失があつた場合にはそれに自から功を立てさせて、其前過前恥を自分の功で雪がせる

露軍車站外ニ下車シテ得利寺ノ急ニ赴ムク



九十九道人石原白道筆

樣にするのが、處分をするより譴責するよりそれが何より一番の上策である。小川師團長が先に南山で失敗した此の旅團に、此の奇功を奏し得べき敵の側背侵入の重大任務を與へて、彼れ旅團をして十分に前恥辱を洗雪し得られる樣にしむけたのは、流石は小川大將中々に人や軍隊の使用法が巧妙である。斯くすればやられたものも他の何事もないものよりは、一層も二層も奮勵するからして、如何なる困難なる任務も忽ちにして大効果を擧げ得ることになるものである。何事でも此の手加減は極く必要であるけれども、殊に戰爭に於ては一層此方法を妙用せぬと、惜しい人物や惜しい軍隊を、むざ〳〵惡名の下に葬むり了る樣なことになる。將に將たるものは此邊の所に大に機轉をきかせぬといふと、爲めに其軍隊の志氣をつまらぬ事で沮喪せしめて仕舞ふことになる。餘事ではあるが戰鬪に於て後功を以て前過を償なはしむるといふことが、最も注意して實行せられぬといふと、爲めに無益に傑らい人物を戰死せしめたり、又は軍隊を自暴自棄に陷らしめたりする恐れのあることを、氣付いた時に一寸述べて置く次第である。

其後此の安東支隊の此日午後に於ける戰鬪には、隨分苦戰もあつたけれども、何

をいふにも全く敵の意表に出でたので、彼れは必死に其軍團の退路を遮斷せられまいと、汽車でかけ付けた增援隊迄を全部此方面に使用して、全力を擧げて此旅團の急進を遮ぎつた而已で、進んでこれを逆襲するといふ樣な氣勢は全くなかつたのである。であるから安東旅團は思ふが儘に敵の側背を衝破して、終に此旅團に數倍する敵を無理無體に壓迫して、殆んど夾河心附近の敵の退路を斷ち切るばかりに攻め進んだ。で敵はこれが爲めに散々の體となつて北瓦房店に向つて、優勢なる兵力を有しながら終に退却せねばならぬ羽目になり、アレクセエフ總督の旅順救援の計畫は、此の安東旅團の爲めに全然失敗して仕舞たといふを憚からないのである。又此の午後の戰鬪に於て、東龍口附近に於ける砲兵第四聯隊の第一大隊の勇戰は、大に稱揚すべきものであるが。此大隊の全蔽遮陣地にあるに對して、巧みに彈著を修正せんとして、大龍口後南方高地から支那人となつて彈著觀測を行ふたる、敵の砲兵も實に勇敢極まるやり方ではないか。今後兩軍ともに常に其砲兵陣地を遮蔽するを勉むる傾向のある時代には、此樣な手段を用ひて其彈著を確かめる必要が多くなるであらう。であるから砲兵もこれからは決死敵陣に近接して、此樣な特別任務に服

する場合があるといふことを覺悟して、常に此樣なことをも注意して研究して置く必要があるであらうと自分は思ふ。斯く各師團に就て順次に研究して見ると、要するに此の戰鬪に於ては軍司令官の判斷が、殆んど少しも過らなんだものであるから、全く我第二軍の思ひ通りに、露の第一軍團を擊破し得たのであつて。奥元帥が既に昨夜の中に於て、敵騎兵が第四師團の前進を見落したことに氣が付いたのが、抑此戰に十二分の勝利を得せしめた原因である。これだけの大過失を敵が犯して居ることを知つた奥元帥は、左なきだに奇謀妙略に名ある名將であるから、愈、沈著し愈、籌略を運らして、其豫備隊の使用や其右側背侵入旅團の、敵に効果を及ぼすべき時刻をちやんと計算して、第三師團の右翼隊が非常な危急に瀕した爲めに、其求援が頻々として大島師團長から來たけれども、安東旅團が敵右翼へ出れば敵は大狼狽を來すと、先づ戰の結局に先見をつけて居たものであるから、其儘にして平氣で戰況の推移を見て居たが。遂に西龍口附近の高地上を、急歩東進する一部隊を認めると共に、我軍大勝せりと一笑して、更に他方面の爲めに心配をせなんだ。斯の如く自己の畫策に全幅の自信を懷いて、敵を我が思ふ通りに命令に服從せしめた奥元帥は、

事實に於て此戰勝に於ての最第一に數へらるべき大勳功者である。自分は此戰鬪に於ける奥司令官の處置に付ては、實に頗ぶる敬服歎服した次第であつて。此戰鬪はいふ迄もなく各師團長の努力の力も少なくないが、主として奥元帥の攻擊計畫が極めて適當であつたのが、大勝利を博した最大の原因であつて、十五日に於ける奥軍司令官の指揮は、實に軍司令官の模範といふべきであらうと考へる。これは餘り褒め過ぎたかも知れぬが、先づ我軍の方はこれで御免を蒙むつて置いて、更にこれから例の露軍に付て一般的の概評を試みることにし樣と思ふ。

前にも少し述べたと思ふが、此十五日に於ける露の西伯利第一軍團の作戰計畫は、一個師團を以て龍王廟東方高地から、最右翼の李家店西方高地までを占領せしめて、これを防守方面として極力我軍の前進を支持して。さて東狙兵第一師團とグラスゴ少將の率ゆる西伯利歩兵第三十五師團の第二旅團とを以て、我が右翼に向て攻擊に轉ずる豫定であつて。此のゲルングロス師團とグラスゴ旅團には協力して攻擊を實行すべく、軍團長の命令が十四日に於て下つたのであるが、如何なる理由があつたかは不明であるが、此兩將軍の間の攻擊に關する交渉が、頗ぶる非常に都合よくゆ

かなんだらしい。最も軍團長が其攻擊の時機もやり方も示さずして、唯漫然兩將官で協議の上で決定せよと命じたので。ゲルングロス少將はグラスゴ少將に向て、自己師團の左翼たる東部上瓦房窩堡附近まで思ひ切つて前進して居て明日の攻擊に參加してくれと、此軍團命令を受けると同時に交渉した筈であり。且つ此の兩將官の間には電話電信等の準備がなかつたので、態々多數の騎兵を使用して遞騎線を設けた程であるから、此の交渉が纏まらぬ筈はないのであるに係はらず、グラスゴ旅團は依然上崔家屯附近に位置して、十四日の夜に於て少しも前に出て居らなんだ。

これが抑の攻擊方面の手違初めであつて、翌十五日朝霧が少し晴れかゝると共に此旅團が自己の左翼へ、殆んど同線上に到著して居ることゝ信じ切つたるゲルングロス師團は、好機に投じて攻擊に移らんとして見たが。何となく同旅團の行動が不安心であつたので二度もこれが前進を催促したが、其隻影も見へねば何等の返答も來ぬといふ爲體であるから。少なからず焦心苦慮した東狙兵第一師團長は終ひに思切つて、機をして空しく經過せしめまいとして、其歩兵二個聯隊を以て攻擊に移らしめ、他の一個聯隊を以て陣地より射擊を以て、其前進を掩護せしめ砲兵も之に參

加して、西部上瓦房窩堡に向て攻撃を開始した。我此方面の兵力は歩兵約一聯隊砲兵一中隊である、三倍以上の兵力があるのであるから、ゲルングロス少將が今少し奮發して獨力攻進の意志を堅固にしてかゝつたならば、此方面の我軍は少なからず苦戰に陥たに相違ない。而已ならず其攻撃點と定めた西部上瓦房窩堡より少し西の、例の北大丁子山の西方は、殆んど全く空虛になつて居る始末であるから、我第三師團は一層の困難を感ずべきではあつたが。彼の尖々山附近の我砲兵から其攻進を猛射されて、東狙兵第三聯隊が不體裁にも眞つ先きに潰走を始めると共に、獨力攻撃の先刻の意氣は何處へやら消へて仕舞て、更に到底あてにならぬと一度見切りを付けたグラスゴ旅團の進出を待つことにして仕舞た。此樣な腑ぬけ根性で攻撃を開始したのであるから、終に見じめな有樣に陥つたのであつて、此時グラスゴ旅團はといふと、自己の受けたる任務の中で、東狙兵第一師團の攻撃を加勢するといふ方面よりも軍の左側を警戒するといふ方にばかり重きを置き、それが爲めに昨夜も思ひ切つて第一師團の左翼へ進出せず、上崔家房附近に於て此の軍の左側を警戒して、更に此の十五日にも此兩任務を併せて遂げ樣といふ考でもあつたらう、バウエル中

佐支隊をば馮明屯から第一師團の方へ向はせて、攻撃參加の先鋒とならしめ。更にベルフイリエフ中佐の支隊を陳家屯方面に進ましめて、軍の左側を安全ならしむる方策を運らした。一體此旅團の立場としては、明らかに昨夜に於て其任務が知れて居たので、元より左側の警戒も決して棄て置けぬがそれは此の旅團に屬した、騎兵の大部を少しく此方向に前進せしめて、それに一大隊も歩兵の後援を附けさへすれば、此方面の敵情は時機に遲れず旅團長の手へ到著するは當然である。斯くして置いて全力を擧げて馮明屯方面に前進しグルングロス師團長と連繫して同時に我が第三師團右翼隊を攻撃したならば、約五倍からの兵力を以て敵の兩翼から攻撃することになるのであるから、先づ充分に其功を奏するの見込はあつたのである。然るに同旅團長は性質極めて優柔不斷の人物であつたものと見へて、此の十五日の拂曉になつてから暢氣千萬にも軍議を開ひて、本務は左側警戒であるの否や攻撃參加であるのと愚にもつかぬ小田原評定に大切な時間を費やして居る中に、グルングロス少將から至念の催促に會ふたのでこゝに始めて決心を定めて、午前六時四十分に愈攻撃に決心して、前に出してあつた兩支隊へ兵を增加し、漸次前進を開始したけれど

も。何をいふにも第一師團に連絡するまでには一里以上も道程があるので、容易にそこまで進出し得なんだ中に、第一師團の攻擊は我砲兵の爲めに一頓挫を來して、頻りと同旅團の進出を今か〳〵と待ち兼ねて居ることも知らず。午前八時にバウエル中佐支隊を增加したるヘトロフ大佐から强敵に出會ふて、前進が困難であるといふ報告が、シタケルベルグ軍團長の退却豫想の訓令と殆んど同時にグラスゴ少將の手に到著したので、引込み思案のグラスゴ少將は、てつきりこれは戰況非にして退却に決心を變更したものと誤解して、攻擊やりかけの第一師團が鶴首企足して待ちに待ちつゝあるにも頓著なく、折角前進しかけた各支隊に上崖家房附近に退却を命じて仕舞た。何といふ大早計をやつたものであらう、これで全く露軍の運命は決して仕舞たのである。何といふ滑稽千萬なお茶番的な失態であらう。蓋しこれはグラスゴ將軍の無能より起れることはいふ迄もないが、併し此樣な手違ひや誤解の生じた抑の始は、シタケルベルグ將軍の命令が不明である上に、其下す時機が不適當であるのが原因であるといはねばならぬ。同將軍の十五日の攻擊の爲めにグラスゴ少將に下した命令には、東狙兵第一師團の左翼に連繫して敵を攻擊せよとあるばかり

で、何れの地から何れの地の敵を攻擊するのか、少しもそれが示してない。而して攻擊開始は一にこれを兩少將の協議決定に任せた。であるから命令系統を有せぬ師團を異にして居るグラスゴ旅團は、ゲルングロス少將の指揮に屬した次第でもなく、結局相併列して協力して敵を攻擊するといふ有樣であつた。然るにゲルングロス少將の方では殆んど半命令的に、其前進や攻擊參加を通報したので、頗ぶる此の兩將軍の間に意志の疏通を缺いたのではあるまいかと思はれる。それが十五日の攻擊動作に影響したか否かは不明であるが、當然此の第一師團に協力すべき同旅團が、早朝に各部隊長會議を開き、其中には軍の左側を警戒すれば我事了れりである、それ以上は此の命令の上では不明であるといふ樣な、議論が紛々として起つたのは。蓋し自分の考ではゲルングロス少將の態度に快からず思ふ所から、名を命令の不明に假りて、彼れ第一師團長の命令的の協議に應じるのを快よしとせなんだのではあるまいか。これ實に感情的の衝突を以て大切なる公事を忘れたのであつて、頗ぶる不都合千萬なる次第であるが、彼れ露軍には隨分例が多いことであるから、或はそれが其眞相ではあるまいか。但し何れにしても此命令に其最初に占領すべき位置、其

攻撃すべき目標及其攻撃開始の時刻を示して、更に何人の指揮を受くべきかを明白に示してあつたならば、假令其間に如何なる事情があつたにしても、此樣な不統一な攻撃をやるには至らなんだであらう。斯く種々なる行違ひよりして一方は奮進攻撃する場合に、一方はのこ〳〵退却するといふ樣な不都合が生じて來たのは。折もあらうに更に此の朝午前八時頃、必死督勵頻りと攻撃前進を始めつゝある最中に、思ひもよらぬ一の訓令が同旅團長に達したが本であつて。それは前にもいふた軍が萬一にも退却せねばならぬ場合の、退却の方法を豫告した訓令であつたが。これを手にしたグラスゴ少將は、自己の右縱隊へトロフ大佐が强敵に遮ぎられたといひ、自分が早く出ぬからであるとは知らず、第一師團の攻撃も少しく腰が折れたといふ時に、丁度折りあしく此退却の豫告を受けたので、全くこれを今から退却することになつたのだと解釋して、敵情も友軍の狀況も更に御考なく退却を始めたのである。此の旅團長の無能は實に驚ろくの外はないが、軍團長が此場合此の退却の豫告をしたのは、これも實に不思議な不當なやり方であつて、既に敵を自己以上の力なしと判斷して、勇ましく攻撃に決心して置きながら、昨夜以來更に變つた敵情を得たでもないのに、午前八時に此の最左翼迄屆く樣に、此の退却の豫定の訓令を下すといふのは、時機が極めて面白くないのみならず、頗ぶる此の將軍の攻撃の決心なるものが確實でないのを證するものであつて。此樣な不確實なる決心を基礎として攻撃を始めるから、獨力でやるといふて一時猛烈に攻進した第一師團も、忽ち上瓦房窩堡に立ちずくみとなり、これに加はらんとして進み出した此のグラスゴ旅團も、終に狼狽して退却するといふ不體裁を現出して仕舞たのである。要するにグラスゴ少將の優柔不斷も引込み思案も、實に不都合千萬であるけれども、軍團長の命令の下し方も極めて拙いのみか、其やり方が何れも戰術の原則を無視して居るのは事實であつて、此の兩大原因が此の攻勢移轉を最初から滅茶々々に打ち毀して仕舞たのである。我野外要務令第八の終りに、

『凡テ臆測ヲ爲シ將來ヲ希望シ又ハ其之ヲ命ジタル理由ヲ示シ或ハ種々未然ノ形勢ヲ擧テ一々之ニ應ズルノ處置ヲ定ムルガ如キハ宜シク之ヲ避クベシ』

又同第十一に、

『若シ退却ヲ爲ス場合ノ處置ヲ豫メ命ズルヲ要スル時ハ唯必要ナル直轄指揮官ニノ

ミ之ヲ傳ヘ而シテ他言ヲ戒ムベシ』

此の兩條を軍司令官シタケルベルグ中將の下した、退却豫定命令に比較して研究して見たならば、如何にも同將軍の命令の下し方が、戰術の原則にあてはまつて居らぬことが、極めて明瞭に知れるではないか。であるから折角の攻擊は此樣な命令の不明や不合理から、終に大失敗に終つたのである。更に此の旅團が第一師團長と軍團長の督促で、二度目に攻擊をして來たに至つては、喧嘩すぎての棒ちぎり、實に論外の大へまである。何といふ御丁寧なる味噌の付け方であらう。これは實に評するも餘りに馬鹿氣て居ると考へるのであるから、論外として最早此の方面のことはこれで論せぬことにし樣。

更に中央及右翼に付て一言したいと思ふ。一體此の中央より右方の指揮者たる東狙兵第九師團長ゴンドラトウヰチ少將は、十五日朝にはまだ此の陣地に到著せずして後方にあつたので。砲兵旅團長たりしムロゾフスキー少將が、昨夕シモノフ支隊から歸還したので、それに此の師團長代理をさせて居たが。十五日の戰鬪最中に本職の師團長が汽車で到著したに付き、それに一切の指揮を申繼いでムロゾフスキー

少將は專ら本職なる砲兵の指揮に當つたが。斯く戰鬪の危急なる場合に至つて其指揮官が交代したので、全般の戰況が頗ぶる不明である而已か。前指揮官とても、昨日我軍に追はれて南瓦房店から歸つて來たばかりで、これも實は陣地の配備は委細には知らなんだらしい。結局なま知りなムロゾフスキー少將から皆無知らないゴンドラトウヰチ少將に、指揮權を讓つたのであるから、其指揮を受ける東狙兵第九師團は御難である。況んやそれが戰鬪最中と來ては、到底滿足な戰鬪指揮の出來樣筈がないのである。此樣なことの行違からして龍王廟高地に在つた砲兵二個中隊は、其陣地が東狙步兵第四聯隊の陣地中にあつたので。これは當然第一師團長の指揮に屬すべきものと考へてムロゾフスキー少將は手をつけぬ。一方ゲルングロス第一師團長の方でも、これは防守方面に屬した區域であるので何の指圖もせぬ。步兵第四聯隊にも砲兵にも終始何等の命令をも與へる師團長がなかつたので。步兵一聯隊と砲兵二中隊は、其陣地の眞中央にありながら、何れの指揮官よりも命令を受けなんだ。で已むを得ずして東狙步兵第四聯隊長メルチヤンスキー大佐が、獨立して戰鬪を指揮して居つたといふ有樣。爲めに退却に當つて同大佐は捕虜となり、砲煩の大

部分は我軍の手に落ちたのである。其陣地の主要點たる此の龍王廟の大切な陣地でさへ此の始末であるから、他はこれによつて類推しても知るべきである。つまり戰鬪間際になつて指揮官を命じたり、又は戰鬪最中にこれを交代せしめたりした上に、頗ぶる互に其權限を侵して他の感情を害すまいとした爲めに、全く連繫もなにも取れぬ不思議な現象を見るに至つたのである。既に交通便利なる中央陣地に於てすら斯の如し。それからして比較して見れば、グラスゴ旅團と第一師團の連絡の斷絶した位のことは、これ實に當然であつて決して無理からぬ次第といはねばなるまい。

此樣な場合に其右翼の警戒として十二分の力を致すべき、サムソノフ騎兵の假令一時たりとも、所在不明といふ時があつたのも實に怪しからぬ不都合千萬であるが。其頃には最う歩兵第十九旅團の迂回が知れて來たので、サムソノフ少將からもゴンドラトウヰチ少將からも、續々として報告が軍團長の手に著したが。今朝早朝に用心よく退却豫定命令を下したシタケルベルグ中將は、まだ見落した我第四師團が出て來たものとは少しも思はず、更に今からサムソノフ騎兵に威力偵察を命ずるといふ手遲くれ。盜賊を見て繩をなふといふのは、まだ〳〵これよりは少しは手まはしのよい方といはねばなるまい。其中に第五師團と歩兵第十九旅團は協力して、破竹の勢を以て防守方面の右側後までも進入して來たが。此防守方面の諸隊がぢり〳〵退却を始めて來たので、軍團の總豫備隊を東龍口方面に急派增援せしめたが。斯くなつてもまだシタケルベルグ中將は、少しも新鋭の日本軍が右側へ加はつたことを信じない。午前十一時半頃に參謀大尉アフエルドフの報告によつて、今迄全く騎兵の見落したる日本軍の大兵力が、我右側後へ侵入して來たのを知り、同將軍の周章狼狽は實に極點にまで達したといふが、如何にもさうであつたらうと今日からでも推測が出來る。幸に此時シレイコ少將が增援隊を引率して鐵道で陣地後に到著したので、其力によつて何とか諸隊を拾收して退却する方法を講じ得たけれども、もし此の場合露軍の方にも少しも天祐がなかつたならば、此の戰鬪は全たく露軍の全滅に陷ゐつたに相違ないのである。

要するに此の戰鬪の露軍の失敗は、大原因が敵情判斷に大過失を犯したのが抑の根元で、それに加へてシタケルベルグ將軍が頗ぶる不明確なる命令を出したる爲め、攻擊方面の兩隊の行動一致せずして攻擊行き惱みつゝある中に、思ひもかけざる右

翼より大兵力の側背壓迫を蒙むり、其計畫は全然失敗に歸して仕舞たが、我第二軍の方に於てもこれを急追するといふ深い決心がなかつたのと、當日午後に至て增援の新鋭兵が續々汽車によりて到著したのと、更に丁度露軍の最も危急に瀕した時に急雨驟に至りて其退却に便利を與へて、我追擊の行動に少なからず障碍を與へたので、敵は辛ふじて其部隊を拾收して退却するを得たのである。露軍の行動に譯載する某氏の批評に曰く『得利寺に於ける露軍が兎にも角にも其大部分を撤退して、悉皆日本軍の捕虜にも殲滅する所にもならなんだのは、シタケルベルグ將軍の伎倆でもなければ、新來の增援隊の力でも何でもない。此時に於て沛然として降り出した急雨のお蔭である。この雨がなかつたならば思ふに一人も殘ることは出來なんだであらう』と、少しく皮肉に過ぎる評ではあるが。事實雨師風伯の憐憫によりて辛くも九死の地を脫し得たといふのが、露軍に對する至當の評論であるかも知れぬ。これで見ると露軍にも時々は天祐があつたので、天祐は我日本軍の專賣特許ではない樣である。

戰史評論

成仁武夫補
無名戰士評

第七回　楡樹林子の戰鬪

一體この楡樹林子附近の戰鬪は、樣子嶺の戰鬪と相應じてやつたもので相關連して居ることが多い、からして同時に研究すべき性質のものであるので、次回に於ては樣子嶺の戰鬪を研究する考へである。隨て此の楡樹林子戰鬪は井上第十二師團長が殆んど獨立して戰鬪したのであるけれども、此の戰鬪の根元起因となりたる所の第一軍司令官の情況判斷から評論してゆかぬと、全體に亘れる此時の作戰計畫が分明にならぬ而已か、研究上頗ぶる不明なることゝ不便なることが生じて來る恐れがある。で先づ第一番にこの黑木第一軍司令官の七月二十四日前後に於ける、敵情の

判斷から研究して見樣と思ふ。

戰史第二卷一二八頁にも詳記してある通り、橋頭の敵を擊破して以來第一軍は非常な廣正面を占めて散在せねばならぬことになつて、第十二師團は紅廟子、橋頭附近に宿營して何家堡子から大臺溝に亘る間を占めて居り。第二師團は連山關、滿塔附近に在つて、摩天嶺附近から下馬塘に至る間に廣がり。近衞師團は其南の石河塞顧家屯間に宿營して、右翼新開嶺より左翼何家嶺を經て羅家堡子に至る間に散在して居るので。三個師團をしか有せぬ此の第一軍の正面は、實に全く東西無慮十三里餘の延長を有して居る。で軍の主力と第十二師團との間隙約三里を除外して計算して見ても、其正面が十里に亘るのであるから、一師團が平均三里餘即ち約十三吉羅米突を持たねばならぬ、これでは人員の配當が一米突に僅か一人半位の割合にしかならぬ。とすれば攻防ともに到底充分な働きは出來ぬ、殊更に此山地で防禦をやるといふには到底如何に工夫して見ても、兵力が何處へも引つ張り足らぬのはいふ迄もあるまい。

然るに此場合に於ける、眼前咫尺に控へたる敵の有樣は如何にといふに、其兵力は我に優るとも決して劣ることなく、いくら少なくつもつて見ても約四個師團は居るらしい。而して其四個大隊の步兵聯隊からなりたつ方の戰列第十軍團が大安平方面に位置して、頻りと遼陽奉天から兵を增加し氣球までも取り寄せて大に活動を準備し。更に三個大隊の步兵聯隊から成立する東狙兵第六、第三の兩師團は、東部支隊としてケルレル中將之を指揮して依然樣子嶺附近を據守して居る。而して我黑木軍司令官は其總兵力を孤家子、大安平方面に約二師團半、樣子嶺に約二師團と判斷した。此の黑木將軍の敵情判斷は正鵠に命中し殆んど神の如くであるが、此樣な大敵が兩所に控へて居る上に、更に二十二日頃からは頻りと楡樹林子方面の敵が運動を始めて、盛んに前進の氣勢を示すのであるから、我第一軍司令官の心中の憂慮は中々容易なるものでない。今や過廣なる正面を短縮して一方につめんとすれば、敵は依然として樣子嶺、大安平の兩所に構へて居るのであるから、我の空虛にした方面には必ず彼が進んで來る、左すれば今後の計畫に非常な障害になるは目前である。左ればとて此儘に此の過大なる廣正面の陣地を占めて此の優勢なる敵に對抗して、我友軍の行動を起し得るまで持久して居つて之と相策應して戰かはふといふには、

到底此の廣大なる上に山地谷地の大斷絶地而已で、連絡交通頗ぶる不便不充分なる現在の陣地では、如何に考へても到底之を持ち堪へ得る見込がたゝぬ。然るに敵兵は遠慮會釋もなく漸次大安平の方へ兵力を加へて、活潑々地に大前進を起さんと企圖して居るのは顯著なる現況で、それが第十二師團の報告や敵中にある我決死の諜者の確報によりて、七月二十四日頃に於ては疑もなく敵は第十二師團に向て、楡樹林子方面から攻撃を決行せんとしつゝあるといふことが、殆んど明瞭に偵知し推定することが出來る樣にまで、狀況が極て切迫して來たのである。さあ此の場合に於ては如何なる處置をとつたらよいか、攻防ともに正面が過廣である隨て兵力が不足である、就中防禦するとして計畫しては如何に積つても之れを守りをゝせる見込が立たない。去ればとて攻撃せんとすれば少なくも敵は一師團半、即ち我が第一軍全兵力の五割方は彼が確かに優勢なのである。此場合何としたらば合理なる處置であるか、恐らく凡愚輩な軍司令官であつたならば退却と決心するのであらう、先づ此場合それが何より萬全なる策の如くに見へるのであり、且つ狀況が餘儀なくしたので實に已むを得ぬのである。

然るに沈默寡言勇敢にして剛毅なる黒木軍司令官、多機多略遠謀にして深慮ある藤井參謀長は、頗ぶる驚嘆すべき勇敢極まる決心を取つた、即ちそれは戰史第二卷一二九頁にも明記してある通り、

「敵は大安平方面に二師團半樣子嶺附近に二師團を有するが如し、而して楡樹林子方面にては敵の攻勢に轉ずる模樣顯然たるものあり、然るに此の優勢なる敵に對する爲めには、我軍の正面過廣にして且つ土地險岨斷絶す、故に各師團の連繫頗ぶる確實を缺くは勢ひまぬがれざる所なり」

然らは何とするが至當であるか、退ぞいて後方の嶮要を占め以て敵の攻撃に對するの外はあるまい。とは殆んど萬人が萬人迄其通りに決心するであらうと思ふのは、實に評者一人而已の偏見ではあるまいと考へる。然るに勇敢無双なる黒木將軍はさる平凡な月なみはやられぬ、此の樣な大難境に處しながら、沈思熟慮を盡したる後ち斷然攻撃を決行するの決心をなしたのである。

これ殆んど無謀である暴虎馮河である、將軍は餘りに心配をし過ぎされて精神に異狀を呈し、此樣な無茶苦茶をやられるに相違ない、左もなくば退却すべきである

引き込むべきである。防禦が出來ぬからそれで攻擊を決行するといふ理法は如何に考へてもない筈である、これは實に法外である無法であると誰しも非難するであらふが、黑木將軍は決して其樣に悲觀はせぬ。

『以上の如き狀況にある爲め到底防禦の望なし、然るに進んで藍河一帶の谷地を我有に歸せしめば、我軍各師團の連絡交通及び行動給養ともに便利なるべきは明かなれば、敵の攻勢準備未だ全く整はざる前に於て、機先を制して攻勢を取ること最も得策なり』

と堅確に決心を定められた。これ實に凡人に出來ぬことである神算鬼籌である大英斷大果決である、實に誠に感服歎服敬服推服の外はない、嗚呼此の黑木將軍なればこそこの大窮地でこの大勇決が出來たのである。抑殆んど我に一倍半する敵に向つて到底防禦が出來ぬから、寧ろ進んで攻擊を決行するといふのは。一見頗ぶる無謀であつて戰術の原則を無視した樣に見へるけれども、決して〳〵其樣な次第のものではない。此の剛健なる意氣此の健氣なる覺悟ありたればこそ、此の第一軍はもとより我日露戰役に加はつた諸軍は、常に優勢なる敵と相戰ふて殆んど一度も敗をとらなんだのである、此の勇猛なる果斷と此の無双の攻擊精神があつたればこそ、全勝で約二年間の戰役をし通し得たのである、而して步兵操典第二部第二十五には何とかいてあるかといふと、

『凡ソ攻擊ハ勝利ヲ得ベキ唯一ノ手段ナリ故ニ指揮官ハ狀況已ムヲ得ザルトキノ外常ニ攻擊ヲ決行スベシ攻擊ノ要ハ剛健ナル意思ヲ以テ專心敵ニ向ヒ勇進スルニ在リ』

これ實に戰鬪全體に關する大原則である、即ち敵は優勢にして我正面は頗ぶる廣大である、けれども此時は既に危險が切迫して仕舞て動きのとれぬといふ程度の場合ではない、此の時の狀況は實に心配ではあるけれども、よく〳〵考へて見ると

『狀況已ムヲ得ザルトキノ外』である。で此の大危險の場合に於ても沈著して右思左慮篤と熟考して見ると、彼れ露軍は今や大擧攻勢に轉せんとして頻りに兵を大安平に集めつゝある。一方樣子嶺の方からは少しも前進の模樣がない、して見れば今が彼れ露軍の樂屋の非常に大多忙な時機である。此の混雜に乘じて猛然起つて彼に一擊を加ふれば、藍河一帶の線に進出する我目的は必ず達成せられると前見をつけ

て、斷乎たる判決を下された黒木將軍は實に大豪傑である、即ち『剛健ナル意思』の持主である、何といふ立派な頼もしい覺悟であらう。

即ち此の歩兵操典第二部第二十五の原則の示す通り、隨分と已むを得ざるの時に近い場合ではあつたが、まだ〳〵其間に敵の攻擊準備の整頓せざる隙に乘ずるといふ好機會が一つ殘つて居たのであるから、所謂剛健なる意思を極端に發揮して『以テ專心敵ニ向ヒ勇進スルニ在リ』といふ本文の如く、無双の勇を鼓して攻勢を取り藍河の線まで勇進するに決したので、これ決して無鐵砲でもなければ亂暴でも何でもない、極めて正當なる合理的なる戰術の原則に準據して決心を定めたのである。

元より戰爭は殆んど一六勝負と同樣であつて、石橋兩杖といふ式では到底連戰連勝は覺束ない、幾分たりとも見込が立ち活路が見付かつたならば、何ものをも排除しても之に向て勇進するといふ、所謂不斷の邁進と不撓の攻擊精神を以て、其敵に對する決心を堅める基礎とせねば、到底常勝軍の月桂冠を得ることは出來ぬのである。

軍司令官黒木大將の前述の如き健氣なる勇ましい決心が根元となつて、楡樹林子も樣子嶺も共に大に苦戰はしたが、我の約二分の一だけ優勢である露軍を、果して

思ひの儘に擊退し得て、最初軍司令官の希望の通りに藍河の線まで進出するの目的を達し得た。これ蓋し全く黒木大將の何人と雖ども危ぶみ恐れて躊躇する場合に於て、斷々乎として攻勢を取つた此の一決心の賜ものである、古來軍學界に常套語になつて居る、運用の妙は一心に存すといふ金言は、即ち此樣なことをさしたものであつて、大敵たりとも恐れず小敵たりとも侮らずして、其時機に適當なる處置を遺憾なく執行し得た所の、黒木爲楨將軍は實に空前絶後の豪傑である、くどい樣ではあるが全くに大勇者である大傑物である。

然るに敵情を考へて見ると戰機は益〻迫して來る中々以て油斷はして居れぬ、そこで七月三十日午前一時に於て愈〻近衞第二の兩師團へ、攻擊計畫の大要を通報して其準備にとりかゝらせて、さて同日午後四時に本ものゝ攻擊命令を下したのであるが、其命令も全く適當であつて自分は少しも申分のないものと思ふ、現に戰史第二卷一三〇頁にもある如く

一、近衞師團をして敵の右翼たる馬勾門子と下韓家堡子方面から軍主力の本攻を決行せしめ

二、第二師團の一旅團餘を以て庶溝の方から樣子嶺北方高地に向ひ攻擊せしめ、これを助攻として近衞師團の攻擊に協力せしめる

三、第十二師團と近衞後備旅團とは、彼が今にも攻擊して來樣として居る楡樹林子附近の敵を反對に攻擊して、その攻勢を取らんとする機先を制する

四、此第十二師團の方面は頗ぶる敵の兵力が優勢であるから、歩兵第十五旅團をして其攻擊に參加せしめる

斯くして軍主力の攻擊を樣子嶺に向け、此の方面から烈しく敵を壓迫して、敵が楡樹林子の方から攻勢に轉ずることの出來ない樣に牽制して、第十二師團の攻擊を容易ならしめ、相併列して藍河右岸の線まで進出し樣といふ、此の黑木將軍の攻擊計畫は、其敵情判斷と其攻擊の決心が、如何にも立派で如何にも勇ましくあつたに伴ふて、如何にも正當に如何にも巧妙に發る方なく處置されてあるから、一點自分は之を非難すべき所がないと考へる。

これで此戰鬪の軍全體の評論は濟んだ、でこれからは第十二師團と近衞後備旅團及び、岡崎少將の率ゐたる歩兵第十五旅團とが、協力して決行したる楡樹林子戰鬪に就て研究することにし樣と思ふ、これには隨分と澤山な敎訓がある筈である。

軍のことに付て今一言いふて置きたいのは、黑木將軍の此の決心は如何にも勇ましく如何にも果斷ではあるか、餘りに冒險過ぎはせぬか餘りに投機的なやり方ではないか、殆んど戰術の原則や典令範の規定を無視して、敵が優勢で自己の正面が過廣で、其陣地が山谷で到底防禦の望みがないと確知して居りながら、よしや多少機の乘ずべきがあつたとしても、向ふ見ずに決然攻擊を實行するといふのは、如何にも餘りに冒險に過ぎはせぬかと突飛なるやり方ではないかと難ずるものがないともいへぬ、野外要務令綱領に曰く

「人或ハ自ラ任ゼス往々罪ヲ形式ニ諉ス然レドモ形式ハ運用ヲ待ツモノニシテ運用ハ人ニ存ス人々宜シク身ヲ以テ責ニ任ジ機宜ニ應ジ之ヲ活用スベキノミ固ヨリ濫リニ典則ニ乖ク可ラズ亦拘泥シテ實行ヲ誤ル可ラズ」

此の評者が圖點を施こしたる末文を熟讀玩味して御覽なさい、戰爭といふものは諸君の考へる樣な窮屈千萬なものではない、剛健なる意思さ、撓まねば、寡兵を以て衆敵を破り得られる、防禦が不可能である場合に於て、攻擊で敵を粉碎すること

も難くはない。要するに戰の勝敗は兵の多寡にのみよるのではない、全く其攻擊精神の緊張と弛緩とに起因するのが大部分であるのだ。

軍司令官に關することは先づ此位にして置いて、此の軍司令官の命令によりて楡樹林子附近の敵を攻擊する爲めに、第十二師團長故井上光大將閣下の下されたる、七月三十日午後十時の命令に就いて研究して見ることにし樣。

敵は數日來北は北臺溝より南は扁嶺に至る間を占領して、相當堅固なる防禦工事を施こして居る樣である、然るにこれを我軍の方から攻擊せんとするに當つては、中央部たる通天溝から王家堡子に至るの間は、通路もなければ山岳重疊して居る上に、敵の陣地は極めて急峻なる殆んど壁立の山上に構へてあるのであるから、先づ到底攻擊の目的に利益を與ふべき筈がない。左すれば此陣地を攻擊する爲めには、左右何れかの一翼からでなくては不可能である、そこで此の兩翼の何れを以て攻擊點とするか、則ち詳くいへば此の第十二師團の攻擊の爲の主力を向くる點は何れとするかといへば。此場合自分の考を以てすれば、楡樹林子の方は適當でない、必ず扁嶺方向に主攻擊を向くべきものであらふと思ふのである。故如何となれば楡樹林子の方には橋頭から遼陽に至る本街道が通じて居るから、多少交通は便利であらふけれども、其前進に當つては細河に沿ふで前進する爲めに、長い間を敵の縱斜の射擊を冒して行かねばならぬ而已か、先づ第一に福家堡子西方高地を攻め、更に代家堡子の高地を奪ひて、三度目に細河を渡りつゝ標高一六九の斷崖ある敵陣地を奪ひ、まだ其上に老官嶺をも攻擊せねばならぬ。要するに此方面から攻擊するとすれば、敵には堅固なる四重の防禦線の堅い〳〵陣地があるのである。此樣に困難をして攻擊するといふ不利と比較して見ると、少しく通行路のよい位の爲めに、此方面に主攻擊を向けることは出來ぬ筈であると自分は思ふ。

然るにこれに反して扁嶺の方から攻擊するとすれば、大臺溝から扁嶺に向つては片點線の道路が三條あるのであるから、無論道路の嶮惡なるべきは知れて居ることであるが、さして不便であるとはいへぬ而已か、一朝此の扁嶺を奪取して此隘路の北方の標高六五〇の高地脈と、隘路南方の高地脈とを占めて、西北に向て前進したならば何とする。敵は忽ちにして其退路に迫らるゝの危險を感ずるので、楡樹林子、花紅溝間の嶮峻なる山上の敵兵の退却を餘儀なくせしむるは勿論、細河以北附近ま

で進出して居る敵兵も、急速に退却をする樣にせねば、退路を太子河の方に變換するより外は詮方あるまい。それ而已ならず我第十二師團の爲めには、此の扁嶺の方面へ第二師團から約一旅團の岡崎支隊が加勢に來る筈である。果して然らば此陣地の攻擊は、是非とも此の扁嶺方面より敵の右側背後へ深く侵入する樣に計畫するが利益である、否さうせねば到底此陣地を略同等なる兵力を以て、奪略するといふことは容易ならざる困難である。

然るに今此の戰史第二卷一三〇頁の井上第十二師團長の命令を見ると、全然これと反對して居る樣に見へる、即ち同師團長の考へでは、太子河方面に對する――北方面――警戒部隊は其儘にして置き、木越旅團を楡樹林子方面に進めて、花紅溝及福家堡子西方高地を占めて、此の方面の攻擊を準備せしめ。さて本隊として近衞後備兵一旅團を橋頭附近に置き、扁嶺の方には佐々木旅團に砲兵一中隊を附して、殆んど獨立的に攻擊を行なはしめる樣に計畫してある。これ實に自分の考へとは反對であつて自分は極めて不適當であると思ふ。勿論扁嶺の方面は道路が惡るいのであるから、野砲であれば到底通過が困難であらふから、その一事だけでもこれへ

攻擊を向けることを控かへねばなるまいか、此の師團の砲は悉皆山砲であるからには、今少し此方面に砲兵の力を加へて、左右兩翼共に殆んど同時に攻擊を開始せしめて、師團長は其進捗の景況を欒家堡子附近に於て見て居つて、狀況最も有利に進捗せりと考へる方へ本隊を提さげて增加を企だて、以て敵を一擊の下に粉碎するも一策であらふ、左もなくば前に自分がいふた樣に、楡樹林子方面には弱勢なる一旅團に砲一二中隊を屬して、これには持久的攻擊を行なはしめて。一方拂曉前に扁嶺を占領する如く他の師團の全力を擧げて此方面に攻進して、更に南方より來援する步兵第十五旅團と協力して、梨皮峪より佟家堡子の方へ侵入する氣勢を示したならば、如何に大膽不敵なる敵兵でも到底此陣地を持ち堪たへることは出來まい。よしや此樣な果斷は敵情不確なる爲めに出來なんだとしたならば、今方一寸自分がいふた通りに、殆んど同數なる兵力を以て左右兩方から攻擊を始めさせて、本隊は其中央後なる橋頭に置いて置き、愈此方面が有利に攻擊を進めることが出來ると見た方へ、後備一旅團を提さげて師團長自から急進して、敵を一擊に擊破するといふ風にしたのがよいであらふ。然るに井上師團長は全く扁嶺の方を助攻的にして、楡樹林

子の方から本攻撃を決行する如く命令した、これ實に如何に考へても師團の爲めに有利でないと思ふ。果せる哉木越旅團の方は殆んど師團の主力全部を用ひたにかゝはらず、終に攻撃の目的を達し得ざりし而已か、扁嶺の方では大々的大勝利を早朝に於て得たけれども、命令系統を異にせる兩旅團を統轄すべき大頭が此處に居らなんだので、終に此方面もぐつと敵の側背へ突進するといふ運びに參らずして、此日の戰鬪を夜に入つた爲めに一先づ中止して明朝を待つことになつた。これにはいろ〳〵種々樣々なる入りこんだ行違ひや過失もあるけれども、要するに井上師團長の攻撃計畫が其當を得なんだのが、第一番に此攻撃不進捗の大なる原因をなして居ると自分は考へるのである。若しも師團長が木越旅團に向つて、福家堡子西方高地を占領して、楡樹林子の攻撃を準備せよといふ樣なことを命せずして、單に此方面から攻撃すべしといふ樣に命じて置いたならば、彼の歩兵第四十六聯隊が枕山に於て敵前哨を不意に急襲して、代家堡子に宿營したる露軍歩兵第百二十二聯隊を殆んど潰走に陷らしめた時、必ず其敗退する敵の背後に跟隨して、思ふに代家堡子北方高地は此の聯隊の手に握ることは容易であつたらふ。若しも此の拂曉に於て此高地ま

で我軍の手に入つたとしたならば、此方面でも敵の斜射や縱射の爲に非常な損害を被むる樣な苦戰に陷ることなくして、福家堡子西方高地と代家堡子北方高地から、却て反對に敵に十字火を食はせることも容易であつたのである。であるから此三十日午後十時の井上師團長の命令は自分は頗ぶる同意することが出來ぬと考へるのである。歩兵操典第二部第二十六にも明記してある通り、特別なる場合を除くの外は

『攻撃點ハ狀況特ニ地形ヲ判斷シ陣地ノ弱點若ハ敵ノ最モ危險ナル方向ニ選ブベシ』

とある通り是非とも此地形では、敵の右翼に選定するが至當である、蓋し楡樹林子方面は敵に危險を感せしむるには、一番に都合がわるいのみならず、これに近接するにも極めて不利であつて、まだ其上に太子河方面の敵から其右側を脅される虞れがある。唯此方で少しく我軍に便利であると想ふのは、本街道があるといふ一點である、他は悉く攻撃の爲めには不利益なのである。かくしてこれに向つて井上將軍が攻撃師團の主力を向はしめんとせられたのは、自分は如何にしても之に同意することは出來ぬのである。餘りに長くなるから師團命令に就てはこれで研究を終りとして、さてこれからは愈第十二師團の右翼隊たる、木越旅團の攻撃動作に就て一

つ評論を試みることにし樣。

七月三十一日午前零時に師團命令を受けたる木越將軍が、歩兵第四十六聯隊をして福家堡子西方高地を占領せしめ、歩兵第二十四聯隊の二個大隊をして花紅溝西方高地を占領せしめて、自から歩兵第二十四聯隊の一大隊及騎兵砲兵を握つて何家堡子に位置したのは適當な處置である。但し此場合前面はもとより其左方には餘りに騎兵を使ふべき必要がないのであるから、騎兵第十二聯隊の殘部を擧げてこれを右側太子河方面の警戒に任ずるが適當であつたに關せず、其一部而已を斧金溝方向に派遣したばかりで、大部分を手中に握つて居たのはこれは少しく其意を得ぬ。爲めに此日の午後には北方危險といふ情報に接して――誤まれる――大切な師團の豫備たる近衞後備旅團の增援したる大部分を、無益に此方面に向けるといふ樣な不利なる處置をせねばならぬことになつた。でつまり此の早朝に於て騎兵第十二聯隊の大部分を北方面に使用せなんだのは、確かにこれは木越將軍の手ぬかりであるといふを憚からぬ。

此木越將軍の下した命令で歩兵第二十四聯隊の二大隊は何事もなく所命の地點を

枕山西麓ニ委棄セル露軍ノ幕營及馬匹

九十九道人石原白道畫

占領し、歩兵第四十六聯隊は二個大隊を第一線とし、殘餘の二個中隊を第二線として、福家堡子西方鞍部を目標として攻撃前進を起し、其第一線の右翼にありし歩兵第四十六聯隊の第一大隊は、勇敢にも敵前哨の不意に乘じて一發も射撃せず、急峻なる斜面を著劍して突撃的に攀登し、劉家堡子北方高地を占領して敵の前哨たりしタムボフ歩兵第百二十二聯隊の第三大隊を散々に撃破したる而已か、更に其警戒部隊の本隊たる第百二十二聯隊の幕營を未だ夜の全く明けぬ薄暗い谷地中に發見して、寢耳に水と同樣に猛烈なる大瞰射を浴せかけたので、歩兵約三個大隊と乘馬獵兵二隊とは殆んど警急集合をするの遑もなく、周章狼狽頗ぶる的の大混亂の儘西南方に大潰走をして仕舞て、其中の勇敢なる一部分が此の福家堡子西方の枕山高地の半腹と、西部代家堡子北方の高地とに辛ふじて踏み止まり、武器をも持たざる其大潰走の爲めに馬匹二百と天幕二大隊餘分を委棄したる、大敗北の跡始末を爲さんとして必死我軍の前進を喰ひ止めて居た。

此の楡樹林子戰鬪の皮切りとも稱すべき、歩兵第四十六聯隊第一大隊の拂曉戰は實に目醒しきものであつて、爲めに敵全體がこの早朝に付け始めた大けちに依つて

何程其志氣を沮喪せしめたか知れぬ。一個大隊足らずの兵員を以て敵の四個大隊と獵兵二隊を散々に打ち散らしたのであるから、實際上の手柄も頗ぶる偉大なるものであるが、實際以外彼れ露の戰列歩兵第十軍團全體の精神上に及ぼしたる無形の威力は、其有形上の大偉勳より幾十倍したものであつたに相違ない。で此の楡樹林子方面が此日苦戰はしたけれども、我軍の攻擊逡巡して容易に進捗せざるに當つて、必然來るべき敵の逆襲を被むるに至らなんだのは結局この、歩兵第四十六聯隊第一大隊の早朝の大奇勝の爲めに、敵が氣を奪はれて仕舞たのであるといふてもよいと思ふ。此の大隊長は何人であつたか諸書に就て調べて見たけれども發見し得ぬが、其勇敢にして沈著且つ機宜に適したる敏活なる處置は、實に申分のない果敢なる致され方であつて、双手を擧げ萬歳を唱へて之れを稱賛するに自分は躊躇せぬものである。

然るにこれに反して福家堡子西方高地――當時稱して枕山といふ――に向つたる、同聯隊の第二大隊は決して過失を犯したのではないけれども、其動作が如何にも勇敢機敏を缺いた爲めに、第一大隊が此の樣な大奇功を奏した場合に於て、これと相呼應して歩兵操典第二部第十一の

『特ニ各級指揮官ハ一局部ニ於テ收メ得タル戰勝ヲ全般ニ普及セシムルノ勇氣ナカルベカラズ』

といふ極て大切なる條文を閑却して、此の第一線の右翼大隊が非常な大勝を博した場合に、思ひ切つて枕山々上に向つて突擊するの勇氣がなく、ほんの敗殘の少しばかりの敵兵が枕山の上にかぢり附いて居る爲めに一二時間も第一大隊に遲れて、始めて枕山一帶を占領し得たのは、決して失策としてこれを責める次第ではないが、極めて臨機の活眼を有せざりし拙ない仕方であつたといふ評を受けても、一言もこれに對して苦情を申込むことは出來まいと思ふ。

更に自分は此の方面の此の拂曉の戰鬪に付き、大に論ずべきことがあるのであるから、少し想像に過ぎた樣にまたたち入つた議論の樣に思ふ人もあらふが、一つ御免を蒙むつてこれから少しく論じて見樣。若しも昨夜井上師團長が此の木越旅團に向つて命令を下す時に、花紅溝西方と福家堡子西方兩高地を占めて、楡樹林子攻擊の準備をなすべしといふ樣なことをいはずして、單に此の方面から敵の左翼を攻擊

すべしと而已命じて置いたならば如何にあつたらふか。木越將軍は現に今も御存生中であるから、或は自分はそんなことはせぬといはれるか知れぬけれども、自分は多分左の如くに處置せられたであらふと思ふ。地形上より見ても花紅溝西方高地からは、容易に敵の彼の峻嶮を極めたる陣地を攻撃することは出來ぬ。左すればこれは此の方面の押へとして、若干の兵を備へればそれで充分なのであつて、敵も容易に此方面には突出して來る譯にはゆかぬ。で多分此方面には歩兵第二十四聯隊の一大隊を派遣して、正面即ち福家堡子西方の枕山を攻撃する爲めには、此日此朝の實際と同じく歩兵第四十六聯隊を使用して、他の歩兵第二十四聯隊の二大隊を豫備として手中に握つて居たに相違あるまい。此樣に木越旅團長が處置した時に於て、天未だ全く明けざるに劉家堡子北方高地を奪略し得て、敵の前哨たりしタムボフ第百二十二聯隊が潰走に陥つたとしたらば何とする。思ふに木越將軍は其手中の二大隊を提さげて宙を飛んで何家堡子から該地へ駈け付け、敵の敗殘兵の一二中隊の抵抗を遮二無二驅逐して、少なくも枕山から西部代家堡子北方の高地脈を、左したる大困難をせずして占領し得たであらふ、事實これ位のことは眞實の朝飯前であつたに相違ないと思ふ。果して然らば敵は全く此の早朝の一戰の爲めに、細河右岸に居ることを斷念して、皆悉く河の向岸へ引き揚げたであらふ。我右の方にグレゴフ少將の左翼支隊が居たけれども、これとても歩兵一大隊に騎兵七中隊といふ小部隊で、しかもそれが北臺溝附近の山谷間に居るのであるから、何の働をすることが出來樣自然退却するの外には策あるまい。若しも戰況が斯く進捗したとしたならば、我が木越旅團は枕山から西部代家堡子北方高地上に展開して、敵と相對することになるのであるから、山砲陣地の如きも思ふに都合よく選定することが出來て、敵と少しも劣ることなく對等の地形を占めて相對峙することが出來たであらふ。果して然りとすれば此日の午後の戰の樣に、師團の豫備を殆んどこれに增加して奮鬪したに關せず、我全線が敵の標高一六九崖上高地附近の歩砲兵から、猛烈なる斜射縱射を被むつて大困難をする樣な羽目には陥らずして。其反對に敵に向て其本道附近に居るものには充分に我十字火を以て御見舞することが出來たであらふ、斯く想像して考へて見るといふと頗ぶる殘念至極であるといふ感じがないとはいへぬ。つまり上述の樣な考は歩兵第四十六聯隊長にも又木越將軍にも其當時起つたに相違ないが、此

の枕山一帶の地を占領して攻擊を準備せよとの命令である、それを背いて無暗に前進しては師團長の意圖に反するといふ所から、終に此の高地を占領したる大愉快の大奇勝に心がゆるんで、獨斷にて將來の攻擊前進の爲めに、更に急速に敵を追ふて其前方の代家堡子北方高地まで奪略するといふ、それだけの果敢なる獨斷專行が出來得なんだのであらふ。これ位の仕事は此の朝の奇勝に乘じたならば確かに立派に出來たのである。斯くなつた時には敵は殆んど同時に兩翼に於て大敗戰をやつたのであるから、此の夜を待たずして彼は寒波嶺に退ぞくに至つたかも知れぬ、これに就けても昨夜の第十二師團長の命令には、實に愈以て自分には同意することが出來ぬのである。

此の場合砲兵第十二聯隊の一部が、歩兵第四十六聯隊の第二大隊がまご〳〵して居て、まだ枕山を占領して居らぬのを知らずして全く占領して仕舞たと速了して福家堡子附近まで前進して少からざる困難を來し、終に劉家堡子東南まで退ぞいて陣地を占めたのは、餘りに暴進に過ぎた樣ではあるが。それは前にもいふた通り此の歩兵の第二大隊長が早く枕山を占領せなんだのが原因であつて、決して砲兵を責めることは出來ぬ而已か、歩兵に隨伴せんとする砲兵は常に此れ位の意氣を以て、多少の危險や困難は冒して前進してくれねばいけぬ。で此の場合のは少しく暴進に近いけれども自分はこれを非難せぬのである、もしも前の歩兵が一致協力して早く枕山を占めたならば、更に其前の代家堡子を占領する爲めには、此の砲兵が如何に多大の加勢になつたか知れぬ。師團長以下全體に此の砲兵隊長や例の歩の第四十六聯隊の第一大隊長の樣な意氣が、十二分に其心中に横溢して居てくれたならば、確かに此の砲兵も一かどの大勳功を立て得たに相違ない。からして自分は此の砲兵の前進し過ぎた爲めの困難は、決して砲兵が過ぎたのではない、つまり周圍のやり方の方が寧ろ幾分不足であつたといふのが至當であると思ふのである。

これから後は此の楡樹林子方面は、漸次敵兵が增加して續々として細河を渡り我前面に迫つて來るので、流石の木越將軍も頻りに增援を請求したが。それは不確實なる騎兵の報告の爲めに、大部分北方太子河方面に向けさせて、無益に警備せしめるといふ次第であつたので、非常な炎熱の中に於て終日奮鬪したといふだけで、殆んど全く少しも攻擊を進捗さすことは出來ぬ樣になつて仕舞たのである。蓋しこれ

師團長が此方面から主攻撃を行なはんとした、其攻撃の計畫が不適當であつたから、終に此の樣な有樣になつたものと自分は思ふのである。

細部に渉つて評論すれば、まだ〳〵此の木越旅團の方にも澤山に研究すべき餘地はあるが、大眼目は既に前に述べた位のものであるから先づ此方面は一先づこれで切りあげて置き、更にこれから扁嶺方面に向ふたる佐々木直將軍の旅團に就て、研究の歩を進めるといふことにし樣と思ふ。

昨夜命令受領と共に逸早くも歩兵第十四聯隊の志波大隊を即時出發せしめて東扁嶺を占領せしめたのは、實以て機宜に適したる處置である。これありしが爲めに此の日の攻撃は實に幾らの便利を得たか知れぬ。此の旅團長の處置も極々適當であれば、また其派遣されたる志波大隊が暗夜急行同地を占領して、速に旅團の明日の攻撃展開の爲めに都合のよい樣に位置を占めたのも、これは何れも機敏なる處置であつて、實に天晴なる御注意であると稱賛するを憚からぬ。

敵は此時に於て楡樹林子方面を防禦地區とし、此の扁嶺の方から橋頭に向つて突進せんとして、これを攻撃地區としてマルトソン少將の歩兵八大隊餘に騎兵、砲兵の若干を加へ、早朝此方面から攻撃するといふ計畫であつたが。佐々木少將が油斷なき昨夜からの準備は著々として實効を奏して、常に彼れマルトソン少將の右縱隊をして後手〳〵と廻る樣にしたものであるから、流石に勇敢を極めて攻撃前進をせんとしつゝ猛進して來た敵兵も、我が五大隊餘の第十二旅團の爲めに散々に撃破せられて、總退却といふ大失敗に陷いり、扁嶺西方の長隘路の中へ全八大隊が一縱隊となつて、大河の流るゝが如く流れ込んだ所を、東方からは佐々木旅團が猛烈無双に射撃を以てこれを追撃し。丁度此時第二師團から加勢に來た、岡崎旅團も合頭溝東方高地に進出して、亂離骨敗となるまでに此の敵の攻撃部隊を、全然潰走に陷いらしめたのは實に大なる手柄である、これまでの間の佐々木旅團の戰鬪にも、隨分其細部には評論すべきこともあるけれども、一言以てこれを蔽ふて見た時には旅團長の處置の最も至當であるは勿論、其他其配下たる各隊長より兵卒に至るまで、勇敢に戰鬪して一致協力して一意敵を撃破するに勉めたのであるから、此の扁嶺占領に於ける佐々木旅團の戰鬪は、自分は大醇にして小疵と評するのが至當であらふと思ふ。然るにこれから此の敵を撃破した後に於ては實に頗ぶる大變なる大失態を演

じたのである、實に惜しいことをして仕舞たのである。

佐々木旅團とこれが增援に第二師團から出て來た岡崎旅團とは、これを別々に研究するよりも一緒にやる方が便利であるから、今から此の兩旅團に就て研究することにし樣。前述の如く佐々木旅團は其計畫其實施殆んど非難すべき點なかりし爲めに、優勢なる敵の攻擊部隊八大隊餘を物も美事に粉碎して、三十一日午前九時三十分には全く扁嶺附近一帶の地を占領して、潰走する敵に向つて大々的手痛い追擊を喰はせたが。此の旅團も我日本軍の大缺點である所の、彼の戰後の追擊を急にするといふ大切なる注意を忘り、爲めに佐々木將軍が梨皮峪へ向つて追擊隊を進めたのは、實に同日午後零時三十分であつた。これ實に此旅團ばかりでない佐々木將軍ばかりでない、日清戰役にも北清事變にも常に我軍に附き纏ふて居た所の惡るい〳〵大惡慣例であつて、此の佐々木旅團も終に此の惡慣習を脫するを得ずして御多分に漏れざる極々緩慢なる追擊をやつたのは、實に遺憾千萬殘念至極といはねばならぬ。

同旅團が殆んど半夜眠らずして攻擊を準備し、此の嶮峻なる山地に於て我に殆んど倍する程なマルトソン少將の右翼隊を擊破したのであるから、其隊伍の紊亂も容

易であるまいし、又其疲勞困憊も中々一と通りや二た通りではなかつたらふ。それは自分も大に推察する所で同情に堪へぬ次第ではあるが、師團主力をして楡樹林子方面に於て、其攻擊に大困難を來さぬ樣に遠く此の方面から加勢してやらふといふには、單に此の扁嶺に於て敵の一支隊を擊破した而已では不足である。扁嶺から敵主力の背後まではまだ中々に距離があるのであるから、其間に於て今の潰走部隊が何れかの陣地を占めて隊伍を立てなほして、そこで我前進を喰ひ止めたとしたならば何とする。必ずや容易に我が此の佐々木旅團の攻擊大勝利の結果を、楡樹林子方面の敵の陣地まで波及せしむることは出來まい。これ即ち步兵操典第二部第九十七に於て『山地ニ於テハ局所ノ勝敗全般ニ波及スルコト比較的少キヲ以テ云々』とある所以である。左すれば此旅團は一時は勝ちは勝つた樣なもの〳〵其結果は頗ぶる些少な影響をしか、師團全體の攻擊實行の上には及ぼさぬことになるのである。これ位のことは戰術家として有名なりし佐々木將軍の氣の付かぬ筈はあるまい、氣が付いたとすれば先づ第一に敵が潰亂して退却したと聞くと同時に、步兵操典第二部第二十にある『戰勝ヲ豫期シ得ルニ至レバ各級指揮官ハ時機ヲ失セズ追擊ノ準備ヲ爲

スヲ必要トス此際各級指揮官ハ成ルベク前線ニ在ルヲ要ス」の條文に遵がひ親しく其馬を鞭つて扁嶺鞍部にある旅團の戰線に進出して。其隊伍整頓などは後まはしにして、旅團戰線の右翼半部を以て花紅溝より其西北方の、標高六五〇の高地南側をつたふて常に瞰制の位置を占める樣にして、何れかの一聯隊長にこれが指揮を命じて、敵が息きを繼ぐ間もない樣に極々急追せしむるのである。此樣に手速く追擊をせしめたなれば敵は左なきだに敵對すべき氣力を失なつて居るのであるから、如何に好良なる陣地があつても到底踏み止まるといふ樣なことは出來ずして、佟家堡子を目標にもみにもんで逃走したに相違あるまい、――追擊せんでも佟家堡子まで潰走したではないか――此樣な具合に處置すれば我が此の速かに西北進した追擊部隊は、旅團長が扁嶺に到著したといふ午前の十一時頃には、想ふに五虎洞東北高地位までは進出し得たであらふと思ふ。斯くなつたならば老官嶺から王家堡子西方迄に亘つて居た、敵の中央隊も頗ぶる危險を感じて必ず停止しては居られまい。前蒿何子東方の谷地に居た敵の豫備隊の如きは、無論此の追擊隊に手向ふであらふが。其直き背後にはマルトソン支隊の一萬近い人間が、散り散りばら〳〵大潰走をして

居るのに、見あげるばかりの五虎洞東北高地からは三千餘挺の銃數で、不意に拳しさがりに瞰射を浴びせかけられては、これも到底大した抵抗をすることは出來ないにきまつて居る。其間に佐々木將軍は左半部の戰線を、兎も角も至急に集結して、よしや多少の隊伍の混淆位はあつても顧みるに及ばぬ、何でもよいから急速に隊伍を作て其砲兵をも隨伴して、梨皮峪に向て隘路を急進して、敗走したる敵兵を其背後から壓迫しつゝ、五虎洞附近まで勇往邁進するのである。さすれば自分の考では椙原大佐の追擊隊が出發したる午後零時半頃までには、全旅團と砲兵一中隊は多分此の五虎洞東北高地附近に進出することが出來たであらふと思ふ。此の高地から敵の主要な退路までは、直徑僅に三千米突である、それが眼下に見下せるのである。如何に血の通ひの惡るい敵兵でも前に大敵を控へて居りながら、此の大切な一條の退路に近い五虎洞附近に一旅團の我軍に進出せられては、思ふに決して默つてじつとして居る譯にはゆかなんだに相違あるまい。佐々木旅團自身は此の如く電光石火と邁進して置き、さて其實際前進をする間際に於て、今朝以來熟知したる敵情と木越旅團方面の戰況とを詳細に岡崎少將に通報して、速に我が此の追擊運動に協力せ

られんことを希望したならば、彼れも高知生れの血性男兒であるお斷り申すといふて濟しては居るまい。必ず佐々木旅團と其行動を共にして敵の背後を脅かすに勉めるであらふ。左すれば約一師團の歩兵が深く敵の背後に侵入したのであるから、敵は中央陣地を棄てゝ方向を變換し、東小溝附近の高地に據つて死力を盡し我前進を拒止して、其間に於て老官嶺方面の諸部隊を退却せしむるの處置を取る外には、如何に勇敢なるスルチエフスキー中將でも殆んど手段の講じ方があるまい。斯くして兩旅團相協力して敵の退路を脅かしたならば、何の苦もなく此楡樹林子一帶の高地を、此三十一日の午後三四時頃までには占領し得て、軍司令官の目的通りに藍河谷地に容易に進出し得たのは請合で、都合よくいつたならば彼れの敗走に跟隨して寒坡嶺陣地をも、或は奪略し得たかも知れぬのである。

然るに佐々木旅團長の策こゝに出でずして、我日本軍共通の大惡慣習たる一勝を得て安心し、隊伍を整頓して幾分疲勞を恢復し、さてそれから追擊にかゝるといふ樣な頗ぶる手ぬるいやり方をして、しかも僅々二個大隊の追擊隊を出したのはよいが、それが彼の長い〳〵梨皮峪に通ずる扁嶺隘路の中をのこ〳〵進んだものである

から、二三千米突も進むか進まぬ中に、もう左方高地上から少しばかりの殘敵に其行進を遲滯せしめられるといふ始末。それ而已でない他の旅團の大部分は爲すこともなく扁嶺に於て暢氣千萬にも休息して居て。今の先き合頭溝東方高地上に到著した岡崎旅團に向つて、相連繫して前進し樣といふ交渉を始めたが。彼れ歩兵第十五旅團も昨夜殆んど一睡もせずして、此の大炎熱を冒して山地の强行軍を決行して、到著早々敵を擊退したばかりの時であるから。これも佐々木旅團と同樣に、頗ぶる悠然と構へ込んで容易に其交渉がまとまらぬ。それのみでない此の旅團は他から加勢に來たといふ腹があるので、實に慨嘆に堪へぬ次第であるか、一層其追擊のことや今後の動作に就て不熱心である。斯の如くにして貴重なる時間は徒らに費消せられた、實に齒痒い樣である何といふ馬鹿氣た次第であらふ。

其中に井上師團長から木越旅團方面は頗ぶる敵兵が增加して、戰鬪容易ならず困難であるといふ通報が午後一時四十分に佐々木將軍の手に達した。まだ此時からでも遲くはない前に自分が述べた樣な決心を取り、よし師團長から「木越旅團ハ枕山一帶ノ山脈ヲ占領シ、西方千五百米突ノ高地ヲ頑守スル敵ト相對峙セリ」木越少將

ニハ貴官ノ旅團ガ敵ノ右翼ニ進出スルヲ待チテ、其前面ノ敵ヲ攻擊スベク命ジタリ」貴官ハ岡崎旅團ト協力シ、速ニ此目的ヲ達スルコトヲ勉ムベシ」といふ訓令を受けたとしても、直接是非王家堡子西方の敵の陣地を攻擊せねばならぬといふ必要はないから、其敵右翼の背後たる標高六五〇の高地を占領して、歩兵操典第二部第九十五の『一部隊ト雖若最高處ヲ占ムルコトヲ得バ敵ノ動作ヲ觀察スルコト易ク其志氣ヲ挫折セシムルノ利アリ』といふ原則に遵がひ、彼を背後から瞰制して攻擊したならば如何に剛性なる敵兵でも、到底之を持ち堪へることは出來まい。其決心と處置をなして置き、それから岡崎旅團の援助を求めたならば、まだこれからでも十分に戰機を逸するの大失態には陷らなんだのである。然るに此の命令を得た佐々木將軍は、思ふに地形に通曉して居られなんだのが原因でもあらふが、極めて杓子定規なる融通のきかぬ計畫を立て、全力を擧げて直接王家堡子西方の嶮峻を極めたる敵陣地の右端に迫らんと決心し。折角派遣して隘路中の三叉路に停止せしめて居た追擊隊を、迂遠千萬にも自分の居る扁嶺山頂まで呼び戻して、新規播き直しにこれから攻擊をやり直さんとした、それも自分の方では快速に其實際の實施には著手せずして、又々頻りと岡崎旅團の梨皮峪方向への進出を要求したので、疲勞し切つて居る岡崎少將の支隊では、佐々木旅團が難儀な方面を自分の方へ押し附けると考へ、頗ぶる不快な感を起して、其交渉は如何にしてもすつたもんだで纏まらぬ。命令系統を異にしたる同等の團隊が、これを統率するものあらずして協議をしたり交渉したりして、巧に連繫しつゝ戰鬪をし樣とすると、兎角難地を人に讓らんとする樣な傾向が生じて來て、それが原因で無益に交渉に時間を費やす樣なことになるのは、實に頗ぶる其實例の少なくないことであつて、此の佐々木、岡崎兩旅團も先づ一つ兎に角眼前の敵を擊退したといふので、何れも少しく安心した樣な氣味であつたからお互に困難なる方面を他人に相讓るといふ樣な忌むべき傾向を生じて、互に感情を害しつゝ交渉を重ねたので、何時まで立つても少しも纏まりがつかぬ。其中に木越旅團は頗ぶる苦境に陷つて仕舞た而已か、潰走した敵も相當に意氣をもり返して梨皮峪附近には、最早若干の歩騎兵を配して我前進に備へて仕舞たのである。

さて交渉に交渉を重ねた末に長谷川大將のお婿樣なる、佐々木旅團の大尉副官が駈け付けていつて、漸くにして何とか交渉をまとめて歸つて來たが、其時には早や

日沒に間もない時であつて、到底今日の役には立たぬとは知れて居たが、それでも佐々木將軍は、相原追擊隊を呼び戻し、岡崎旅團の一大隊の加勢をも握つて、王家堡子西方高地の敵の右翼を攻擊せんと必死に計畫して居たのであるが。此の兩旅團長の心の底に友軍たる木越旅團の危急を救ふといふ誠意が少ないのは、此の交涉の手間のとれたのでも見へ透ひて居る、上に見習ふのは部下たるものゝ常態であるから、折角兵を集めて加勢に來樣として居た馬場大佐は、相原追擊隊の歸還して來るのに出合ふて、これは今日は攻擊を中止したのだと速了して、何等の問合せも交涉もせず勝手に其旅團の方へ歸つて仕舞たので。午前九時半に敵を擊破したる兩旅團は、午後一時四十分に木越旅團の爲めに是非敵を擊破せねばならぬ必要を知りながら、終に何ごとをも成さずして便々として交涉に憂き身をやつして、此の日沒に及ぶ迄も何事をもなし得ざるに至つたのは、何といふ腑甲斐ない無責任なことをしたものであらふ。敵を破つてから後時間は殆んど十時間を過ごさねば日はくれぬ、木越旅團危急の通報が來てからでも、時間は優に五時間の餘あつたのである。それに最も好位置にあつて敵の退路を全く遮斷するを得べき兩旅團は、爲すこともなく連繫と交涉に一秒千金にも換へ難い貴重な時間を、惜しげもなく十時間まで浪費したとは、實にいはふ樣なき兩將軍の大倦怠である大不熱心である、言語同斷沙汰の限りといはねばならぬ。

歩兵操典第二部第十四に曰く

『隣接スル部隊或ハ同一目的ニ向ヒテ戰鬪スル部隊ノ指揮官ハ相互ノ連繫ヲ保ツコト緊要ナリ然レドモ唯連繫ニノミ留意シテ自己ノ任務ノ遂行ヲ躊躇スルガ如キハ嚴禁トス』

日露戰役後の改正歩兵操典に此の樣な禁令が特筆大書せられたのは、抑何人の失態からであるか何人の倦怠からであるか、これ決して外の場合から來たのではあるまい、思ふに此の佐々木、岡崎兩將軍が全軍勝敗の分け目といふ大切なる戰に於て、僅かに部下の疲勞を回復させたいといふ樣な、極めて些細な姑息極まる考からして、空しく連繫の交涉に憂き身をやつして、立派に籠の中まで飛び込んで仕舞た小鳥と同樣なる敵の第十軍團を、何事もなく安々と寒坡嶺の線まで彼れの任意で退却するといふ樣な結果に終らせて仕舞たのが、即ち此樣な禁令を操典の上に是非とも揭載

せねばならぬといふ、遺憾千萬なる主たる大原因となつたものであつて。其の第一番の責任はたしかに佐々木將軍の肩に擔ふべきものであるが、更に岡崎將軍とても同じく容易ならざる輕からぬ責任者であるのである。たしか此戰鬪の後であつたと思ふ口さがなき滿洲軍中の京童は、左の如き都々逸を作つて軍中諸所で盛んに歌ひはやしたといふことである。

『連繫々々とお讓りあひで　右も左も居ずくまり』

何と如何にも寸鐵骨をさすの概があるではないか、もし兩將軍にして之れを聞かば果して如何の感がするか、思ふに慚汗其背を沾ほすを禁じ得まい。これを要するに失禮ながら佐々木直中將閣下は、早朝の攻擊全く自己の計畫通りに實行せられて、八個大隊の大敵を粉碎し得たので心中大に滿足して、更に自己が楡樹林子方面の師團主力の攻擊の爲めに、助攻をするの任務があるのであるからまだ一歩を進めねば、これだけでは其助攻の効果が少ないといふことに氣が付かず。加ふるに昨夜以來の不眠不食の激烈なる行動と、此日炎熱の非常に高度なりしと此の邊の山谷の極めて急峻なりしとで、部下全體が少なからず疲勞した有樣を見て、更に之に强ゆるに追

擊の大激動大急進を以てするに忍びずして、つい彼の歩兵操典の

『第二部第七十四　凡ソ戰勝後ニ於ケル一般ノ狀態ハ動モスレバ現況ニ眩惑シテ半途ノ成功ニ甘ンジ往々果敢ナル追擊ヲ躊躇シ功ヲ一簣ニ缺クニ至ルコト多シ故ニ各級指揮官ハ敵兵退走セバ直ニ猛烈ナル追擊ヲ始メ之ヲ窮追シ敵ヲ殲滅シテ戰勝ノ効果ヲ完ウスルコトヲ勉ムベシ』

とある戒告を全く閑却して仕舞て、頗ぶる時機に適せざる追擊のやり方をして仕舞たので、其間に敵は幾分準備が出來て追擊部隊は出るとすぐに其行進を遲滯せしめられるといふ有樣。更に井上師團長から敵の右翼を攻擊して遠く木越旅團を援助せよとの命があつた時に、其儘全力を擧げて今現に出してある追擊隊を前衞として、敵の右側背へ深く進入するといふ策に出ですして。自分の旅團は一先王家堡子附近へ集合して、直接に敵の最右翼端に向て攻擊し、追擊の方のことはこれを加勢の岡崎旅團に一任し樣とした。これ決して全然誤まりたる處置ではない、其現在の軍隊の位置からいふて見た時には、斯くするのもたしかに一の方法であるが。一方からこれを少しく僻んで考へて見ると、自分は多くの運動を要せずして安全なるしかも

大なる敵と遠く離れた王家堡子の敵を攻撃する、つまり比較的樂な任務をやることにして。藍河の左岸には隨分大なる敵の第二線があるらしいのに、今到著したばかりの敵情も知らぬ、而かも他師團から加勢に來た歩兵第十五旅團を、敵の第一線と第二線の中間の、極く危險と思はれる處へ深入して追擊前進せしむるといふのは、如何にも佐々木旅團のやり方が狡猾であるづるいやり方である。其樣な横著なことを先きでいふならば、こつちは此所から前へは一寸も出まいといふ樣な感情的な僻根性を抱いて、何といふても快よく其交渉に應じなくなつたのであらふ。それで全然此大好機を逸し去らしめたのである實に殘念なことであつた。が此樣な場合には兎角感情問題の起り易いものであり、又一方助攻の眞責任は佐々木旅團にあるのであつて、岡崎旅團は他からこれが加勢に來たのであるから、佐々木將軍たるもの此所は少しく深く其事情を考へて、何も強がち必ず王家堡子の方から攻擊せねばならぬことはないのであるから。彼れお客分扱にせねばならぬ岡崎旅團には扁嶺附近を守り且つ王家堡子附近の敵が、佐々木旅團の深入り追擊を妨げぬ樣に牽制する處の、少しく働き方の少ない先づ比較的樂な樣に見へる任務の方をやつてもらふ樣に御依

賴して。さて既に自己旅團は扁嶺隘路の中央まで二個大隊も出してあるのであるから、此の旅團は左方の高地をつたふて五虎洞東北高地の方に向つて、外見には最も骨の折れさうで且つ一面少しく危險と思はれる方の任務に當りさへすれば、それでも己れは嫌やだ動かぬとは決して岡崎將軍もいはなんだに相違ない。左すれば敵は我此の佐々木旅團の猛烈なる追擊に餘儀なくせられ日沒を待つことが出來ず、此日の中に退却をせねばならぬ樣になり、終には大潰走に陷つたかも知れぬのである。これ蓋し佐々木將軍の他師團から加勢に來た岡崎旅團に對するに當つて、思ひ遣りが薄く思慮が少しく足らなんだのであると自分は思ふのである。

更に又岡崎旅團長もよろしくない、よしや前夜一睡もせずして、六七里の非常に困難な山地の强行軍をして、著くや否や敵と相當に烈しい戰を交へ、終に敗走する敵に大打擊を加へたのであるから、其疲勞と其困難實に御推察に堪へぬけれども、隣接せる佐々木旅團は今から攻擊困難を極めて居る第十二師團の右翼隊に遙かに應援する爲めに、更に二度目の攻擊をするといふのであるから、交渉があつたならば『よし來た』とばかり直に快くそれに應じて、速に急追擊をすればよいではないか。

實際をいへば佐々木旅團は今朝の攻撃に隨分骨を折つて居るが、岡崎旅團はほんの合頭溝東北高地の一大隊足らずの敵と戰かつた外には、追撃射撃に加はつたといふ迄であるから、行軍で隨分疲れては居るけれどもまだ大したる戰功は立てぬのである。今から一氣呵成に唐家堡子から梨皮峪に向て高地稜線を傳ふで疾風の如く前進し、大に敵の潰走部隊の背後を蹂躙したならば、敵は全く秋の木の葉の散る如くに散亂して、佐々木旅團の勇戰にも一層ましたる大勳功を樹て得られたに相違ない。若しも敵の第二線が藍河左岸に隱れて居て、左側面から此の追撃隊を壓迫したとしてからが、退路の方には嚴然として佐々木旅團が控へて居るので、左まで大なる危險の生じ樣筈はないのであるから、速に此の交渉に應じて思ひ切つて一奮發して友軍援助の實意を發揮すればよかつたのである。

『歩兵操典綱領第六　協同一致ハ戰鬪ノ目的ヲ達スル爲最モ重要ナルモノニシテ命令ヲ以テスルノ外各人ノ獨斷專行ニ待ツモノトス蓋シ兵種ヲ論ゼズ指揮官タルト兵卒タルトヲ問ハズ各自己ノ任務ノ遂行ニ努力スルハ即チ協同一致ノ趣旨ニ合スルモノニシテ戰況ノ變化ニ應ズル臨機ノ手段ハ一ニ各人の獨斷ニ待タザルベカラズ而シテ獨斷專行ハ必ズ軍人精神ヲ基礎トスル公義心ニ出テ時トシテハ自ラ任ジテ友軍ノ犧牲トナルノ覺悟アルヲ要ス』

岡崎旅團長は戰後此の綱領の第六の末文を讀んで、思ふに其心中忸怩たるものなきを得なんだであらふ、若しも此の綱領の末文が此の時此の將軍の心中に横溢して居たならば、よしや佐々木旅團が少し横著なことをしてからが、其樣な些細なことに頓著せずして、木越旅團の急を救ふ爲めには思ひ切つて、如何なる危險をも冒すべきである。つまり友軍の犧牲となるの覺悟を忘れなんだならば、我追撃してゆく道路からは二千米突餘も離れて居る、藍河左岸の敵などにびく〳〵して居るべき筈のものであるまい、況んやそれも居るか居らぬか知れざるものであるに於てをや。これを要するに此の兩旅團長は、何れも其心中に此の綱領第六の覺悟が缺けて居て、眞實に心底から友軍の犧牲となるといふ覺悟がなかつたのであると評されても一言の申譯はあるまい。

まだ非難は決してそればかりでないその上に、炎熱と山地との苦勞の爲めに唯だ目前の淺薄極まる愛に溺れて、姑息に部下を可愛いがつて

『歩兵操典第二部第七十六　戰鬪後ハ勝者ノ疲勞モ亦大ナリト雖敗者ハ體力氣力共ニ一層困憊シ其疲勞ハ殆ンド極度ニ達スルモノナルガ故ニ勝者ハ一意追擊ヲ續行シ以テ最終ノ勝利ヲ完ウスベシ此際各級指揮官ハ部下ニ對シテ過劇ノ動作ヲ要求スルコトヲ避クベカラズ』

とある此の末文の戒めを兩將軍ともに忘れて仕舞て、少しでも自分の部下に多く休憩させたいといふ樣な、頗ぶる婦女子的な甘い〳〵愛情の爲めに、此の大切な場合に思ひ切つて　陛下の爲め國家の爲め、心を鬼にして疲憊の極にある部下を更に一層鞭韃して、敵を一擊に粉碎し盡さうといふ、大切なる勇氣と意氣を缺いたのは、實に返す〳〵も殘念千萬なことであつた。讀者諸君よ將來もしも此の樣な場合に立つたならば深く〳〵此の兩將軍の失態を鑑として、再び我大日本軍中に此樣な不祥なる失態なからんことを望むや切なりである。故に頗ぶるくどい樣ではあるが評者は何遍も〳〵繰り返し〳〵て之を研究した次第である、決して評者が意地わるく皮肉に兩將軍を非難した譯ではない、これは何卒御本人はもとより讀者も其眞意のある所を諒として頂きたいのである。

此楡樹林子の戰鬪はこれで終結したのである、八月一日の戰鬪はつまり敵の任意退却の後衞と、少しばかりの小戰を交へた而已であつて、さして研究する程の價値はないのであるが。前述の如き岡崎佐々木兩旅團の躊躇逡巡して居たに關せず、敵は頗ぶる此の方面の兩旅團から其退路を脅かされて居るのが危險なので、終に此の夜に於て此の堅固なる陣地を棄てたのである。それから考へても勝に乘じて突進したならば、敵の窮狀が如何に醜るしかつたかは想像するに難くないではないか。

更に最一つ此日の井上師團長の位置に就いて、自分は大いに意見があるといふのは、餘り何れの旅團の位置へも遠く離れて居らぬに關せず、終日欒家堡子を離れなんだといふのは不同意である。元より上級指揮官が無暗に動いてくれては困るけれども、此場合正午前に於て扁嶺方面の勝利は師團長に報告され、又岡崎旅團の到著も明らかになつた筈である。然るに楡樹林子の方は頗ぶる敵が頑强に死守するのであるから、此方面から容易に攻進の出來ぬのはもう此時には師團長には判斷されたはずである。左すれば此方面の危險のない樣に若干の豫備隊を木越旅團に送つて置き、其他のものを提さげて成功したる佐々木旅團の方へ進み、自から此の兩旅團を指揮

したならば、どん栗のせいくらべとは異つて上官が之れを命ずるのであるから、頗ぶる此方面の動作が圓滑に活潑に出來たに相違ないと思ふ。前にも述べたが兎角此の命令系統を異にしたものが共和政治で戰爭をし樣とすると、權限の爭ひが生じたり感情の衝突が起つたりするのは常態であるから、眼が離せぬといふ程に木越旅團の方が危險でない上に、此方からは到底攻擊を進捗せしめ難いのは、確かに此日の正午頃には大略知れて居たのであるから。前へに述べた樣に速決して自から扁嶺方面の戰線に立つて、此の兩旅團を指揮したならば頗ぶる好都合であつたらふ、これは決して井上師團長の過失とまでいふべきではないが、自分は此所にじつとして居るよりも、左樣にした方がたしかによかつたらふと思ふのである。

先づこれで此の楡樹林子戰鬪の我軍の研究は終ることにするが、細部に涉つて調査して見たならば、まだ〳〵澤山に過失も缺點もあるであらふが、かくまで大なる失態があつたに關せず、終に敵が此夜の中に退却せねばならなんだといふのは、要するにこれ佐々木旅團がマルトソン支隊を粉碎したからであつて、後の躊躇の爲めに此の大勳功を沒する樣なことがあつては決して〳〵相成らぬのである。

終りに當りて例によりて此戰に於ける露軍に就て、概略の評論を加へて見樣と思ふ。敵はこれより先き我第十二師團に大切なる橋頭附近を奪略せられて以來、遼陽及奉天に大なる豫備隊が備へてないに係はらず、太子河附近の兵力が頗ぶる薄弱になつたので、此方面に我が第一軍が轉進して、直に根據地たる奉天又は遼陽を衝かれては一大事と、頗ぶる此方面に苦心慘憺たるものがあつた。でクロパトキン大將は孤家子に退ぞいたゲルシエリマン少將支隊の方に向つて、大に各兵種の增援隊を急派して。樣子嶺の方でば防禦を爲さしめて敵を此方面に牽制して、此の楡樹林子の第十軍團の方から攻勢に轉せんとしたので、歩兵十八大隊騎兵十二中隊砲五十五門といふ大兵が、七月二十一日には此の方面に集合したのであるから、グルシエリマン少將は此全力を擧げて攻擊を行なはんとしたが。クロパトキン將軍は急に命令を下して軍團長スルチエフスキー中將の到著まで、眞面目の攻擊をしてはならぬと、大に意氣込んで居た攻勢移轉のゲルシエリマン將軍の腰を先づ第一番に打ち折つた。蓋しこれ我軍に於て此の橋頭附近に近衞後備旅團を加へるといふ評判に聞きをぢして、不決斷なる同大將が攻擊中止を命じたものであらふ。

併し實際此時の我第十二師團方面には、近衞後備旅團が增加することに決定したまでゝ、實際の兵力は一個師團弱である、即ち其總兵力は歩兵十二大隊、騎兵三中隊、山砲三十六門しか居らなんだのである。これをゲルシエリマン少將の兵力に比較するといふと、歩兵に於て六大隊騎兵に於て九中隊砲兵に於て十九門といふもの、露軍の方が我第十二師團より優勢であつたのである。からして若しもクロパトキン大將が餘計なおせつかいをせずして、此の敗軍の責任あるゲルシエリマン少將に一任して置いたならば、彼は此の七月二十一、二日頃から攻擊を始めて、爲めに我軍は頗ぶる的の大狼狽に陷り、或は橋頭を再び敵の手に渡す樣なことになつたかも知れぬ。よしやそれまでになくとも少なくも、我が黑木將軍が防禦が不可能であるから攻擊するといふ、頗ぶる果斷なる決心をする上には、この攻擊が大障害大影響を來して終には退嬰主義を取るに至つたかも知れぬ。何れにしても此のゲルシエリマン少將の頗ぶる堅固に張りつめたる攻勢移轉の腰を、遠慮なしに物も美事に打ち折つたるクロパトキン軍司令官の不決斷は、此戰鬪不結果に陷る第一の大原因であつたのである。

更にクロパトキン軍司令官は、南方方面の指揮をザルバエフ中將に委任して、自から東方正面に向つて攻擊を指揮せんと決心して、其決心の次第をアレキセエフ極東總督に報告して、東部支隊の樣子嶺にあるもの歩兵二十四大隊、騎兵十七中隊、砲六十八門と第十軍團即ち孤家子大安平附近にある歩兵二十四大隊、騎兵十二中隊、砲九十五門と、及び第十七軍團の歩兵十六大隊、砲八十四門を合せて、合計歩兵六十四大隊、騎兵二十九中隊、砲二百四十七門といふ隨分少なからざる大軍を指揮して、大攻勢移轉を計畫したのであるが。其第一の手始めに折角攻勢移轉の意氣込みで居た、最先頭のグルシエリマン支隊の腰を先づ第一に折つた上に。最早軍團長も到著し兵力も愈〻整備して、軍團長スルチエフスキー中將は、直接間接に數度敵情の偵察をもなしたる後、今迄後衞と稱へて居た最先部隊を前衞と改稱して、二十九日には扁嶺附近から劉家堡子西方高地に亘る山脈を占領して、七月三十日に於て愈〻攻擊前進に移らんとして居ると。又しても八月二日に第三師團の一旅團が遼陽を發して、第十軍團の增援に參る筈であるから、それが到著するまでは前進すべからずといふ命令で、また〳〵此攻勢移轉の意氣込み切つたるスルチエフスキー中將の腰を

も打ち擢いて、遠慮會釋もなく其部下の計畫を第二番目に打ち崩した。然るに當時我軍に於ては前に既に述べた通り、其正面が過廣であつて到底防禦には手が足らぬので、思切つて敵の仕度の出來ぬ中に攻勢に轉じ樣として居たのであつて。若しも此の二十一日頃なり又は三十日になり、敵から先制の利を占めて猛然として我に向つて攻擊して來られたならば、其第十二師團の困難は實に頗ぶる甚だしきものであつたらふ。勿論十二分に不時の準備はして居たけれども、敵に先きだつて攻勢に轉せんとして居たのであるから、そこへ優勢なる兵力を以て遮二無二敵が攻進して來たならば、第十二師團は大に其手筈が狂つて少からず困難するであつたらふに。實に我軍の爲に極々都合のよい樣に一度ならず二度迄も、自己軍の攻勢の意氣込に向て惜氣もなく大打擊を與へてくれたのは、我第十二師團の爲めには感謝すべき次第であるが、彼れクロパトキン自身の軍の爲めには頗ぶる重大なる不利であつた。蓋しこれ此の大將の性質が餘りに大事を取り過ぎて、且つ思ひ切つたる決斷が乏しいのゝ致す所であつて。これを我第一軍司令官黑木將軍の防禦が不可能であるから、斷然攻勢を取ると決したる勇ましき男らしき態度に比較して見ると、其覺悟の上に實に雲泥萬里の差異が明白に認め得られるではないか。斯くの如くにして我野外要務令の綱領に於て

『指揮官ノ最モ戒ムベキモノ二アリ曰ク爲サヾルナリ遲疑スルナリ苟モ之ヲ爲シ之ヲ斷行スレバ縱ヒ其方法ヲ誤マルモ尙ホ爲サヾルト遲疑スルトニ愈サル蓋シ此兩者ノ軍隊ヲ危殆ニ陷ル、コト實ニ方法ヲ誤ルヨリ甚ダシキモノアレバナリ』

とある鑑戒を無視して、自身大兵を握つて攻勢に轉せんとして居りながら、幾度も幾度も之れを中止せしめて、徒らに張りつめたる意氣を沮喪せしめて、其無形上の損失の絕大なるを顧みずして、頻りと兵力の增加に而已憂き身をやつして居る中に。忽ちにして我が黑木將軍から慧眼機敏に其內情を看破せられて、一足の違ひで我より攻勢に轉せられて仕舞たので、此の楡樹林子方面に於ては、例のタンボフ步兵第百二十二聯隊でも、又彼のマルトソン右翼隊の八個大隊でも。軍司令官から其腰を折られ〳〵した爲めに惰氣滿々として終に大油斷を生じ、何れも此日の早朝に實に散々なる敗け方をしたのである。要するにクロパトキン大將の不決斷は頗ぶる苦境に立つたる我第一軍に、最も都合のよい活路を與へてくれることになつたので、